

北辰會

明治四十年六月二十五日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第四拾八號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第四十八號目次

論 說

- 新渡戸博士の演説……………鬼川 老夫
- 空想的生活……………千 田 生
- 作文問答……………其 月 生

雜 録

- 伊丹鬼貫……………紫 影
- 歴史的諺(續)……………浦井 恒堂
- 滿韓瞥見記……………入 江 生
- 裸蠟燭……………平松 萍水

文 苑

- 狗 兒……………靜 池 庵
- 破格四章……………湘 雲 子
- もぐら……………渡邊 庸三
- わかれ……………てんなん
- 四高俳句會席上即吟……………

北辰時評

- 暗流録……………空白洞主人
- 狂夫言……………河 合 生
- 永井恩師を送る……………河 合 生
- 塾の勃興……………河 合 生
- 金曜會に望む……………河 合 生
- 病友小笠原秋水兄に與ふ……………河 合 生
- 南下録……………河合 良成

附 録

大學通信欄を設く

四高出身者をして母校を忘れしむべからず、吾雜誌部は此の旨意に基づき東京及び京都大學通信欄を設く。必しも通信たるを要せず、論說可也、詩文可也、吾部は紙面の許す範圍に於て悉く之を掲載せむ。卒業生諸君、幸に母校を忘るゝなくば時に玉稿を北陸の天地に飛して後進を掖導するに吝ならざれ。大學通信欄を餞として卒業生諸君を送り奉る。

雜誌部委員

北辰會雜誌第四十八號

論說

新渡戸博士の演説

六月五日第一高等學校長新渡戸稻造先生來澤の折、吾講話部及び演説部の乞に應じて一場の演説を試みらる、其要旨次の如し、文責固より筆者に存す。

午後三時に參ると云ふ約束をして置きながら、三十分許も御待たせ申したのはどうも濟みませぬ。併し一躰日本の風習では少し待たせた方が趣きがある、而して今日は其趣きをつける必要が特にある。其譯は諺にも「口わいて腸見らる栢榴哉」とある様に、今日はいうんと心の底から御話をしたいのですが、何を云つても東京を出てから三日、夜の目さへ碌に眠らぬ仕末、その上胃腸を痛めて下痢をするので二三日前から粥腹だ、加ふるに今朝から演説は三度目、最早躰力も腦力も盡き果て、仕舞つたが、さすがは金澤の最高學府、此處で見苦しい演説もできぬ、と云つて立派な演説が出来る筈がない。せめてのこと少し待たせて趣きをつけてやらう。と思ふて態々遅れて來た譯では決してない。(大笑)實は先程高等女學校へ行つた處是非一つ喋舌れとの事で、貴婦人に對して無禮も出來ぬと思つて、乞はるゝまゝ暫らく話をして居たから遅れたのです。

今日は私が常々諸君に希望して止まぬことを一つ二つ申上ります。實際私が學生諸君に望んで居ることは決して二三ではありませぬ。一昧教育家ほど學生に對して多くの注文を持ってゐる者もあるまいし又社會から多くの注文を受ける者もあるまい。私が嘗て臺灣で殖産局を預つて居た時、それは／＼種々な奴が来る、いや森業をどうしろの、砂糖をどうしろの、樟腦をどうしろのと門前市をなす様でした、農商務大臣などは嘸ぞ苦しい事と當時私に御察し申して居たが、今又文部省へ入つて見ると又決して殖産局に劣らぬ。或人は現今の學生は悠弱だと云ひ、或人は粗暴だと云ひ、或人は學生の頭を五分割にしろと云ひ、或人はそれでは外國の囚人の様だから、少しは僕の頭の様に(頭を撫でつゝ)ハイカラ式に長くするのがよいと云ふ。實に其注文は凡て御尤だ。そこで僕が只今諸君に對して希望を述べるのも實は僕の希望でなくして世界が僕に注文したことを諸君に再び注文するに過ぎないので、従つて其注文も一個や二個には止まらぬが、今は時間が許さぬから其の中の重なるものを一つ二つ述べやう。

第一に近來の學生の風を見るに、學問があまり爲し易くなつたので、骨折るのに見當違をして居ないか知らんと云ふことである。近來字引が非常に流行する、而して其結果即成的學問が勢を得る、字引の流行は必しも悪いと云ふではないが、その買手は、學校教育を満足に受け得なかつた隱居連や、御老婆さんでなくして、若々しい勉強最中の學生に最も多い。勿論學生が字引を買ふのは飴だの豆だのを買ふのには勝つて居るが、字引によつて勉強するのは少し考へ物だ。一昧日本の教育のやり方は、と云ふて僕は文部省の方針を攻撃するのではない、僕の位置にも關すること

だから(先日の雨漏攻撃事件を皆々連想したらしく大笑喝采暫し止まず)。歐州の事までも攻撃する必要がないから範圍を日本だけに止めて云ふと、日本社會一般のやり方が自己に餘る學問をす癖がある様だ、例へば小さい蟻が大きいパン片を振りかざして居る様である。元來日本人は根氣の弱い人種だ、勿論其大原因は食物即ち肉食の不足に存して居て、之を根本的に救済するには人種改良を施すか若しくは差當りて撰抜試験でも行つて之れなら屹度望のあるてふ人間のみに一日三磅位の牛肉でも與へる法案を出して議會を通過させる様な所謂國家社會主義でもやつた方が甚だ宜いと思ふがこれは未來の問題で、今日の處では力の及ぶ範圍内に於て救済策を講せねばならぬと思ふ。

あまり自己の力以上の書物を讀んで力以上のことを無暗と考へるものだから華嚴の瀧へなぞ飛び込みたくなるのだ。諸君がいかほ必力に余る書物を讀んで居るかは一寸諸君の書物につけてある假名を見ればすぐ解る(大笑)、文字は一頁に三百字、假名は凡そ千字、決して虚言でない。例へば and と云ふ字を引くと、而して、及び並に、など幾つもあるこれを皆書物にかき入れる。三百字が千字になるのも別に不思議はないと思ふ。字引が近來大流行するのも是か爲めである、一昧今の學生は重い荷物を背負ふことばかりを知つて居て書物の中に生々と動いて居る考を *read* する力がない。即ち牢固なる確心がないから駄目だ。渴したるときにはコップをぐつと掴んで一息に飲み乾せば其れでよいのに、靜にコップを取上げて、此のコップは滑かだとか、倒にすれば水が覆る、勸工場へ行けば拾錢許だらうなと、ハ、ラ、ク、ラ、ととしてつまらぬ批評ばかりをして大切

な水を呑むことを忘るゝ様なものだ。

私は明治十六年頃十九才で北海道から東京へ出て来て暫く教師をやつたが、其後農政學を研究する爲め大學へ入りました。恰その時米國の友人から Henry George 著の Progress and Poverty なる書物を送つてくれました。話が少し横道へ入るが御參考になるかも知れぬから申上るのです。その書物が非常に氣に入つたものだから私は講義の最中には讀まなかつたが時間のひまには必ず讀んで居た。或日外山博士が早く教室へ入つて来て何を讀んでると尋ねたから其書名を云ふた。すると先生は其書物は面白そうだから譯して見よと云はれたが、出版年月を見ると既に八年を閱して十一版を重ねて居るのでまさか此の様な有名な書物が日本へ紹介せられてゐない筈はないと思つて大學、上野等の圖書館を探したが見當らぬ。そこで僕はつくづく考へた。さすがは東洋の隅にある小島程ある、其落着いてゐることは實に感心なものだ。併し此の感心ばかりは感心に甘んずる譯には行かない。此様な島國に居て島流しになるよりはと思つて早速米國へ飛出した。米國へ飛出して大學へ入つて見ると農政學と云ふ者はない、それは獨乙國家は御婆さんの臺所までも干渉する國柄だから農政學などは立派な者だが英國は個人主義の發達した處だから國家が農業などに干渉せぬ、従つて農政學などが起り様かない、仕方がないから最も近寄つた者と思つて經濟、歴史、政治等を研究した。處が書物が非常に軽い、僕等が大學の二年で外山先生に教はつた、ミルの經濟、スペンサーの社會學などが堂々たる米國大學の參考書となつて居た。それで僕も一時は驚いたが一年と經ざる中に其の教へ方の根本的より異つて居るのを發見した。同じ書物

も其用法によりてはいか様にも用ゐらるゝものである。例へば此の水入れにしても、さすがは高等學校ほどありてビールの空瓶を持って来ては無い、立派な水入れが置いてある。併し此の水入を田舎の百姓の家へ持て行けば必ず床の間に飾つて置く或は線香位は立てそうだ(大笑)、又此を貴人の家へ持つて行かば必ずや臺所の隅におし込められる。かくの如く生活程度の差によりて水入れの位置が變する如く、頭の發達の程度によりて同じ書物でも其の價か違ふ。僕等が大學で習つた時分はミルなぞか漸く解りかけた頃合で頭の頂にチョイト上つて居た位であつた。従つて少し頭を動かせば之れこそ大變、直ちに落ちて碎けて仕舞ふ、中々下腹の所まで行く處の騒ぎでない。それで動くもするとミル曰く何々と立派に論じ立てるが少し深く入りて質問されると答へるどころか目まひが来る程であつた(大笑)。僕は外山博士を決して悪く云ふのではないが、外山先生の當時のやり方は一日に二十頁もズン／＼御經を讀む様に讀んで以て講義にかへられたのである、此れに反して大學でアダム、エリーなどのやり方は一章一章毎に分別をつけて此の論はミルが後年取消したとか、此の論調は當時の反對者の誰れに答へてるかど精しく説明するものだから中々面白く讀まれる。兩者を比較して見ると非常なる徑庭が存して居て恰も水入れがその階級に従つて用を異にすると同じい。

元へ戻つて書物の讀方に付いて考へて見ると、現今多くの學生の讀方は物を考へるてふ大切な力を悉く字引を引く方に用ゐて、思想を練るよりも其用意の爲めにエナーヂを凡て用ゐて仕舞ふ、だから字引を引き終ると頭がガツカリして何か書物に書いてあるか少しも解らぬ。僕等の先輩が

書物を讀むにいかなる見識を以て讀んだかについて一つ二つ話をしやう。

或時福澤先生の弟子が英書を譯してゐて非常に苦心してゐるらしくつたから福澤先生が何を苦しんでると尋ねた。弟子は此の *That* が解りませぬと答へた。所か福澤先生はその様に邪魔になる *That* ならばその *That* を省いて仕舞へど云はれた。僕は勿論福澤先生の言を以て万全なりとは思はぬが只その讀書するに至りての見識が偉いと思ふ、例へ譯が間違つて居ても其見識が偉いと思ふ。又此れも維新の始めの話のだが或る當時の英學書生が四五名集まつて英書を讀んで居たが *It was necessary to found a bank in London.* と云ふ句に來つてどうしても解らない。Found を引いて見ると、見出せし、建てる。直ちに「ロンドンに土堤を建てる」と譯したが少し考へて見るとロンドンにはテームス河に跨つて居る、古い市であるから今まで堤防のない筈はない、修繕するならまだしもだが、建てるとは變だ、これはどうも間違に相違ないと皆が思つたので此度は *necessary* と云ふ字を引いて見た。所が「必用なる」てふ形容詞の外に便所と云ふ名詞の譯があつた、一人が取り敢へず奇説を立てて曰く「ロンドン」は大都會なるを以て臭氣の泄るゝを防ぐ爲めに便所の周圍に土堤をつくりしなり」と、衆議此に於て一決せりとのことである。勿論此の譯は奇想天外的でいかにも誤謬には相違ないが僕は今の學生にその考と見識とを欲しいのである。例へ誤れるにもせよ、僕はこう確信するてふ意見を立てて貫ひたいのである。これが僕等御互に人格を修養するに必要な *mental conviction* を涵養するのです、只智識のみを並べたのはへたな見世物同様に何にもならない、自分は何れの説を取る、自分は孰れの考だ此の説の爲めには命も惜くない

と凡てのことを此の筆鋒でやると自然と心の中に自信自覺の念が確固となる、百千冊の書物を讀破して居ても此の確念のない人間はフラ／＼と／＼して居るから駄目だ、六ヶしい書物を苦しひ思をして讀むよりも平易な書物を確かりと讀む方が遙に宜しい。僕の友人が或時旅行をして旅宿に泊つた、處が隣室に二人の漢學者が激論をやつてゐる、甲は非常に博學に見え乙はあまり博學らしくはないが頑固だ、甲は盛に通鑑、漢書などを引證して乙を破らむとするが乙は少しも動かない、が併し乙の云ふ所には論が通つて居て前後の關係より推定する所などは甚だ甘い、それで甲は一赫君は何を讀んでその様な頑固な説を吐くかと聞くと、乙曰く「僕は通鑑も漢書も何も知らぬ只十八史略を十數回讀んだばかりだ」と。一見甲の陣立は立派そうに見ゆるが恰も弱兵が旗を雲の様に靡し、太鼓をドン／＼叩きて大軍を率ゆる様に見せかけると同様であつて、其の旗の色たるや赤白黒等四分五裂少しも統一が付いてゐない、此れに反して乙の陣の立てかたは少數の兵力であるが、皆が共同一致して、確固たる信念を有して居るのだから決して敗れぬのである。兎も角書物の讀み方は直ちに人格に影響を及ぼすこと甚だ大なるを以て、吳々も注意せねばならぬ、いかに文字の上ばかりを讀んでも *mental indigestion* のは駄目だ、*moral indigestion* では駄目だ。頭にばかり澤山入れて、否な頭に入れるではなく頭の上に重い物を載せて足がフラ／＼してゐては何にもならぬ。

然らば書物をどうして讀めばよいかの問題を論じて見よう、

諸君が毎日講義を聞く時にしても或はハッキリ頭に入るかも知れぬが又入らぬかも知れぬ、解ら

ぬのに解つた振をするのは之れ自分を欺くのである、又先生も少し解らぬことを解つた様な振をすることもある、聞かてゐる諸君も解らぬから解つた振をする之れは師弟共に自分を欺き他人を欺くものである、又意地の悪い先生は生徒が質問するとこんな事が解らぬかと云つて怒る、質問せずとも質問しさうになるとこんな易ひ事が解らぬかと云ふ顔付をする、その癖先生も解らぬのに、すると生徒もあまり易いことを問ふのを耻ぢて解つた振をするこれも双方を欺くものである。此んな例は決して珍しくはない。此れは學生にも先生にも確固たる見識、自覺が欠乏して居るからである、諸君は Information の爲めに學問をしてゐるのではない、Discipline の爲めに學問して居るのである。して見ると確信のない學問は何の用をなすか、學問が諸君の建築物の根本となるものであるのにその土台たる學問がアヤフヤ的の學問では建築物も甚だ危険なるものと思ふ。僕は二三の學校で試験して見た話だが此のゴップを取上げて一人の生徒に「これは何だ」と尋ねた。曰く「ゴップです」と、僕は第二の者に「これがゴップか」と反問した處「カッパ」ですと答へた、重ねて「カッパ」かと第三の者に問ふた處「イヤ硝子です」。「硝子ですか」と第四の者に尋ねると「グラス」です、第五の者は「水のみ」です、若し一部の御方に尋ねたら動産ですと云ふかも知れない。こつぷですかと尋ねた時に然りこつぷですと答ふれば満点で及第をする所を自信なき憐れさには多くの學生は余を満足せしむることかできなかつた。又僕が今突然「渡邊」と大聲で呼べば渡邊と名乗る人は必ずやドキリとするでせう、かくの如きも心中泰山くづれ來るも動せずと確信なきに因るので、現今の學生諸君に望むは只此の Conviction に存するので、此の確心

を心に貯へて書物を讀めば書物が自ら頭に入つて決して眩暈を起すことなきことありませぬ。諸君は中流以上を形成する人々にして、從來社會の主動者として指導者として活動せらるる御方であれば一層此の自信自覺の念を必要とするのです。日本は幸に露國に勝つを得たりと雖も日本の精神的方面は必しも軍備と歩調を一にせると云ふ譯でもあるまい。されば今の時最も必要なるは智識即ち Information にあらずしていかにかこの智識を支配活用すべきかの Conviction である、日本の國民は少しも當にならぬ國民である、軍事に於て成功したにしろ此れは決して永久的のものでない、たゞ諸君の胸に Conviction と稱する根が植はられて始めて此に日本民族が固定するのである。

話は極めて些細なる書物に假字を付けることから出て來たが、その假名の中に將來の日本がいかになるかがあり／＼と現はれて居ると思ふ。外國の諺にも A straw shows the direction of the wind. と云ふことがあるから、針の穴から必しも天が窺けぬでもないと思ふ。されば僕が諸君に切願する所は諸君が世界の Natgeber に留意して自己の確固たる信念を養はれむことである、現今の如きよいかげんの學問にては露國に勝つた効は少しもない、自己の心中に自覺の信念を喚起して一層思想を固め、專一專念に思想の練磨、よい文字が見付からぬから古い文字を用ふると彼の精神的修養をつとめて、Spiritual Culture 即ち Geistige Bildung の上にも Bildung を重ねられむことを切望するのである。

精神修養と云ふことは人格の根本をなすものであるから中々六ヶしいに相違ないが、亦或人によ

りては一晚で殆んで人間を變轉させた人もある。僕の友人の一米人の如きは實に其例だ（筆者其名を逸せり）彼れは一夜夢覺めてつく／＼考へ込んだ人間は此の様に *half justice* 若しくは *half right* でいいかぬ、どうあつても立派な人格を作らねばならぬと決心し、端坐瞑目して手を組んで祈つた。どうしても今夜の中に人格を一變しなければならぬと所謂坐禪三昧の境に入つたのである、其夜一睡もせず決心に決心を重ねた結果、人格がクルリと變つて翌朝起きてから雲を見れば雲が非常に面白く見ゆる山を見れば山心ありて自分を賞めてくれる様だ、友だちに出遇つても甚だ楽しい、友だちの曲つた鼻まで一寸風流に見ゆると云ふ風であつた。併しかくの如く一夜の中に人格を全く變ずるのは普通凡俗の出來る所では決してない。吾人の如き平凡なる者には十年二十年にして未だ出來ぬこともある、出來ぬとて決して失望するに及ばぬ、*Eile nicht, weile nicht* で休まず急がず、小の上に小を積んで偉大なる精神修養を力むべきである。

自分で精神修養をやらうと思ふたら自分で一個の標準を作るがよい、二個でも三個でもよい、而して一たび作つた以上はいかなることがあつても斷行すべきである、僕が北海道を出たのが十九の時であつた、その時から心に決する所があつたものだから其標準として毎朝冷水浴をやることとした。夏の中は甚だ心持がよい者だから決心も極めて容易であつたが、冬の中になると種々と口實が出て來る。果して衛生上有利なるか、風を引かぬか、なぞ／＼小理屈が百出する、一躰小理屈と云ふも／＼の理由は自己の情慾を満すを根本として居るものである。いかに立派な理屈でも自己の情慾を根本としたる理由は凡て此れ小理屈なりと余は斷言する、而して小理屈に従ふのは

決して男らしい事でない、強固なる意思を有する男子のなすべき事でないと云ふことをも余は斷言する。小理屈は凡て之を排除すべきである、この排除をなすことが即ち修養となるのである。必しも標準は冷水浴に限らぬ、日々三度の飯の時念佛を申しても宜しい、毎日三度念佛を申すのは容易の様だが併しやつて見ると苦しい、寄宿舎の鐘かなると直ちに走つて行つてザク／＼とやる諸君には大に六ヶしい（手真似の巧なるに一同哄笑を禁する能はず）或は亦毎土曜父母の處へ端書を出すごときも孝道を顧みる上に於ても甚だ面白い思付きであると思ふ。兎も角も精神修養と云ふ道に毎日／＼木標を立て、確固たる *Conviction* を養つて行かば現今の教育制度の爲めに頭のみを大きくし、足の方はフラ／＼として遂には風が吹けばすぐ様飛び上る様な輕薄兒となることを免れるでしやう。制度を制度とせば制度の欠点を免れて頭と足踏の釣合を保つ様に心懸けねばならぬ、然らずは後日社會に獨歩することができまい。若し諸君が僕の說に賛成ならば一日も早く御實行あれ、實行と伴はぬのなら聽いたばかりで何にもならぬ。新渡戸曰く何々也では駄目だ實踐躬行が第一である。以上は決して新渡戸一個の說ではない、世の中の修養を積んだ人の說である、新渡戸一個の說と見れば甚だ趣も薄からうが、天下の人の說とすれば左程でもあるまい。

（河合生記）



空 想 的 生 活

千 田 生

學者は吾人に教へて謂はく、吾人の目的は眞理を闡明し、智識を博く求むるにありと。然り吾人は眞理の是非を品隲しあらゆる智識を要するは事實也。されど其所謂眞理とは果して冷き酷なる智識をのみ意味すべきか、吾人は之を疑ふ。且つ學者の思惟する所謂眞相、實在、現實なるものは果して誤りなきや、吾人は之を更に疑ふ。吾人が恆に眞理を求め、智識を要するは却りて學者の悪くむ情意の結果なり、空想の偉大なる要求なり。更に吾人の眞理と信じ智識と稱するは、唯情意其物なり、空想其物なるべきを信ず、即ち空想の發展活動は眞理智識の本躰なり、發明或は發見なり。空想の強大有力なる要求は吾人の自我となり、心情の統一となる、吾人の無限なるべき要求即ち空想が此くの如く吾人本然の心的活動及發展なるを知らば、吾人生命の眞義と價值とを是れによりて求めざるべからず、否吾人の生命、慾望、認識、即ち一切吾人生活の價值と能力とは空想の外一步も出づるなきを信せずむばあらず。

吾人が眞生命の躰現、實在は唯心情の活動其物にあり、意望其物にあり。思ふに心情と意望とは唯空想の姿なり、形なり、即眞の實在、眞の躰現は却りて心情の活動即空想の發展發現にあり。是に於て吾人は偉大なる空想の力と美とによりて事業的活動と冥想的憧憬とを翹望するなり。強き事業と大なる理想の後には恆に空想の力と美とあり。事業と謂ひ志望と云ふもの凡べて空想を

謂ふ也、空想の躰現を謂ふ也、徒らに事業と志望とを稱美して空想を嘲罵するの理に反くこと多言を辯するの要なきを信ず。空想は實に吾人が事業と志望の血なり、力なり、冷き所謂眞理に沈湮して、活きたる空想の存在を忘れ、以てあらゆる心情の威力と理想の妙玄を無にするの思はざるの甚だしきを知るべし。實在は吾人の觀念、情緒に觸れて始めて眞義あり價值あり存在あり。故に學者の教ふる客觀的の物象と眞理とは凡べて是れ心的活動即空想の産む所なり。空想は吾人の要求なり憧憬なり、故に遲鈍に沈滞するものにあらずして、形式を超えて、規束をさけて恣に浮流するもの也。これ明かに吾人が心情の眞の能力なり活動なり、やがてこれ吾人が生命の實躰也、人生の眞相也、蓋し人世の眞實、價值は活動と能力とにあれば也。

今の學者空想を以ていたづらに土塵の如く棄て、智識を傷つけ論理を毒するものと謂ひなし、ただ義務を揚稱し形式に背くべからずとなす。然かれども吾人を以て之を見れば、彼等の所謂論理所謂智識は唯單に吾人の獨創的思念即空想の所生に外ならざるべき也。要するに理學者哲學者の所謂認識、知慮は、詩人の歌ふが如く、藝術家の理想の如く、吾人が心情の新しき欲求に對する限りなき思慕と驚嘆と也、空想の翹望に驅られつゝ、事物は經驗せられ一切のものは茲に價值ありとせられ而して歸納と演繹とを生ず。見よ、ニュートンの引力説、ダウキンの進化論、將た近代のラヂウム説は凡べて是れ理學者哲學者の空想に攝受せられたる臆説の果實なり。こはたゞ天才の獨創的空想による是認によるのみ、主觀的空想の自由、發展に外ならず。即ち空想は個性の最も自由に發展せるもの也。吾人が心情の本躰即個性は實に獨創の力なり、即空想の力なり。もし

吾人に此空想の冀なくむば一の活動なきなり、やがて是れ人生なきなり。

空想はまことに吾人青春の力なり、美なり。吾人疑ひの子は冷かに學び知らむには余りに熱き血汐を胸に湛わたり、余りに強き意情は活動の力を試めざれば熄まざる也。理學者哲學者の所謂論理をはなれて、吾人の思慕は終に夢幻たらざるを得ず、空想たらざるを得ず。この切實なる思慕は速かに現實を求むるが故に、吾人の空想は世に思惟せらるゝ如くたゞ假定に終ることなく、却りて若き活動が其泉を此處に湧くを信すべき也。かくて吾人は躍々たる青春の意氣を胸に混々たる清新の空想によりて見出し得たるを覺ゆ、吾人が飽くまで空想の翼を伸ばし、吾人が情意の要求を満足する處、そこには真理の奇しき花咲き、健實なる信仰と志望との威嚴自ら存す。美的空想の詩歌ありてこそ、そこには真理が美はしき思慕に飾ざされて聖靈の如く吾人に降り來るなり。何を以て漫りに空想を以て現實一切の情緒をはなれたるものとなすの所以ありや、神の恩愛は恆に冷かに酷きものゝ上にあらず、恆に美はしく活くるものゝ爲にあり。吾人は若き力を誇り、若き思ひになげき、恆に遠きを望み、高きを仰がずむば已まず、たゞ若き空想を恣にして神の愛と和し、自然の美と語り、新生命と新光明を求むるにしかず。この熾銳なる空想は渺漫として際涯なく自然の美と通じ、神の愛と感じ、心の情と結ぶ。吾人は理學者哲學者の謂ふ處によりて致へられず、冷かにして酷なる所謂論理推斷をも吾人に何の係る所ぞや。あはれ血も涙もなき灰白なる所謂論理推斷は是れ死の墓場なれ、げに強き者、若き者の住むべき處にあらず。思へ、美と愛との空想は實に吾人生命の詩歌なり、慈母なり、その柔かき唇にふれ、その愛ある微笑の閃めきに

吾人はいかばかり大なる理想と新しき思慕とを得たるかを。若き血汐は胸に躍りて空想の中に潜みたりし大なる力は、少壯の歡喜となり理想の靈火となり、香芬永はに馥郁たる美の國はこゝに現出す。げにや、一切の墮落を救ひ、光明を授くるものは眞に空想の美なり。

空想は無限の力なり、望みなり。萬有の際を越えて光を追ひ光を辿りて若き思ひはたゞ空想のみ、理想のみ。永遠に憧がれ、無限を夢む吾人の若き思は萬有の精靈と和し、時と處とを一にし、差別を一にし、永はに久遠の夢路に徜徉ふ。吾人の偉大なる理想を教へ眞の生命を告ぐべきはたゞ見わざる墨によりて記されたる空想によりてのみ。文字を以て識らむ者は亦文字をのみ識るべし、夫れもし血を以て、鉄を以て、石炭を以て記るされたるはたゞ活きたる生命と浮ぶ空想とのみ、徒らに文字を知り筆を探る者は、吾人人世の眞義と心情の價値に歸り來て、空想の美に若き思ひを恣にせざるべからず。あゝ今の學者は空想の意義價値を忘れ、凡て自ら立つべき處を失ひたり。

吾人が空想によつて活き且つ進むこと既に斯くの如し。天才の事業と理想の活動とは唯空想の所生也。見よ、ナポレオン一世の事業と名譽とは其華々しき希望と若々しき空想とによりてなれり。更に見よ、吾人に美はしき自由を興へ、個人の價値を高め得たる佛國革命の流血はルソトの天才的空想によりて教發されたり。偉大なる空想と事業とによりてなれる歴史の名譽は空想の無限によりて高められたり。空想あるが故に、理想あるが故に、天才あるが故に、こゝに初めて名譽の歴史あり、奮闘の歴史あり。血を以て鐵を以て石炭を以て、活動の空想、事業の理想は吾人

の若き生命を武装せしむ。眞に事業の空想にもゆる人は活動と奮闘の人なり。之を以て事業と空想とは一なり、名譽と空想とは一なり。吾人は恆に個性の偉大なる發展を求む。個性の自由發展は唯空想なるが故にその結果は戦争となり、進歩となり、活動となる。時代を導き、個人を先覺せしむるは空想の自由なる發展也。かくて空想は時代の生命なり、國民の理想と精神となり。然かるを何ぞや、空想の自由放縱なる發展を呪詛し、進歩と理想を阻害し、以て思想を毒し、詩歌を傷つく、かくて個人の價値と國民の威望は灰燼の如く消えて去りぬ。

空想は吾人が眞生命の憧憬なり、欲求なり、爲めに空想は煩悶なり、悲哀なり。蓋し煩悶や悲哀は吾人の要求をはなれて存するを得ざれば也、煩悶や悲哀は畢竟吾人が要求、思慕の半面也。いかなれば吾人は短かき力を以て永久を夢むべき空想を得し。思へば、吾人の若き思ひはなかなか禍なるかな。吾人のはてしなき空想は永しへに追ひ、永しへに悵む、かくて若き思ひは煩悶なり、悲哀なり、戀慕なり。果てしなき空想に夢み迷夢の裡に逍遙し、其憂愁に惱む、曙の希望の光跡もなく衰へ盡きて空想は失敗し、理想は絶滅し、天も地も吾人にいたまじきものを告ぐ、空想は暮れ、理想は逝いてげに若き空想は永しへの惱みなりけり。あゝ何處に吾人は愛を求め、恵みを尋ねむか、煩悶の後はただ毒をとらむか、又に伏さむか。將た水に投せむか、萬有の愛の中に融和し、萬能の力を冀望せし吾人が空想の誇大は今や、その行衛は更に知るべからず、夢のうたかたを命とうけし煩ひの身、理想も思慕も悉く失敗に終り果て、美はしの空想も今はたゞ身の罪と啣てば、あまりに果敢なき定めかな、されどいかに美はしき悲哀よ、ファウストの失

望は即ち是なりき、ヴェルテールの愛は即ち是れなりき。若き空想の失敗は涙と太息とのみ冷かに残り、大なる苦悶と慘禍をもたらす。美はしき空想は破られていたましく吾人の若き思ひはいかに戦くべき。吾人は斯くの如き美はしき煩悶によりて切に眞面目の人世を感受し得たるを覺ゆ。柔かき空想に耽り、若き思ひに泣くものにおいて世の所謂眞理、道徳は何等の價値を存せず。學者道徳家は彼等の悲哀苦痛を怪やしむも、其悲哀や苦痛や煩悶は學者道徳家の言語や文字によりて教へ導かれ能はざるべし、血によりて煩悶する者、力によりて泣く者は何處までも血と力によりて其煩悶と苦痛を散すべからむ、空想は時代を越ね國民を超え、煩瑣なる制度道徳と反抗す、これを以て自由は始めて現はれ、活動は始めて力あり。斯くて吾人の空想は世を呪ひ人を怒り、時代と國民とを輕侮し、獨り自らの思慕と理想との裡に潛む。即ち差別を一にし、時と處とを一にして直ちに物象の心を辿り、無限を達ね終に光明の天は永はに吾人が胸に生くるなり。見ずや、かのキリストの天國は是れ吾人の柔かなる空想に建てられたる永久の現在なり。吾人が空想の活動は無限の統一を要し無限の進歩を欲す。無限と永久とに飄游する吾人の空想は是れ即ち神に對する吾人の信仰なり、人格に對する吾人の讚美なり。キリストや釋尊が無限のあなたに漂揚せし空想はこれ永久の轉生なり、即ち理想の永遠なる現在化は是れなり。キリストや釋尊の説きし永遠なるべき眞理は學者の所謂知識を超え、所謂眞理を離れたり。永遠の眞理はかならずや偉大なる人格を待つて始めて全からむ、眞理とは知るべきものにあらず、唯偉大なる人格によりて欣求せられ渴仰せらる、夫れ自身が永遠の眞理なり、而して空想の發現は人格となり、眞理となる。

今の人は徒らに神秘を去り、奇蹟を退け、たゞ合理を謂ひ、論理を云ふ、故に驚嘆の情薄く、讚美の聲微かなり。驚嘆と讚美なきは是れ理想の缺乏なり、人格に對する思慕の淺きなり、やがて是れ思想の沈滞なり、精神の不活潑なり。吾人は驚嘆と讚美の情なくして而かもキリストや釋尊の教義を信じ、經典を繙くことの甚だ解し能はざるを思ふ。空想の誇大を語る者は更に思ひを轉じて、所謂合理以上の合理、所謂論理以上の論理に達し、電光の閃めきの夫れの如く、心靈の中に大なる驚愕を感せずむば墮落の中に汚がれたる生活をつゞげざるべからず。既に時代を越え、現世を越へ永久の眞理と光明とに憧がるゝは奇しき吾人が空想の力なり、是れに於てか空想は吾人が天國を開くべき唯一の鍵なるべきを知り、空想の國にありてキリストを見るを得べく、神を見るを得べきを信せずむばならず。空想の何たるを解せず、神秘の何たることを知らざる者は、吾人と共に宗教を謂ふ能はず、キリストを謂ふ能はず、釋尊を謂ふ能はず。空想なければ讚美なし、讚美なければ宗教なし、宗教なければキリスト、釋尊なし、キリスト、釋尊なければ人格なし。之に於て空想を毒する者は人格を害する者なり、此の如くにして空想の問題は人格の問題と一なり。空想は國民の理想なり、國家の活動なり。戰爭は即ち國家の勃興なり、進歩なり。國家國民の活動や、やがて期すべし。斯くの如くにして國家は恒に速かなる進歩を續け、國民は若き精神に勇むべき也。政策と政治とはかならずや、雄大なる空想ならざるべからず。之に於てか即ち知る、國家國民の活動發展は銳利の武器にあらざして、其雄大なる空想と若き思想とによるべきを。吾人

は永遠の理想を驅り、若き空想を攝受して國家の經營策を期すべき也。吾人の國是は保守、退歩にあらざして進歩と活動とにありとせば、吾人は國家の理想と精神とを進む空想によりて確定せざるべからざるや必せり。即ち無限の進歩と統一とは實に吾人國民の理想なり、生命なり。誰か此の空想を健實ならずと謂ふや、誰か此空想に堪はずと謂ふや。吾人にありてこの若き空想がいかばかり國民的覺悟と理想とを明かに促進するかを思へ。自ら存立せむものはまづ自らに於て大なる啓示を得ざるべからず、國家の統一獨立を期する時は國家自らの國是なくむばならず、即ち空想の雄大なくむばならず、發展の自由なくむばならず。もし國家に活動の空想なく、進歩の理想なくむば、己に自ら統一を失ひ獨立を失へるものなり。もし國民が恒に若き空想を懷き、勇む精神に自分を強ふせば、そは決して亡びざる國民也、墮落せざる國民也。雄大なる政策は宜しく超論理的なるべく、姑息、逡巡すべきものにあらず。吾人の若き空想を嘲るは實に國家の健闘と發展とを呪ふべき最大の罪惡なり。若き空想と新しき理想とを現はさむには、先づあらゆる横暴、殺戮、強奪、破壊も敢て辞する處にあらず。即ちクロンウエル、ビスマルク、ナポレオンの態度に出でざるべからざる也。

要するに吾人の空想は活動と渴仰との所生にて心靈と精神とは唯是れによつてのみ自由なる發展をつゞけ、無限の力となり、絶對の愛となり、且つ偉大なる眞理となる也。是れによりて吾人の精神心情は流れ、渦き、動いて、絶え間なく活ける力と進歩とは恒に吾人の生命を彩どり輝し。柔かき冥想的思慕となり、強き事業的活動となる、あくこの活動や思慕や、眞に是れ吾人

人世の生存にして、空想は又實に其意義なり。是れに於てか、吾人は若き空想の光を以て自己の神命を明かにし得べきを覺悟す。斯くの如くにして初めて吾人の意義と存在とは永遠に光彩あらむのみ。吾人の空想は美と光との中に飾ざられ、無限と永遠とに輝き、宗教を作り科擧を創り、時代を主宰す。たゞに文字を知るものたゞに知識を誇らむとする者は單に文字のみに活きて、眞に自己なき生命なるを自覺せざるべからざる也。されば自由の發展を貴び強大なる活動を欲する者は、たゞ空想に其價值を屬せざるべからず。さらば若き人よ、辿らむか美はしき空想に、歸らぬ夢に逍遙ふて、さらば行かむか、永しへの國に、吾人は常に夢の理想を追ひ、清き愁の涙を慕ふ、そは限りある人の世のものにあらず、そは永しへに現はるる美と光と詩との國のものなり。世の學者や道德家やいかなれば生命の血を忘れ、戀の涙を忘れ、人生の活動と歸趣とを凡べて脱するや、その謂ふ處、力なく、活動なくして疲れ、人世に失敗せる其醜惡實に憫むべきにあらずや。昔ナポレオンは埃及遠征の途にありてヴェルテルの死に泣きたりと、事業と活動との空想あるものにして初めてよくヴェルテルの憂苦を知るべし、即ち活動の空想に勇む彼れにして初めてよく空想の悲哀に泣くべく、空想の讚美を覺ゆべし。世の學者は形式と證明とのみを謂ふて空想を呪ひ理想を傷つく、而かも愚かなる世と人とが彼等學者を畏敬するの醜惡を見て吾人は轉た憤懣の情にたへず。凡べて學者や道德家や、既に活潑なる心靈なし、活きたる人格の發展なし、されば唯數量、法則、義務によらずむば全く爲すべき處を知らざる也、謂ふべき處を知らざる也、吾人は無限の空想が不羈奔放果てしなきを覺て、こゝに自らの偉大なる力を自覺せざるべからざる也。こゝ

に於て吾人は初めて自らの胸に奥深く神の國を見出し、絶大の自由と發展とを吾人が空想の神秘と活動とによりて明にし得べきを信す。かくして吾人は形式をはなれ、知識をはなれ、自らの若き空想に歸り、自らの威力と活動とを信じてより、吾人は人生の意義と價値とに最も近づき得たるを覺ゆる也。(結)

作文問答

其 月 生

これはミック・ルジョン氏の「英作文法」の序言の大意であります。御参考にもとて。

先生如何したら文章が上手に書けませう? と若い熱心な學生。

善い哉問や! と先生は頻りに其の學生の心がけを嘆稱せられて、夫れ文は經國の大業不朽の盛事! 話す事にも書く事にも兎に角國語を甘く取り扱ふのは國民の義務ですからね……………。

先づ「作文法」でも讀むべきでせうか?

決して決して! 少くとも初學の方には! と先生は激しく兩手を振られて、「作文法」は定理だの原則だのを教へます、併し文を書くには定理も原則も入つたものぢや無いです。差し當り君に必要な條件は實習です。すなはち君の思想を出来る限り簡單明瞭に書いて見る事です。そして此の實習を毎日毎日繼續する事です!

面白い話がある。或は君御存じか知らんが、ルイ十四世のお子様方の家庭教師を勤めて居た佛蘭西の貴婦人の話ですがね、或日其の貴婦人がお子様のお一人——名はメーン公爵——に、御親父様への御手紙をお書き遊ばすやうにと勧め申された。すると「先生出来ませんよ！手紙なんか一度も書いた事ありませんもの！」との御答。「宜しうございます」と先生、「併しお父上様の御事折々お考へ遊ばした事はありませう？」「それはあります！ 御不在を非常に淋しう思つてます！」「御尤です！ では其の事をお書き遊ばせ！ として其の外な何とか御考へ遊ばした事は？」「御還御遊ばしたらどんなに嬉しい事だらうと思ひます！」「あくそれですつかり、御手紙が成就しました！」と貴婦人、「さあ其の二事をお書き遊ばせ——初めのを前に、後のを後に——。それで宜しうございます！」「皇子「手紙はそんなに容易いものですか？」家庭教師「左様でございます！ お考へ遊ばしたりお感と遊ばした事柄を、只その儘ひらくお書き遊ばせば、それが即ち御手紙でございます！」

學生。御話の主意はよくわかりました。次に「文典」はどんなものでせう？ 文法上の諸規則は平生よく暗記して、置いて、文を綴る時一々照し合すべきものでせうか？

先生。それも必要です！ 文法の規則は、書いて居るうち自然とわかつて来るものです。文法文法と文法の規則にばかり拘泥して居るものは恰も初めて劍を帯して拜謁を賜はつた紳士見たやうなものです。妙に佩劍がぶらつく、か、やつく、兩股の間に狭まる、若しや足が絡まつて轉がりはすまいか？ と劍の事ばかり氣にして一步も前に進む事が出来ない！ 書いて居るうちは只其の文

題の事ばかり考へて居れば宜しい。(テニヲハがどうだ、係り結びがどうだ) 正格だ、破格だ……などそんな事考へる暇があつてはいけません！

學生。さうしたら間違だらけの文章が出来ませう？

先生。或は左様かも知れない！ しかし書いたあとでは必ず讀まねばいけませんよ！ 再三再四聲をわびて讀んで見なす、そして誤謬があつたら勿論其の時修正するです！ 兎に角書いて居るうちは只一生懸命に其の文題の事ばかり考へて、其の他は全く自由でなければなりません！

學生。では「解剖」はどんなものでせう？ 「解剖は作文の案内者」だと聞きましたか？

先生。なほ／＼不必要です！ 解剖は單に君の心の働さを痲痺せしめて、君の文章を火棒のやうに強張らせるだけです！ 例へば君に散歩し玉へ、但し先づ脚骨筋を動かし次に脛骨筋に及ぼし、内轉筋と縫匠筋とを變數法コンビネーションに働かす事を忘れてはならぬ、云々云々と七六ケしう註文されたら如何です？ 散歩するに筋肉の術語なんか覚えてゐなくても差支は無いでせう？ 吾々人類は筋肉の解剖乃至その術語を知らなかつた數千年以前から自由に歩行してゐたでは無いですか？ 他人の歩むのを見て自分も歩んで見たのです！ 歩行、談話、作文皆同じ事です。只々實習にあるのみです！ 抑も解剖と作文とは全く正反對に位する。解剖は批評、作文は創作。創作して手に批評の眼は全然不必要です！

學生。先生の御説は凡て私の意想外です。私は文法や解剖を習つて居た時文章道の公道でも通つてゐる様な氣がしました。

先生。名文を知る爲めの公道には相違ありません。併し書く爲めの公道ではありません。少くとも熱心に書く爲めの公道ではありません。否、文法の智識は却て君を卑怯ならしめ臆病ならしむるものです！

學生。では先生、文法の本も解剖の本も焼きすてと了ひませうか？

先生。そんな事があるのですか？！文法の本は文法の本、解剖の本は解剖の本で、其の時々々に必要なものです！只文を書く時には不用だと云つたあげです！

學生。では書く時に必要な本はありますか？

先生。いくらでもあります！マコーレイ、フロード、キングレーキ、其の他有名な文章家の著書は皆さうです！此等大家の著書を読んでもし文の美或は想の妙に打れた時は、先づ其の章節の梗概を君のノートに書き抜き玉へ、そして二三日して後そのノートの梗概から出来る限り原文に似せて其の章節を書いて見玉へ、次に原著と照し合せて何の語或は何の句が違つて居たかを検査し給へ、一週間に二三度も繰り返してやつて見給へ、メキメキ上達して来る……。

しかし先生！と學生は言葉挿んだ。しかしそれは單に眞似に過ぎないでせう？「眞似イミテーションに由て得る所は緩漫ダルトスと古手モトニの一樣調のみと習ひましたか？

名論々々！と先生は温顔に笑を浮べられて、名書の模寫は原書の十分一の價值も無いです。併し初心の者は名書を模寫するより外に稽古の仕方は無いでせう？ルイ、ステヴエンソン氏が英文を學ばれたも全く此の方法でした。而して同氏よりも美はしい力強い完全な英文を書き得る人は見

渡す所此の世紀には餘り無いやうですよ、エチンポローに在學中は先づマコーレイに似せ、次にフロードに摸し、又同時にカーライルの眞似せられたさうだ。(因に、兼好は清少、樂翁は兼好、秋成は業平、馬琴は秋成、紅葉は西鶴、露伴も西鶴、蘇峰はマコーレイ、漱石はアチソン等、いづれも其の初めは文體又は句調を眞似せられたものらしい)眞似イミテーションなるかな眞似イミテーション々々々々！斯くて文章は上達するのだ！

では先生！と茫然自失せる學生。では「作文法」は一體何の役に立ちます？先生の著書「英作文法」も全く無用の長物でせう？

アハ、これはきびしい！と寛大な先生。併しよく見てくれ玉へ、私の著述は世間普通の「作文法」とは頗る趣を異にしてゐる筈ですがね。第一實習に重きを置き、(以下數百言、先生自著の特長を挙げられたところも一讀の價あれど、都合によつて茲には畧する)

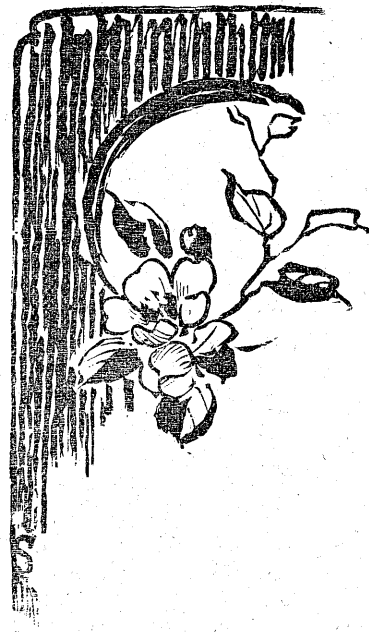
學生。註パラフレシシク釋も必要ですか？

先生。必要ですとも！

學生。珠玉の文を瓦礫に變ずる事がですか？

先生。左様！但し註釋にも左の心得が肝要ですよ！すなはち先づ其の註釋せんとする大家の文を注意深く同情的に熟讀した上、流暢に感情的に五回も十回も朗讀します。かくて原文の精神を能く々々理解したらば、さて自分の文章に譯して見るです！勿論珠玉とこそならね決して瓦礫に變ずる憂は無いです。

終りにも一言云つて置きます。君佛蘭西語が出来ますか？ではね、佛蘭西語の散文を英語に翻譯し給へ、毎週二、三回づゝ！屹度驚くばかりの効果があるよ！



雜 錄

伊 丹 鬼 貫

紫 影

鬼貫は攝津伊丹の人にして、姓は上島氏、槿花翁、犬居士、佛兄サトキ等の號あり、元祿享保の間、俳諧を以て近畿に鳴る、其句淡泊にして飾らず僞らず、意の赴く所にまかせて、語に雅俗を擇ばず、飄逸風の如く、澹蕩水の如き中に、不可言の至味あり、伊丹風の一派を樹て一方の雄たりしも、宜なりといふべし、

嘗て自ら修業の經歷を語りて曰く、伊丹は昔より連俳のすき人多く、おのづから耳に心にうつりて、八歳になりける年、こい／＼といへど螢が飛んで行くと口ずさみしを初として、十三歳の比、貞門の高足松江重頼に師弟のちなみを結びて、いよ／＼此道に深くなごり入り、十六歳の比より、談林の開祖梅翁宗因の風流に心移りて、さまざま異體異形の句を吐き散らして、そとろに自ら得たりとせしが、一朝深省して思へらく、古風談林の俳諧は、共に詞を巧にし、姿を飾るのみにて心淺し、つらく／＼よき歌といふを思ふに、詞に巧もなく、姿に色品をも飾らず、さら／＼とよみ流して、しかも其心深し、古風談林の詞藻作意に拘泥するは、いまだ道の至れるものといふべか

らず、猶深き奥もやあらんと、自ら安んぜず、延寶九年の比より、深く思入りて五年を経て、貞享二年二十五歳の春、まことの外に俳諧なしと悟りて、詞藻作意にのみ汲々たる弊を蟬脱し得たりと、芭蕉が杜詩の風骨を探り、山家集の寂寥を辿りて、貞門の爛熟をすて、談林の浮華を去りて、古池の一句に新旗幟を翻したると、東西期せずして、時期精神を等しうするも、機運の然らしむる所か。

鬼貫又いへらく、俳諧に遊ぶ人、あらましにもいひこなせば、はや得たり顔して、茲に止まるものあるは、深く慨すべき也、或時は句も成り易きやうに覺ゆ、又或時はひたすら成り難くもなりなんこと、幾かはりもありぬべし、深く入りなん人は、其程々に功積りて、猶むつかしきことを覺らん、修行の道に限あらざれば、至りて止まる奥もあらじ、只臨終の夕までの修行と知るべし、例へば宗祇法師は、連歌の達人にて、之に並ぶものなしといへど、祇公ひとりの上には、今五年生き給はゞ、五年の功、十年ながらへ給はゞ、十年の功もありぬべきことにこそといへる、修養の妙諦を説くこと詳にして、深切なる教訓なりといふべし。

或日かねて出入し奉る近衛家へ伺候したるに、折柄歌の大會ありて、あて人あまた集ひ給へるが、かくと聞召して、此頃世に聞ゆる鬼貫とや、それ召し出して、俳諧の句申させよとて、やがて其席へ呼び入れられぬ、何にても句申せ、題をや得さすべきと、主の殿のせめ給へば、やうく頭をあげて席上を見めぐらすに、床に土佐の某が書ける小町の掛繪あり、あはれあの掛物給はらば、賛し奉りたしと申すに、人々笑ひ興じて、やがてさし出されけるに、御硯乞ひうけて、筆たぶく

と染めて、小町の頭のほごに、まづあちらむけと五文字書きて、さて暫しあるに、一座こぞりてさし覗き給ふ、やうありて静に筆をとりて、うしろもゆかし花の色とかきつけ、畏りてしさりぬれば、人々ゆすり興じて、けふの會はこの男にいひ勝たれて事さめにけりとて、そこくじにやみけるとなん。

元祿丙寅の季夏はじめて江戸に赴く「によほりと秋の空なる富士の山」は此時の吟なり、江戸につきて嵐雪の家に宿り、夜もすがら兩吟、

君見よや我手入るゝぞ莖の桶

鰻によわる上方の腹

嵐 雪
鬼 貫

此人の風調を見るべき句、

咲くからに見るからに花の散るからに

春の日や庭に雀の砂浴びて

五月雨や鮎のおもしろも蛞蝓

戀知らぬ女の粽ぶさまなり

行く水や竹に蟬なく相國寺

田 家

六月や白をほさうぞ搗臼を

夕 涼

何とけふの暑さはと石の塵を吹く

行水の捨所なし虫の聲

露の玉いくつもちたる薄ぞや

何と菊のかなぐられうを枯れてだに

高野の玉川

谷水や風に漂ふ月の糞

世人多く「大徳の糞ひりおはす枯野かな」といふ蕪村の句に驚倒して、鬼貫が「月の糞」を知らず、村の句は只其姿勢より想像して、その實物を示さず、鬼は直に其物に説到して、しかも一點臭穢の感なし、月光の美化によるといへども、作者の辣腕真に驚くべし、嗚呼、鬼なるかなく。鬼貫の文また作爲の跡少くして、淡雅愛すべし、其著ひとり言、能く自然の風物禽蟲を観察して、著眼凡を拔けり、今會心の數章を摘むこと左の如し、

春の月は暮れをむるより臃だちて、物足らぬけしき、

夏の月は灯を遠く置きて、ながめ深し、

秋の月は窓に軒に海に川に野に山に、

冬の月は一むらの雲の雨こぼしゆく隙を照していそがし、

春の雨は物ごもりて淋し

夕立は氣晴れて涼し

五月雨は鬱々ときさびし

秋の雨は底よりさびし

冬の雨はするどに淋し

柳は花よりもなほ風情に花あり、水にひかれ風に隨ひて、しかも音なく、夏は笠なうして、休らふ人を覆ひ、秋は一葉の水に浮みて風に歩み、冬はしぐれにおもしろく、雪にながめ深し。

蟬は日のつよき程聲くるしげに、夕暮は淋し、又山路ゆく折節、梢の聲谷川におつるも涼し。

虫は雨しめやかなる日、籬のほとりにおろく／＼鳴き出たる、晝さへ物哀なり、月の夜は月にはこり、闇の夜は闇にむれず、あるは野ごしの風に、おのれおのれが吹き送る聲いつ死ぬべしとも聞えねど、秋限る命の程ぞはかなき、つくねんとして夜も更け、心も沈みて、何にこぼるゝとは知らぬ涙ぞおつる。

鴈はひとつ／＼山越えて跡なく見果つる、舟の上にて古郷のかたに行違ふ聲、又つがひく／＼並ぶゆく中に、はしたなる鳥のまじはりたる、いつくの網にか身を失ひけん、妻の心ぞ思ひやらる。

伊丹風の祖を也雲軒宗旦といふ、鬼貫、百丸、蟻堂、青人、鷺助等、此一派の鏘々たる者なり。宗旦の辭世に曰く、世の中はたゞ瓢箪の大鯰おさへくへてにげていにけりと、鬼貫が其七回忌をいたむ詞

瓢箪の鯰いんでいづくにかある、無しといはんとすれば、水は流れてちんちん、風は吹いて颯々。死や生や七つになりし石佛

歴史的 諺 (續)

浦井恒堂

Hobson's choice 又は this or none, a choice without an alternative の意にして否や應なしといふことなり例へば佛國のチエールはビスマルクと談判して終にホブソンの撰擇を爲すの止むを得ざるに至れりといふか如し此語はミルトン時代にケンブリッジ大學々生より始まれりといふ當時ケンブリッジにトビアスホブソンといふ男ありて借馬を營業とし専らケンブリッジの學生を顧客と爲し、が馬を借らんとする者ある時は彼は世辭を振り時き喋べり續け客をして馬を撰擇する能はさらしめ常に客に馬を宛てがひ客は唯々其馬を以て満足せりといへり而して客の得たるは常に厩の入口に接して繋きありし馬なりき蓋しホブソンは奥の方に繋きある馬を牽き出す手敷を厭ひしなりけり

Honi soit qui mal y pense(佛語) Evil to him who evil thinks 是は英國王エドワード三世の創めたるガーダー勳章即ち英國最高の勳章にして先年我天皇陛下に贈進せられたる者に採用せられたる箴言なり傳説に依れば一夜宮中に於て蹈舞會の催ありてエドワード陛下の御相手を勤めしはソルスベリイ伯爵夫人なりしか夫人は跳り廻る拍手に誤て襪のリボンを取り落しけり王は直に身を屈けて之を拾ひ上げ給ひしかば之を看し人々は夫人の光榮を妬しとや思ひけん散々に夫人を冷弄し夫人は座に堪へず別室に逃れたり王逆鱗ありて此語を叫び曰ひ(エドワード時代の上流社會は専ら佛語を用ゐしを記憶せよ) 且曰はく朕は此青色のリボンを以て最も名譽ある者となし汝等をして之を得んとて苦勞せしめんと乃ちガーダー勳章を制定し給ひ此箴言を採用し青色の綬に金字を以て書かしせ給ひきとぞされどガーダー勳章の制定に關する此傳説は全然根底無き俗説にして此諺はエドワード王より遙に以前に佛國に行はれ居りガーダー勳章に此箴言の採用しあるより、好事者の附會せる者なり

He was in hot water 艱難辛苦の事なり古代ゲルマニ人の行へる神判(オートデール)の一種なる熱湯の神判より出てたり我邦の探湯は之に該當せり其法種々ありて或は單に隻手を熱湯に浸さしむることもあり或は釜中に指環の類を置きて之を取らしむることもあり要は手を熱湯に觸れしめ火傷の有無に因りて罪の有無を斷するにあり孰れの場合に於ても熱湯に觸れたる後直に綱帶を施し三日間放棄し置き其間に火傷の既に愈えし者は罪を得ず是に因り人若し大なる困難に遭遇し無事に免れ得たる時にかくいふ

Junese dor'e (佛語) gilded youth の義 佛國大革命の時代に當り一七九四年七月過激黨の領袖ロブスピエールは其股肱と頼めるセンジュスト、タートン等と共に斷頭臺の鬼となり恐怖時代の終局を告ぐるや史に所謂暑月反動(テルミドリアン、リアクシヨンの勢旺盛となれり其際バリの中流以上の青年は義勇團體を組織しフレーロンを司令として盛に過激派(所謂飲血黨)の壓服に従事せり後人此輩を呼びてジェーネス。ドレーといへり或は之を嘲りて musadins といへり香水野郎 (Scented darling) の意なり又は petits maîtres ともいへり小殿様の意なりされば元ジェーネス。ドレーは立派な若者の義にて輕侮の意は少しも含まざりしが現今に至りては其意義一轉して貴族富豪等の執縛子弟道樂息子といふ意となれり

Job's Comforter 慰藉に托して不幸なる人を宥むる徒をいふヨップはヘブライ人なり人と爲り摯實敬虔家道豊にして多くの兒女を有し甚だ幸福に日を送れり悪魔サタン之を妬み神に讒して曰くヨップの敬虔なるは其富めるがためなるのみと神之を疑ひ突然ヨップの富と兒女とを奪へり是に因り Job's news 又は凶報をいひ又 Job's post 又は凶報を持ち來る人 Poor as Job とは極貧の境遇をいふされどヨップは毫も神を恨む念を起さざりきサタン乃ち復た神に勸めて更に惡疾を獲せしめしにヨップは猶神を信じ敬虔の念を變せざりき會まヨップの友三人彼の不幸を慰藉せんとて其家に至るヨップは彼等の訪問を謝し予はかくまで天罰を値する罪を犯したるを記せずといふ於是三人は交も彼か天譴を得たる原因と思ふ件を逐一指摘せしかはヨップは悲歎措く能はざりしとぞ後神はヨップの冤を悟りて其家産を復し且つ七男三女を授け給ひしかはヨップ

は安樂に一世を送りきといふ

Juste-milieu policy 不偏不黨の政策を云ふ一八三〇年佛國七月革命起りルイフィリップ王位に登る而して此時代の如く大小數多の政黨の對立せるは眞に珍らしき現象にして(一)先代の查理十世の孫ポルドー公爵を以て正統なる繼承者と認めルイフィリップを篡奪者なりとする正統派あり(二)政府の外交軟弱なるを慨しナポレオン大帝の甥ルイナポレオンを立て以て大ナポレオンの御宇の如く大飛躍を試みんと欲するボナバルト黨あり(三)現王朝オルレアン家を擁護して立憲王政を維持せんとするオルレアン黨あり(四)共和政治を行はんと欲する共和黨あり(五)センシモン。フリーエール。ルイブラン等の率ゆる社會黨ありされは王の位地の困難なる言を俟たす王は之に處する唯一の方針として孰れの黨にも偏せず黨せず超然政略を採り自ら之を呼んでジュストミリウといへり英譯して true mean 又は Happy medium などいふ不幸にして此政策は失敗に歸し超然政略は一變して政府の孤立となりたれど是に因り事の成敗は別として不偏不黨の政略を呼ぶ稱となれり

Ueber des Kaisers Bart weiten 無用の争不必要の穿鑿 獨逸の諺にしてカロロ大帝が髯を生やし居たるや否やといふ件に關して學者間に一大爭論を惹起したることありしより出てたり其時日は詳ならざれども獨逸のある土地にてカロロ大帝の署名捺印ある二三通の古文書發見せられたる事ありしが其國璽なる大帝の肖像に髯ある者と無き者とあり因て孰れを以て眞正のものとなすかを研究する必要生じ轉してカロロ大帝の髯の有無を調査するに至り學者間に一大論争を惹起

せり而して該文書は重大なる權利問題に關係せしを以て之に對する學者の態度も極めて熱心なり。然るに世人は其真相を察せず。たゞ學者か古人の髯の有無を争へる者と思ひ無益の研究に光陰を徒費することを嘲り笑ひ終に皇帝の髯に關する争論てふ諺を生ぜり。

Laissez-faire policy 放任主義をいふ佛國の *Quésnay* より出だり此人は佛王ルイ十五世の寵姫ボンバズール夫人の侍醫なり。ポリチカルエコノミーの語は彼より創まれりといふ。一七五八年ダブローエコノミックを著はし、が此書を以て科學的に理財を攻究せる嚆矢とし大に世人の注意を喚起せり。尋て一七六八年ラ、フイジオクラチーを公にしたるがケスネーの名不朽に傳はれるは職として此著述に由る。彼は當時歐洲一般の經濟的狀態に鑑み、コルベール以來天下を風靡せるメルカンチリズム(重商主義)を以て根本的に國家經濟の主意を沒了せる者と爲し、絶對的に政府が工業通商政策に干渉するを排し、自由通商自由工業を唱道せり。蓋し彼は當時英國に於て勃興せるジョン、ロック等のイングリシユ、スクールが政治宗教に於て主張せる自由主義を理財界にも適用せる者にして、政府の義務は社會の秩序を維持し、外敵の侵襲を禦き、國民の生命財産の安全を保障するを以て足れり。其以上には何事をも爲すべからず。政府が保護貿易政策を探るが如きは政府の責任を忘れたる者なるを論せり。されは此フイジオクラット派は *Laissez faire, laissez passer* を以て戰聲となせり。 *let people do as they please, let goods pass freely* の意なり。是に由りレーゼフェールの意一轉して放任の義となれり。

Lombards money-lender, usurer の意なり。中世紀の中葉彼の十字軍の一影響として、以太利都市の發達となり、天下の商權を把握するに至れるは人の熟知する所なり。當時歐洲の理財界に於てイタリア人の跳梁せるは吾人の豫想以上にして、現今歐洲の大銀行の濫觴を尋れば、其多くはイタリア人の移住歸化せる者に基くといふ。今日ロンドンの經濟的中心にロンバード街あり、又殆んど歐洲に共通せるバンク(銀行)の語はイタリア語バンクコより出て、正價のネットブライスはイタリアのネットトより轉せる等の事實を湊合して、其一斑を窺ふべしとす。ロンバード人とは嚴密にいはゞ北イタリアのロンバルディア州の人なれど、ゼノバなり、ピサなり、フィレンチエなり、重要な都市は多く北部に在れば、古はロンバルドもイタリアも同じ意味なり。此等のイタリア人は歐洲各國に移住して金貸を業とせしかば、終に一轉して高利貸の義となれり。

Malakof 生活問題或は急所。クリム役に於て英佛同盟軍セバストポルを囲み、既に一年に垂んとすれど、城兵の抵抗頑強にして、抜くこと能はず。ナポレオン三世頗る之を患ひ、猛將ペリシエールを以て新に總督に任じ、工兵監ニール將軍をクリムに派遣し、攻城の法を講究せしむ。ニールはマラコフ高地がセバストポルを瞰視して、其死命を制すべき險要の地なるを發見し、同盟軍は再度の總攻撃の後終に之を奪ひ、セバストポルは果して陥落せり。因りてペリシエールはマラコフ公爵を授けられ、マラコフの名一時に喧傳し、終に普通名詞となれり。外人の旅順包圍を記す者二〇三ノートルヒル、ゼ、マラコフ、ポートアーサーなどいふを見るべし。

Nero 暴君の摸型なり。ネロ羅馬皇帝(五四—六八)にして、其暴虐言語に絶す。(一)帝は先帝クラウヂウスの後妻アグリッピナの連子なるがクラウヂウス帝はアグリッピナの愛に溺れ、先妻の出な

る嫡子ブリタニクスを排しネロを以て繼嗣と爲し竟に帝位に登りたればネロはブリタニクスを畏れ之を毒害せりブリタニクス甫めて十四歳なりき(二)帝は其友たりしオトの妻ポツペア、サビナの美を見て之を奪へり(三)ポツペアを立て皇后となさんとし皇后オクタウイナを廢し尋て之を殺せり(四)皇太后アグリッピナはポツペアの立后に反對せしかば帝は之を弑せり(五)ポツペアは皇后となりしが後帝は一時の怒に乗じ之を蹴殺せり(六)帝の師傳セネカが帝を諫むるや之に死を賜へり(七)民の膏血を絞り史家カ羅馬の阿房宮と稱するアウレア、ドームス(黄金殿)を興し奢侈を窮極せり(八)キリスト教徒の大迫害を行へり是等は最も顯著なる者に屬し其他の非行枚擧に遑わらず終に永く暴君の模範となれり

Samson 腕力ある人をいふサムソンはヘブライの勇士にして所謂士師(ジャッジ)の一人なり始其父 Manoah 子無きを悲み之を神に祈る一夜其妻夢に天使に見え一勇士を授けられ同時に其怪力の源は頭髮にあるを以て決して之を剪る可らずとの警告を蒙り既にしてサムソンを生めり長するに及び其腕力測るべからず常にヘブライの國敵フィリスチネ人を挫きヘブライの誇フィリスチネスの恐怖たりき然るにサムソンに情婦あり Delilah といふフィリスチネスの女なり彼等は之を奇貨としデリアーに諭しサムソンの怪力の淵源を探らしむ一日サムソンは彼女に告ぐるに彼の怪力は其頭髮にあるを以てせしかば彼女は其熟睡せるを窺ひて頭髮を斬り去り之を郷人に告ぐ乃ち襲ふてサムソンを擒とし鐵鎖を以て之を縛し其兩眼を抉出し奴隸として賤役に就かしめき其際サムソンの毛髮漸く長し腕力亦た加はり來たりしかばフィリスチネ人は大に之を便とせり

一日フィリスチネスの國神ダゴンの祭禮あり彼等は餘興としてサムソンを牽きて堂に昇り其怪力を現はして衆を樂ましめんことを命ずサムソン憤恚詐り諾して堂の中央に進み其支柱を擁し力を極めて之を搖かしゝにさしも宏壯なる堂も震動すること大地震の如く衆股戰して逃れ出ると轟めく程に柱挫け堂潰れ數百人と共に壓死せりといふ

Satan-like 因果應報 サタンは拉丁名サツルヌスにて希臘名クロノスなり希臘神話に依れば Kronos は Uranos の子にして父を弑して天下の主となれり因りてクロノスは己も亦た我子のために害せられんことを畏れ其妻レアが子を産めば直に取て之を吞めりレア之を悲みゼウスを産むや直に之を隠匿し小石を包むに襁褓を以てし我兒なりと詐りてクロノスに授くクロノス悟らずして之を吞めりゼウス長して後父に逼りて其吞み殺せる兄弟を復活せんことを要請し終に背きて兵を擧げクロノスを捕へて之をタンタロスの地獄に逐へりされは佛國革命はサタンの如く其子ロブスピエールを吞めりなどいふなり

Sickman 老朽國の事なり 一八四四年露帝ニコラ二世英國に遊べり時にロバート、ピール首相にしてアバチーン卿(Aberdeen)外相たりしがアバチーンは特に露帝と親交ありニコラ之に語りて曰く余輩は我手に於て瀕死の病人を有す余輩は出來得る限り之を看護して其存命を圖らざる可らずされど余輩は同時にあり得べき急變に處するの準備を爲し置かんことを要す露國は土耳其領土の尺寸の地をも侵畧せんと欲する者にあらずと雖も復た他國が土耳其の尺寸の領土をも侵害するを許す能はず要は英露力を協せて佛國の野望を監視するにあり佛はアフリカ方面に地中海に

近東に野心を包藏すること一日にわらずと其後九年バレスチナに關して露土の交渉事件發するや露帝はペーテルベルグ駐劄英國大使サー、ハミルトン、シーモアを延見し（一八五三年一月）之に告げて曰く瀕死の病人は今や死せんとす余輩は急速に之に應ずるの策を定めんことを要す英露兩國の利害は相背馳する者にわらず英國はエジプトと地中海のマルタを取る可く露國は君子丹丁堡を除き土古領を占領すべしと英國は此提議を峻拒して土耳其の保全論を唱へ終にクリム戰役を惹起し此時よりシツク、マンの語人口に膾炙せらるゝに至り今や人支那を呼ひて *Sinoheter Sick Man* 云々

Sint, ut snat, ant non sunt Let them exist as they are, or not at all. 是は加特力派の宗教的結社の内最も保主の精神を包懷せるイエスイタ社は毫も時勢の推移を洞察せず頑冥不靈如何ともすべからず國家の進歩を障礙すること甚しかりしかは近世の末葉に至りて歐洲各國政府は之を放逐する者相踵けり佛相シヨアスールは慎重の態度を探りイエスイタ社放逐令を發するに先ち能ふべくんば法王と妥協を爲せんと欲しイエスイタ社の釐革を提議せしに法王は愛憎も無く一言の下に之を峻拒せしかは佛國政府も終に意を決してイエスイタ社を放逐せり（一七六四年）

Solomon, Wisdom of 我邦にて大岡越前守を以て明法官の口碑的豪傑となすが如しヘブライ國王ソロモン一日朝に坐しゝに二婦の一嬰兒を携へ來たり王の裁決を仰く者ありき二婦共に嬰兒の母なることを主張す王初め其意外なるに驚き惘然たりしが二婦の嬰兒を争ふ益す激しく終に腕力沙汰となり一人之を拉し去らんとすれば他はやらじと追ひ繼り嬰兒は苦痛に堪へず啼泣するに

至る王徐に兩婦の態度を察したる後大聲叱して曰く兩婦争を熄めよ兩婦一人の兒を争ふ朕公平に之を斷すべし兒を兩斷し各其一半を取れと左右に命し劍を以て之を斬らしめんとす一婦は欣然として曰く謹みて命を奉せん一婦は泣て曰く願くは兒を以て彼女に附せよ妾復た争はじと王曰く汝こそ眞の母なれ汝兒を携へ去れ汝は兒を喪ふも猶兒の生命を保たんと欲す是れ母の至情なりと是よりソロモンの智はサムソンの勇と並び稱せらるゝに至れり

Vase of Soisson 江戸の仇を長崎で打つ フランケン王フロードウヒヒ羅馬の太守シアグリウスをソアンに敗り其地を併す（四八六年）而して此戰の戦利品の内に佛兵カレンスの寺院に於て獲たる美麗なる花瓶ありフロードウヒヒ之を得んと欲するの念禁する能はずと雖も當時フランケン人の慣習法に依れば凡ゆる戦利品は必ず抽籤を以て將士に分配し仮令國王たりとも犯すことを得ずフロードウヒヒ乃ち將士を會し戦利品を分配するに當り特に該花瓶のみは抽籤を廢して王に譲らんことを請へり衆皆曰く異議無しと獨り一兵あり憤然進み出て曰く否我王と雖も國法を紊るは斷して許す能はずと其携ふる所の戦斧を以て花瓶を粉碎せりフロードウヒヒ大に怒ると雖も侃々たる正義に對し如何ともする能はず黙して止めり後一日王軍を閲し例の兵士の携へたる戦斧に些少の鏽あるを見るや王は直に之を奪ひて其頭を斫り叫て曰く咄奴輩汝ソアソンの花瓶を記憶するやと

滿韓瞥見記

入 江 生

八月十三日 「オイ起き給へ、日の出だよ」と呼び起されて裏庭に出て見ると、奉天の空は先づ喇嘛塔の塔尖から明けて、薔薇なす東天、眞紅の太陽が地平線に現はれた時、かしこの老人隊からは拍手の音が響いた。朝の冷氣は身に染み込むやう。あたりはまるで内地の秋である。やがて口をゆすぎ顔を洗つた、此の邊の水は、悪水中の悪水で、口にふくむさへ有害であるといふので口をゆすぐのも顔を洗ふのも必ず一度沸騰させた湯を使ふのである。日本人が此水を呑むときは當てられて下痢するのに、支那人は平氣でガブ／＼と飲む、奴等の胃腸はきつと我々のと構造が異ふのであらうと思つた。

朝食後は先づ北陵見物である、停車場脇の喇嘛塔前から大方は支那馬車に乗るのであるが、我は臭い馬車よりも一里半の路をヒタ歩き、砂ぼこりは奉天の名物で道路には何處も大抵スカのやうな細かい砂が一寸計りも積つて、之れが風に吹かれてビュー／＼と飛ぶので、塵除け眼鏡をかけ呼吸器で鼻と口を蔽つて碌にあたりも見ずに煙の中をスタ／＼と通つて行くのである。此砂が雨期になると泥に變るので、其慘状は實に甚だしいものであらう、輸卒の苦心の程も察せられた。高粱畑の間を通つて幾つかの汚ない村落を通ると例の豚が往來に飛び出すので、杖でおどすとか、／＼うなりながら逃げて行く。やがて正面に滿州には珍しい松林の一群が見わた、案

内の支那人に聞くと、あれが北陵であるとの事、晝尙くらき並木の間を通つて、北陵の總門に入つた、門内には象、駱駝、鳥、高麗犬の左右十二体の大石像殿めしく、正面北陵碑を蓋ふ樓門をくぐつて、重樓複閣を巡りに巡つて陵封の前に出ると、護衛の支那兵が、そこに立つて居て手まねで帽を取れと命するので、脱帽敬禮して前を見ると、こゝにも碑があつて「太宗文皇帝之陵」としてある。流石に現大清國皇帝御先祖の廟だけあつて、建築宏壯、朝鮮の京城王宮に比して遜色がないと思つた、但し掃除の行届いて居らぬのは不相變で、いかな大美術品も例の草苙々で少少有りがた味が薄くなるのである。

午前の仕事は北陵拜觀で終り、一旦宿舍に歸つて中食、午後は城内の市街及び宮殿の拜觀である。城内へ行くのは停車場前から營口に來り御馴染の「トロック」によるので、邊門から町に入ると、流石は滿州唯一の大都である、總ての風が鷹揚で、營口のやうにゴタ／＼して居ない、其代り例の砂ぼこりは此處に最も盛で、一面にドス暗くて見た眼少しも晴やかでないのは奉天の大欠点であらう。

外城をぬけて内城を右へ折れて、宮殿に着、翔鳳閣で乾隆帝御用のダイヤモンドを鑲めた刀劍の柄を拜見した、只々アツと感じ入る計りである。宮殿の全部は目下大修作中で十分の拜觀を遂げることが出来なかつた、護衛の官吏に拾錢賄賂をやること立派な瓦を一枚呉れる、或人は之れを得て大得意であつたが、こゝらを見ても支那官吏の腐敗の狀が分るのである。

やがて宮殿の拜觀をそこ／＼に辭して再び砂ぼこりの中を西邊門からトロックに乗つて宿舍に

歸りついたのが午後の七時、休む隙も無く行李をよこめて停車場に一散走り！。八時半萬歳の聲に送られ最後の目的地奉天をあとに残して發車した。滿州の日はまだ中々暮れないのである。

最終点の見物を終つて早や歸途に就いたことであるから一行の元氣頓に恢復、連日の營養不良と疲勞どにやつれて頬骨高く、色ドス黒い顔色にも喜の情が抑へ切れぬか、誰も彼もニコ／＼もので、八ヶ間敷い車の響の中にも各列車からの歡聲がドツと聞えるのである。

八月十四日、眼がさめると車が止つて居る、昨夜十二時過ぎからもう遼陽の停車場に着いて居るので。午前五時一同起床、朝飯を終つて後遼陽の見物に出かけた、交通機關は例のトロック！。やがて市中の灰山といふ小丘に着いた、こゝで六十二聯隊附金子大尉の遼陽戰に關する講談が始まつたので……………大尉快辨よく當時の戰況を詳かに説き、鞭をあげて一々戰場を指示し、説明余す所が無かつた、殊に、市外數里の地に見ゆる首山堡の激戰を語るに及んでは壯絶思はず腕のおの／＼きを覺え更に進んで橋中佐の死を説くや悲壯一座只黙して頭を垂れて傾聽するばかり、中には窃かに涙を拭つて居る老人も見られた。

大尉の講話が終ると再びトロックに乗じて、遼陽の市中を乗り廻した、市街は之れまでの滿州市街中最も清潔で家屋が一体に廣大に出來て居り、道路も奉天のやうな砂ほこりは余りたゝない、但し商業は營口、奉天に比して余程遜色があるやうに見受けられたのである。

遼陽の市街には之れといふ見物すべき處もないので、直に引歸して、午飯を車中で食し、午後二時二十九分遼陽停車場を發して南に向つた。

八月十五日、夜明け少し前とも思はれる頃、車内何となく騒がしく、次で、「大變だ、起き給へ／＼」とゆり起されたので、さては馬賊の襲來かと驚いて飛び起きると、外には暴風雨の聲物凄く、雨は、硝子の無い窓を通して、車の中に侵入し來り、窓際にかけて置いた洋服は早ズク／＼おまけに車の上に吊りさげた國旗の紅がはげて白のツボンを眞赤にした人もあり、俄かに團扇で窓のフタをするやら、車中上を下への大騒動、此騒ぎの内に瀛車は、金州驛に着いた。外は益々激しい暴風雨……………。やがて夜は明けたが南山は濛に包まれて明らかに見えない、此様子では今日の南山登りも覺束ないと、見て居る内に、雨が少し小降りになつたので、血氣の面々、もう堪え切れず、此暴風雨を犯して南山の戰跡を吊ふべく決心して、出發以來空しく行李の底に邪魔物視せられて居た雨合羽を引かぶつて、南山の絶頂目かけて、突つ走つた。

南山の形及び大さは、先づ内地の奈良の三笠山を想像すれば大差はあるまい、道は旅行者の爲めの便を計つて改修を施したもので、非常に歩きやすい。此時雨は小止みになつたが風は愈々荒く、合羽が風を含んで泥の中に仆れむとしたこと數度、辛うじて山頂に達すると二基の碑がある、下のを鎮魂碑、上のを昭忠碑といふ、特に昭忠碑には「大日本軍政署治下、金州紳商人等、明治三十八年五月二十六日敬立」と誌されて居る。

眸を放つて四方を望むと、西に金州灣を抱き、南大連の海を臨んで、北の方金州城は脚下に見えてある、右方前面に聳ゆるのは、當年奥大將の全軍を指揮したる尙金山、烏海赤城が來つて露軍に迫つたのは、左方の灣頭である。雄大の景先づ人の心を壯ならしむるものがあつた。

南山を下つて再び列車に飛び乗るとすぐに發車、瀛車は己に旅順線に入つたのである。之れまでの一望漠々たる平原と異なつて、或は海岸を走り、或は山嶽を過ぎ、沿景に變化があるので、何となく早、内地に入つたやうな心持がした、殊に海岸を十數間許りの處を走る所邊などは宛然たる興津の景で愉快極まりない、此邊に海水浴場でも出來て、内地の老若男女が盛に此邊に遊んで、別莊旅館が立ち併べられて、滿州の逗子鎌倉を作るは何時のことであらう、蓋し近き將來に出來得べき事實であらうと感ずるのも強ち空想のみではあるまい。やがて列車の過ぎ行く處、彼處には鐵條網のちぎれ／＼になつたものがあると思へば、此處には鐵橋が破壊せられて眞倒に谷間に落ちたのが見ゆる。早旅順攻圍戰の範圍内に入つたものと思はれた。乗客は皆戸口から顔をつき出して、二〇三高地はあれだとかいやこつちののだとか、松樹山が見えた、二龍山はどれだらう、などと不案内者同志が口やかましく罵つて居る。何れにしても此邊は最早、我軍苦戰の跡に違ひないと、右を眺め左を顧みて居る内に、瀛車は午後三時半、旅順停車場に着いた。

旅順は此旅中滿州に於ける最後の地で、同時に最重要の處である。あるだけの砲臺を片ツ端から探つて思ふが儘に當時の戰跡を吊はむものをもと、早速停車場から海岸に出て港を見ると、これ程狭いとは思はなかつた旅順の港内……正面には巨人が股坐をかいたやうに黄金山の大砲臺がわだかまり、之れに對する老虎尾半島と共に港口を扼して、二三の閉塞船がマストを水面に現して居るのを一々に見渡される。眼を轉じて後ろを顧みると白玉山の砲臺は町を蔽ふやうに聳ね、忠魂碑の建てらるべき臺もかすかに仰かれるのである。地圖にもある通り旅順の市街は新舊

の二つに分れて、舊市街は専ら支那人の計畫になつたもの、新市街は悉く露人の計畫に出來たもので、停車場は舊市街の入口にある。

町の有様は、今では殆んど内地と同じで、總てが内地人の獨占である、支那町はズツト離れた後方に追ひやられて見る影も無い有様に陥つて居る、何處に行つても眼にふるゝ例の醜業婦はこゝにも亦其勢力を振つて居るので、男子に比して著しく女子の數の多く感ぜらるゝのも全く此爲めであらう。之れはいづくも同じ新開地の珍現象である。

船の出帆までには未だ二日の余裕があるので、今日は見物を見合はせて、丁度此地の要塞司令官が知人であるのを幸ひ、例の二頭馬車を驅つて、其官舎を訪うて兩夜の宿泊を乞ふことにした。此家は露人の此地に居た時も矢はり要塞司令官の官舎として用ゐられて居る處なのだそう、位置は舊市街の背後、丘の半腹で、露國式堅固な建物、室内の裝飾なども露人の居た當時のを其儘であるとのことで、壯麗目を驚かす許り、書齋には大形のピアノさへ備へつけてある、其他天井、電燈の裝飾から窓椽に至るまで贅澤を盡したもので、貨物列車の中や、アンペラの坐敷の中に寢起きして居た自分に取つては、只余りの立派さに呆然として居る許りであつた。

將軍に導かれて納涼臺に出て見ると、こゝは旅順の全景を一目に集めた處で、舊市街は目の前に屋根を併べて、かなた停車場の傍から、こなた黄金山の麓まで、ズラリと建てられた日本町。黄金山の砲臺は眞正面に聳ねて、其下の鎮守府工廠では盛に煙突から煙を吐て居る、何たる壯景であらう、何たる快景であらう、難攻不落と唱へられた東洋のセバストポールと稱せられた此要

害地は、今や一眸の下に集まつて、平和な、長閑な此町の景は、砲丸雨飛した當時の慘状を知らず顔に見ゆるが、老虎尾の影に沈む夕陽の色は、一時あらゆる砲壘を染めた血潮の色に似て、そぞろ當時の血戦悪闘が想ひ起されるのである。而も今、我傍に立つは、攻圍戦に砲兵部の總指揮官たりし〇〇將軍、其將軍が指を擧げて一々旅順市街の説明をして呉れる、自分はソフアに横はつて、滿州の夕風に面を掃はせながら將軍の物語に傾聴するのである。此時が恐らく得意の絶頂であつたらう。

やがて旅順の夜は來た、見渡す限り陸にもはた海にも電燈輝き瓦斯きらめいて、黄金山と白玉山とで、しきりに電燈通信を交換して居る。嗚呼平和の港！

夜は更けた、涼しい夜風は寧ろ肌になつたので、將軍の前を辭して寝心のよい、ベッドに入つた。

八月十六日、今日は滿州旅行の最後の目的ともいふべき各砲臺跡の見物である。久し振りの馳走に腹を肥やし過ぎたせいか思はず寝過してコックに起された自分は、身仕度もソコ／＼に先づ馬車を驅つて二百三高地に向つた。舊市街を通過し終つて海岸に出ると、露の敗殘驅逐艇が一隻其船腹を現はして横つて居る。新市街は舊市街と少しく離れて居て、三層四層の高壯な洋館が立ち併んで居るので、寫真で見た歐洲の市街其儘、大連の露西亞街より建物が新しいだけそれだけ美しく見えた。然し、之れは遠望のみの見目で、近寄つて見ると、幾多の彈痕は各々の半成家屋を穿つて一目當時の慘状が想像せられる。殊に大抵の建物は建ちかゝり許りで、完全に出來上

つたものは今の關東總督府になつて居る建物と其他の二三とに過ぎないので、若し、旅順の陥落がせめてもう二年だけ後に起つたのなら、之等の建物は悉く完成して、新市街は一層の美觀を呈したでもあらうに、と感ぜられた、今の處此半成家屋は、之れを破壊して仕舞ふのも惜しいし、と云つて之れを繼續して完成せしめるのには、一通の費用では出來ない、隨分厄介な置土産である。新市街を横斷して五六町行くと、もう坂道で、之れから二百三高地の麓までダラ／＼上りを上ること約半道、馬車は、そこに止まつたので、馬車を降りて歩き出した、道の傍には、銃丸の破片、鐘詰の空鐘など、そこそこに散亂して當時の苦戦を想起さしめたが、上りつめて頂上の今忠魂碑のある邊に至つては、只見る此邊一帶に骨片と、彈片と、空鐘と、帶皮と、長靴と、外套と、背囊の皮片とで蔽はれて、掃除するあとからあとから支那人の堀り出す爲めと、風雨にさらされる爲めに、漸次に下に埋もれた種々のものか現はれて出るので、現に、此時も、中にまだ肉の残つた儘の長靴がそこに横つて居て、中にはウジがわいて居るので、此邊一帶何とも言へない臭氣に充たされて居た。

絶頂に立つて港口を望むと、新舊市街から、黄金、老虎、兩山は言はずもがな、渺茫たる外洋までも見渡されて、其當時我軍が二十八瓏の巨砲を据ゑて市街を瞰射した景が眼に見ゆるやうで、凄絶とも壯絶ともたとへやうのない一種のイムプレッションに打たれた。案内の軍人に示されて、轉じて左方を望むと、椅子山、松樹山、二龍山の各砲壘が遙かに起伏して居るのが眺められる。山を下りて更に松樹山に向つた。道路が總て完全なので、馬車は二〇三を除くの外各砲臺の殆

んど、絶頂まで上ることが出来る。松樹山、二龍山、東鶏冠山を巡り終つたのが午後五時頃。思ひ出してもズツとするのは砲臺内部の惨状である。何れも我の爆發にかゝるもので「ベトン」の片と、岩石と、砂と、砲彈の破片とで、總て蔽はれて、處々から、人骨が、ヌク／＼現はれて居る、只僅かの破口から内部に入つて所謂塹壕の奥まで入ることが出来るので、塹壕を囲んだ「ベトン」の厚さは少くとも三尺許り、之れが強力な火薬の力で縦横に粉碎されて居る状は大地震の跡と見ゆる許り、彼方には重砲が砲架諸共眞二つに裂けて、半ば埋もれた塹壕の中から其半身を現はして居るかと思へば、此方には二十何珊の大砲彈が不發の儘ゴロリと横つて居る。其傍には、電流を通ずる導線が切れ切れになつて、焼け残りの土囊にまどうて居る處などは、とても拙い筆で誌し尽された有様では無いのである。人若し、大地震と、大火事と、大雷とか一時にやつて來たわたの光景を想像すれば此場の有様はまた察せられるであらう。殊に悲壯の感を深くしたのは各所に散在する肋骨や、四肢の骨である、就中二龍山であつたか、未だ毛髪の残つた頭蓋骨——黒いから恐らく日本兵のであらう——が塹壕の中に轉がつて居たなど、氣の弱い女は恐らく氣絶するであらうと思ふ位である。自分は之れ以上惨の極なる此戦跡を説き得るの筆がない、否、説き得るとしても、自分は有りのまゝに此景を詳寫するに忍びないのである。

あゝ幾千の生命を奪ひ去つた旅順の要塞！我國民は永久に此古戰場を忘れてはならないのである。

官舎に歸つてからも、如何にしても彼の毛の残つた頭蓋骨が眼先にちらつくやうで堪らない。ベットに入つて寝ついて後も度々恐ろしい夢に驚かされて、全身を汗に濡らせた、恐らく晝間の惨景に痛く神經を刺激せられたからであらう。

八月十七日、朝、官舎を辭して、黄金山の見物に向つた。此砲臺は殆んど完全に残つた唯一のものである、衛兵の許可を得て頂上に上ると、六架（一架破壊）の砲が嚴然と洋上を見張つて居る、傍には無線電線の受話機が一本。港口は目の下に見えて、老虎尾半島との間僅かに二町許り、閉塞の計畫も穴勝無謀の事でないと思つた、閉塞船はいまだに、或はマストを現はし、或は船腹を見せて、露國の自ら沈めた一砲艦と共に港口の大部分を閉塞して居る。フト見ると水雷艇が三隻、遙かの洋上に見えて、矢の如くに、此方に向つて馳せて來た、我艦隊、當時の活動が思ひやられずには居られない。山を下りて再び舊市街を通過し、埠頭に出ると、大連で別れた我〇〇〇丸は、灣内に碇泊して、盛に煙を吐いて居る。自分は、我家にでも歸つたやうな一種なつかしい感に打たれたのであつた。

本船に上ると間もなく、船は大牛の吠ゆるやうな長鳴と共に、旅順に別れを告げて徐々に動き出した。船長の大手腕を要するといふ港口の通過も無事に、黄金山の砲臺をあとに残して、早や我船は、洋上に浮んだ。

さらば、さらば、今ぞ訣別！乗客は皆甲板に出で、ハンケチを振つて万歳を叫んだ。漁笛復一鳴。黄金山の信號柱には信號旗が上つた。衆しばし肅然、再び思ひ出したやうに万歳を叫んで、老虎、黄金の兩山かすかに夕靄の内に没するまでも甲板を下るに忍びなかつたのである。（完）

文苑

裸蠟燭

平松萍水

金光映ゆる越路の春を斜に縫うて、長蛇を逸する如き、百數十里の信濃の川は雪も融したであらう、溢れ来る細谷川の水を運んで万代までもと、混濁の波は軽く舳をうつのである、其の水の渦まき落つる四百余間の大河口を、南東十里に距て、岌々と、越後彌彦の山は魂こもる靈峯を雲に接して立つ、茫洋たる日本海を正面にうけて、寄せ來れ攻め來れの様、あゝ、なつかしや、愛らしや。

天地開闢たる昔、天上の紫雲揺れて天降りまし、御稜威は高き、何の尊を祭れる祠の美しさは、皇族下馬の立札に表はれ、谿水石に碎けて色種々に花咲く草を押し流し「献一燈」灯は彩として爛たる伊彌日子神社はかの奇峯彌彦の黛を凝せし麓にあつて、浮世の塵は更に到らず。

かるがゆゑに、勝縁を得て悪縁を斥けん深き願の衆人を、此所に導く吉田街道は、最盛り淡天もまこと涼しい、馬子の鼻歌夢にかよふ如く、日傘も通ふれば色競ふ二八の花も來る、前の雁後

になり、あとの雁前になり、かくして絡繹の人詣り、只平打の一大慈雨を管めんが爲。

かがなへば幾とせ古りし昔よりぞ。

此の山に繁る老松を抜で、一本の杉、魔雲の尾を垂れて地に据ゑたる如く、三軍を提げて將軍駒に鞭うつ如く、月に對うて濃翠の、尙祖田の空を戀ひながら、無音の形態を中腹に吊してゐる、あらしはいぶかし、不思議の杉よ、一本杉は是なりけり。

二、

蝶が舞ふて花が飛ぶ、春も卯月のうらゝ日、女波男波の潮たぶくと吹き上ぐる水管は優に數丈と云ふ程の鯨が濱にどうまごついたか、眞砂の數と集つた、若き老いたる、不思議不思議の聲は誰云ふとなく口より耳へ、耳より口へ。

さしも名高き北つ海なれど春の華さく長閑の頃は、怒濤天に摩すなど云ふ風では無い、かの彌彦山の巖を辿れば、面を打つ様に、手にとるやうに、青波のたりくと聳ね立つ山の裾を洗つて、苔にさびた巖窟をうつつて、碎けて、散つて、しぶきは千年變らぬ松の翠に露の玉よ。しば降る霞を黄金涌く佐渡が島まで吹きやる木枯なんどの荒びに荒んで、彌彦嵐と交せつ子となり刺す肌寒く、荒波天に駈ける其の頃、蛟龍の文身は家代々の名譽のしるしと、穿立つゆれく舟は、川瀬を渡るそれにも似たる小ささが眞只中に、近き者は目にも見よと振上ぐる銚は、ス！と飛んで、鯨の脇腹は油濃き所へ、と此の様な時さへあまりに見られぬ數十尺の一巨鯨、時節もあらうに、東風吹いて波の花さく今日の海に。



青丹撒く小貝ひろひて、父の舟まつ蟹が子が歌の調も、あるは又羊を友の腕白が、箏笛の音も一時にやみ、此の不可思議や揣摩憶測が蟹の子ほをついて、津々浦々の物語り、數年平和の麓の村も、魔神の爪に苦しむ様。

すはこそ大變！。

鯨が濱にうち上げられて其の晩よりぞ、一本杉はもの凄い、彌彦の山に裸蠟燭、弱きを犠牲の、殺伐セータンの徒が領する眞夜中を但寥として家々横はる、麓の村の入り口より、重り合ふ様に二つ。

ばつと明るく、すつと細く、懸て消えんとしては小半丁先に、ほつと二つ。

金門さつと開いて雲を焼く天堂の火花がそれにも似て、搖曳紫渦巻く雲を踏んで銀鋒かひこむ天使の奇しき神火の如く、あゝ山の氣は高う響く。

崇め奉る氏神様は伊彌日子のなんで氏子に祟らつしやるものぞ、さる奇特の石女ごもが子でも授けて貰はん爲の謀よと、新次小作りなれど職業は磯魚捕の、今年二十五の血氣の口より新妻お初を諭したり。

「だつてお前さん、うす暗くなると、温まの風が日の落つる西の方よりさ、茶の花の香とでも云ふなら善いが、變手挺な薰を包んで、一しきり、さつと合圖に、それあの一本杉のあたりにバツと光るは、息もつけない程恐ろしくてさ、納戸へ行けば隅の方で、鼠がかさつくと天井に吊した種袋がぐらく揺れて、海月を墨染と云ふ風の煤がぱさりだらう、お前さんでも居て呉れば、

「そんなに氣丈か知れないが、可愛い二つの美代丈ぢや……………」

宅の燈火の油がへつて細くなるし、困るは恐くつて。」

獨り居る女が心もどなき、聞き居る新次は何の事だと云ふ風に、

「フ、フ、フ、」と高笑ひ

お初の止むる其の手に嘲りを浴せて勇まじき新次は網を肩に、

女は早や震ひて後れ毛搔き上ぐる手もなよ〜。

三、

「お初っ子、どうしたけね」と濁りを含む聲音、翁越後の男にて、詠可笑しや。

つぎはぎだらけの袷は、古手拭にきりつと帯びて年波寄する額の際に怪念の皺は四筋五筋、風は手真似でも顔色でも、鯨に鯨でも、此の翁の形容は飲込ませる事が出来ない、すべて荒くれたつたる濱の六十翁と思へ。

更に答辭も聞ねやらず、外の面の嵐吹きあるれば、數へらるゝ程伸び〜た翁が睫毛は草風に伏する様、たまり兼たと云ふ風で老翁年に似ぬ元氣の調子、

「ぬないんか、チヨ、お初っ子、暗いぢやないか。」

二つの可愛ゆき美代子に添へ乳の夢は老翁が押立聲にて覺めつ、出て來るお初は！、と見れば、歌舞の菩薩の音楽に、歌、謳ふ花ふりかゝる仲の町のソレシヤの者も及び敢へず牙彫の小町がそれにも似たるかな、

「誰かと思つたら、お老翁かい、まあお上りよ」といそぐしたるお初が襟脚雪のやう。

「時に新公はさうした、やつぱり海へか、家業だといひ、物擾な話ぢやないか、女、子一人のこして、麓の擾ぎを知らんでもあるめにな、」

「なにね、知らぬ所か、今私もその事について話してをつたの、今夜はこんな荒れるから海へも出られず、家に居てくれと願つたがね、「フ、フ、フ、フ」と笑つて行つてしまつたのよ、また今夜も糸を曳く様に火花がぼちりかね、「愛らしきお初二十は震ひたり。」

「わ、本當に麓近邊は其の評判で持ちきりだい、二人よると蠟燭、三人よると裸蠟燭さ、一人が狐の業だといへは、わーや猫だといひ、狸だといひ、そりや色々だが、お初、子！」

明治の今日だて、是が天保時代なら知らねわが、」

「それで誰か、正体を見たど云ふ人でもあるの、狐か猫か知らないが、何にしてもあれ位の事するなら願ねが巻まして、頬被りして、舞ひもするたらうし、踊りもしやうね」と、

お初老翁を得て心強し。

抑も神世より變らぬは亭々たる松を風の調べ、春なれば、花粉も飛び来る、菜の花も咲く、蒲公英までが山の岨に苦もなく我がもの顔に亂れたり、とはいへども、馬の踏むでもない、牛の食ふでもない、まして人々の何すべき、世は明治の聖代なり、葉がくれに小さな蛙が雨の日をなぐ聲清く、舳に待べる若き妻が與ふる夕餐の酒に酔ひはてゝかもめに思ひ寄するなど、いとも樂し、いともうるはし、太平の御世なれや御代なれや。

さはさりながら、山深く浮世の風と云ふよりは海の牙と突り來て、濱の眞砂の數まき上ぐる潮風と、無心が濱の習ひとに身を委ねた、否委ねせしめられた、我れ我が愛するお初新次の新妻は、若きに似けなく、變化、物の怪を遺傳的に信するなり、假例へ俠しき夫新次ありといへども。

頭は武藏野を出でし満月の如くすつべり禿げた權左の老体は——詳しくいへば權左衛門は老翁が俗名也——前齒の數に年並見せて。

「いや俺の様な翁でさへ、そねねな事は信せぬのに、お前は何んだね、狐だか、猫だかと、どうしてそんげな虚物であるものか、まあ緩りと話してきかしよう、夫の留守だといへど俺あ、もう六十だ、誰が見たとて、何といはうぞ」と權左前なる澁茶を飲めば剃のこしの様な禿頭の毛が一しきり風に弄ばれる。

日は既に長白に落ちて、山の裾より暮れかゝりぬ、新次の家は小山の上よ、彌彦山を斜右、謎美しさかの一本杉を遙に眺め、下は溪谷のささ流れ。

夕靄が一面に立つた、彌彦山は海拔二千五百余尺。

漁りの船の羅針盤 日毎夜毎に後世一大事と、白堊圓錐形の燈臺に灯ともすは浮世の潮風身にあびた六十白髪が業、此の光が丘といふ丘畑といふ畑に遮られて、微かに此所に光を投げて、

三ヶ月より後の月頃は、お初の藁茸に老幹龍の如き松影を淡う寫すなり。

分秒に暗さ廣がり行く時、

短檠の光細し、春風に吹かれて、お初が紅絹切れをのす手の捌き、權左、禿の影も細りて尙椽

に胡坐のまゝ。

溪水岩に咽んで流れ、鞆鞆の波の音に和すよ。

四、

嵐狂うて最早春風とも言ひぬ、大木をもへし折るばかり。

「お初っ子震ひちや、困るぞ。」と權左語り出だす裸蠟燭の一條、

「あの一本杉を、おつ取り巻いて、闘ひ數年おごりたる、松は曲つて、くたりとのめつて、並居る小枝の下に小さな古堂ぢや、

色なき枝葉は花の吹雪も見られぬし、たゞ精靈の息を通はして、塲を清めんための松よ、新らしい、地藏堂を右手に通れば、既に松並木の途は二つに別れて、右は瀧壺、左は山の頂へぢや、左を撰んで進めば、太古より斧を入れるを許さざる、不斷の松の賑ひにつゞくのだ、

それあの、俺が裏の藤太な、如何に藤太でも、蠟燭の正体は見届けられまいと、仲間の輩にそゝのかされて、なに神代から平和の此の村、皆の衆が寝冷の腹が溢る様ぢや只見ても居られぬ、狐か狸かいづれ夕餐の酒の肴ぢや、

野郎、俺行つて見やうと雙腕の力を願卷にこめて出たといふて、此んな野郎だが、かつて朧月に二つの影をうつした事もある程酔な處もある奴でな、

家には阿母が鐵砲玉ぢや、あるめえし行くな〜と云ふたが、なに一念堅くして動しがたく、野郎籠耳に聞き流して、

山の神なら食はしてやる、狐か狸なら食つてやると時刻見計つて、韋駄天走りさ。

こら、お初っ子、年は寄つても俺め、權左だ、何が來やうと恐い事はねね、まあ美代ちやに添へ乳でもして聞かつしやね、だが眼を開いて居るんだぞ、今に裸蠟燭が火をチョツとなぞ云ふて來るかも知れんて、此所は潮風のみで人通りがないからな。」

「震ひもしないがね、火を貰ひに來るなぞと、いやな事……………」と少しは氣味悪ろし、權左茲に到つて口嘗めすつて、

「されば、藤太の野郎、神社の流れに身を清めて齋戒沐浴、南無、伊彌日子大明神、命にかけても裸蠟燭の正体見せしめ給へど、荒節たつた、兩の手を合せて後、山は奥深く、早や右瀧壺左山頂の道標の所へ來たぞよ、

左に折れて、暫く行けば、藤太耳に聞えた、

昔思へば恨めしうござる、なせに昔は今無いか……………」

其の聲や哀れに、其の調や悲しく、藤太血の氣の無い顔して地鞆を踏んだ、お星様は雲の切れ間から七つ八つバツ〜と照つて居る、姿は振り返つて「もうし」と呼んだ、嫉妬の聲と恨みの聲とをぶちませた様な、たまらぬ聲、荒涼たる山は森として一段に凄い、

野郎、のめづる様に首を窘めて、

「な……………なんでえ」と武者聲張り上げたが身体は震ひて居つた、

奇しや其の姿、亂れ髪油けのない、紅モスの細いので尻端折つて、徒跣なり、一念執心の様、其

の髪の毛はいと長く地を嘗むるが如く小ゆるぎ風のまに／＼ぞ、晝なら陽炎の燃わた所に草うち据ゑてドット腰を落した、藤の野郎翁鬱たる木立に身をひそめて息をこらした、

奇しき女はバット火を鑽る、春風のなま温いが吹き消した、又バット、二本の裸蠟燭に火は点けられ、衣服は旁に何時か投げすてられたり。

藤太の野郎、一念神を呼んで眉に唾つけて目をぬぐつた、狐でもねね、狸でもねね、女の膚は雪と白う、腕いやに細つてな、肩に輪をなすように柄の大葉と櫛の花をく／＼りつけて居るのまがよく見わた、まるで女菩薩を凄くしたといふ風ぞ、藤太一目見て身を震はした、

月は山の肩をすべつたが忽ちもろ／＼と黒雲か蔽うて、闇ぢや、かの弘徽殿の渡殿ならねぞ、朧月夜の風情をあの黒雲めが、おそろしい程暗くなつたと、

女は突立つて手に蠟燭、風はあれども不思議に消ねえ

「昔思へば……………」凄い聲、中音にそ／＼りたて、神々の御名を誦した、雲か一段と涌いて来る、フーフーと地の臭をかいで松の茂は、藤太が楯とも頼む所へ来たは、大かい犬だ、同じやうに柄の大葉と、櫛の花の束を首輪に、滾々濡れと云ふ風で毛が長い、口は鎌形に裂けてな、野郎是には泡食つた、

逃げれば追はむの風情、飢たと云ふやうぢや、藤太段々窘んで、遂に松の根瘤に腰を落した、恐ろしい一本杉は何百尺の勢、

丁度其の時、旁への堂に不思議の聲だ「ヒヒ……………」、犬は耳立て、驀然に走る、櫛の花が三つはたしかに落ちたをうぢや、

旋風の余波は吹き倒されさうな足を踏みつけて、猫ぢやねね、狸ぢやねい、犬が付いて居るからにや、尙更狐ぢやなね、松の茂に身をそれて二三十歩あるいた、臺の椽が透かして見わる、

奇しき女は、犬に片手をのせ、傍に中腰、曼荼羅を織り出した、蓮の藕のやうな、美人の、油糝とか云ふ物を堂の扉に張りつけて、洋劔を毘沙門突きに、其の刃の光は闇にもしるく、星の地に落ちた様ぢや、

「お雛……………お前は……………」と、繪に對ふて

劔を投げつけた、ブツリと板に答へて、繪には鋭き刃の跡よ、

そして「ヒヒ……………」と異なる笑聲ぢや、其の時毎に肩に輪の柄の葉がざわ／＼と小波でも、立つる様、

裸蠟燭は細い光で、消えもせず堂の椽に突立てゝある、

劔が扉に答へて椽に落ちると、犬奴鼻息荒く、ヌーと其れを取りに行く、五衰の天女とかの果ての使と云ふ風ぢや、

其の劔を、犬の口より受取つて、奇しき女は、天を睨んだ、そして裸蠟燭を手を取つた、瞋恚の息吹き猛火となつて渦まく蒼火の様だ、藤太あまりに凄いので、地に吸ひつけらるゝ様にひたと坐つて、合唱したとよ、犬も奇しき女も早やゐない、俺あ、案内知つた山途なれば額に汗して

走つて來たど、藤太其の晩居合せた權左の俺ど、阿母に談つて、たまらぬかつたと顔を掌つて脱ぬかしたて。

だから、お初はつこ子、狐でもねえ狸でもねえ、可憐の女が、蛇身一日身を焼く三度のやうに、此の世の絆に、思ひを憔悴せうすいのぢや。」と權左の禿奴舌に任して、愛らしきお初に語り了へた、其の魚の様な眼は蒼白い、

外は嵐が荒びに荒び、油の中を滑る様にスー／＼と家に吹き込む、一帶の濱邊に篝火まばら、しかもお初新次が愛する二歳の美代子の夢は圓かなり。

コトリ／＼と背戸に音あり、お初生命を得た夢の如く、立てば裾が紅い、其の胸す目には恐れの色、星もない眞暗き戸外に爛々たる二つの眼、ノソリと歩いて、お初の足先ペロリと嘗めた、「あゝ、犬だよ」と悲鳴を擧げて權左づんぐり高い鼻してをる、前はだけの胡坐の膝へ、ぱつたり。夫新次は欸乃勇ましく、やはり漁よ。(完)

狗 兒

靜 池 庵

上
漱石先生の『猫』だけは別物として、予はあまり猫も犬も好かない。

父上も左様であつた。母上も左様である。兄さんも姉さんも妹も、いづれも左様であるらしい。で予が覺わて二十幾年、小猫一疋予が家に居た事が無い。

まだ高等小學に居た頃『佐賀怪猫傳』といふ繪入の双紙を見て、實に猫は厭なものだと思つた。丁度其の頃、予が一番上の姉さんの嫁入先には、猫が大小五疋も居て、その上「あら」といふ意地の悪い犬まで一疋飼つてあつた。そして其の姑御さんの猫好きと云つたら、それは一通りや二通りでなかつた。猫や犬を餘り可愛がり過ぎると子供は生れぬものださうだが、あれに子供の出來ないのは、もしや其のせいでは無からうかと母上は私かに心配せられた。予も或は左様かも知れぬと思つてゐた。しかし是は猫の冤罪であつた。其の姉さんには可愛らしい娘が生れて、今では慥か尋常小學の四年生位だ。

マア敷き玉へとすらりと投げ出された虎の皮の敷物、デハ御免と何の苦もなく敷いて見せる。所が君、思ひも寄らぬ玄關の横から犢のやうな洋犬に「ワン！」と一聲やられて見給へ、どんな大膽な男でも必ず一步はたじろぐよ。折角主人に面會しやうと思つて、衣紋を正して來た客を、あらう事か青天の霹靂、犬馬の類を以て脅かすとは、言語道斷の沙汰ではないか？

とは、嘗て予が「飼犬」といふ題でものした短篇小説の冒頭である。種々犬に對する不平を洩した末、針小の事實に棒大の空想を交へて、

ソレ見給へ、君の隣家の貧人は、彼奴が爲めに、質屋へ運ぶ大事な釜を打ち破り、予は又畜生に襲はれた爲め貴重な時間を浪費し、彼は母の病氣に薬餌を缺き、予は一人の叔父の末期に遅

れた。恨は同じ富家の飼犬！オイ君、これでも君は猶ほ犬の爲めに辯護するののか？と結んだ。併し今つらく思ふに、予が犬猫に對する憎惡の念は、或いはゆる喰はず嫌ひ、否飼はず嫌ひかも知れない。狗兒の話は是からはじまる。

中

「あなた犬お好きですか？」

四方山の話のついで、宿の小母さんが眼鏡越しに問はれた。

「いや大嫌びです！」

と頗る無愛相。

「私もあまり好きませんがね、悴が大好きと申しましたら、それは非常なものでよ」

「敦賀の？」

「は、今も一疋あちらに飼つて居ますがね、又一疋中上様に貰ふ約束してゐますさうですよ。」

「あの軍醫のですか？」

「は、あの軍醫正の……………」

然り軍醫と軍醫正とは別物であつた！因に、宿の小母さんの「悴」即ち敦賀の旦那さんも、たしか軍醫正である筈だ。勿論何等か知らない。

「……………此度御轉任になりますさうで……………。そして其の犬が、をかしいですよ、先に私の宅

に居ました、ロスキートの犬の子ぢやさうでしてね……………」

「ロスキートの犬？」

「は。ロスキートの犬は大層人なつこうございましてね、來い々々さへ呼べば誰れにでも附いて往きますもんですからね、とう／＼亡くしてしまひました。」

「残念な事しましたね。」

「わざわざ旅順口から送つて來たのでございましてよ。は、高い運賃かけまして……………。そしてち／＼ともこちらの御飯たべませんのでした。肉だとか牛乳だとかより外は……………」

「成る程。」

「馬鹿げてますわねハ、ハ、ハ、」

と可愛い口して笑はれる。

「それから奈何しました？」

「縛つて置けば鳴きまますしね……………。そして其の鳴き聲の大きい事と申しましたら、近所のお方に氣の毒な位でしてね……………。それかと云つて放して置けば直ぐ誰にでも附いて往きまますしね……………。あんな困つた事はもうありませんでした。そして後にはとう／＼取られてしまつて……………」

如何にも残念さう。

「札は附けてありませんでしたか？」

「何度附けても直ぐ無くしましてね。」

「誰が盗んだんでせう？」

「おほかた犬殺でせうよ。餘り毛色が奇麗でしたから！」

「敦賀の旦那さん、嚙御失望なすつたでせうね？」

「それが可笑しいですよ……………」

と例の口許に笑を湛へて、

「凱旋しますと直ぐ停車場で『おっ母さん犬は？』ですもの！松枝(孫娘の名)が事一つ聞かずに！

ハ、ハ、ハ、

「ハ、ハ、ハ、」

聞けば其の犬が、中上軍醫正の犬に宿した忘れ形身であるさうだ、此度貰はれる約束になつて居るのは。で小母さんは其の間に何か深い因縁でもあるかのやうに話された。

下

眼が開いたばかりの子犬を連れて、いはゆるロスキューの犬の忘れ形身なるものが、予が宿の馬小屋の片隅に寓居した。漆黒のつやく／＼した、耳の垂れた、尾の先の尖つた、中格好の可愛氣のある洋犬だ。

人なつこい事たびたしい！

鳥渡小屋の前でも通らうものなら、例令添乳してゐる最中でも、直ぐ振り捨て、飛んで来る。頸を伸ばし、前足を屈め、鼻を鳴らし、尾を振り、走れば走り、止れば止り、手を舐め、足を舐め、

時には胸の邊りへまで搔きのぼる。始末にをへぬ畜生だ。

なほ厭な事は、時々來つて予が手水鉢の水を飲む。「困りますね！」と云つたら、お母さんが工夫して蓋してやられた。予の手水鉢には今以て鍋蓋が蓋してある。

或日下女が餌を與へて居るのを見たが、子犬が試に自分も喰はうと食器に顔を突き込むと、鼻の尖で突き飛ばして親犬ばかり貪り喰つて居た。食物にかけては犬が最も羨ましいとは聞いて居たが、此の様を見て予はほど／＼愛想を盡かした。「餌運びにこれのは餓ゑて親雀！」とさへ云ふのに、鶏にも雀にも劣つた餓鬼だ！

子犬はする／＼大きくなつた。稚虫のやうにくる／＼肥えて、埃の中に轉がつて親犬と巫戯ける様は丸で應擧の繪のやう！予でさへ餘り悪うはないもの、敦賀の旦那さんに見せたらごんなに喜ばれるだらう！

も一週間すれば敦賀から出張してお出でると云ふ其の日の午後！

學校から歸つて見ると、門の前に親犬が悄然として立つて居る。「小犬は？」と聞くと、「取られませんでした！」と下女。

「取られた？」

小母さんも玄關に出られて、此の二三日前何處かの小父さんが相談に來ましたが、たつた一疋だから遣られないと斷つてゐましたら、今朝もまた來まして是非欲しいと云ひましたけれどもなほ肯かずに居ましたら、晝頃から遂ひ亡くなつてしまひましたと。

「どんな小父さんでした？」

「田舎の人らしい……………」

「失敬な奴ですね……………警察にでも訴へてやるさう！」

「これも何かの約束でせうよ！」

小母さんは存外あきらめが宜しい。却て予は未練がましう、

「だつて……………、可哀相に乳飲子を！」

「若しあの小父さんが養つて往つたのなら、まさか皮を剥ぐやうな事もしますまいから！」

蓋し小母さんの考では、あの小犬の祖父さんの因果が今其の孫に廻り來つたものごでも諦めて居られるらしかつた。

* * * * *

其の夜の夜半、不圖目を覺ますと門の邊りに犬の遠吠！

漱石先生の『一夜』に、遠吠の事が委しう形容してある。しかし今夜の鳴き聲はそれとも違ふ。

違ふ筈だ。凡そ遠吠は物を怪しんで吠えるのである。云はゞ人の爲めに吠わるのである。然るに今夜の遠吠は？

遠吠といふよりは長鳴である！

恨むるが如く訴ふるが如く！時には扉に繼つて天を仰いで嗚咽してゐるらしい！時には身を大地に慟つて擲哭して居るらしい！自分で自分の胸を掻き裂き、全身の毛を引きつ撈て、狂ひ悶わて

居るらしい！

ア、あの聲は！

聲といふよりは響である！心の底の奥の底から絞り出された響である！

食器から子を鼻の尖で突き飛ばした、あの淺ましい畜生にも？と予は直ぐ昨日の新聞にあつた、五つになる子を取られて狂氣になつたといふ母親の事を思ひ出した。獨逸語の讀本で習つた、猛火の中に飛び込んだ鶴の鳥の話の思ひ出した。謠曲の百萬、乃至隅田川の事を思ひ出した。嘔乳房が張つて居るだらう！と淨瑠璃の文句までが胸に浮んで、思はず涙がホロリとこぼれた！。アレまだあんなに鳴いて居る！

其の夜は遂に眠れなかつた。そして其の後犬を餘り憎くは思はなくなつた。(終)

破格四章

湘碧子

赤城山上の感

前に望む關東平野

三尺の杖をつきて

茫々億万頃、

四千尺の峯頭に立つ

目路遙かにさへぎるは

五尺の小軀、

東筑波、南富士、西淺間

天は晴れたり

夏の日の午後二時

炎帝赫灼

万像焼けんとし

草いきれ、花の香

谷よりの風に

濛々天に朝す

虫なげど鳥なげど

皆惰氣の聲

樵夫等は斧を枕に

木蔭に睡るか

吾と在るは

吾の影のみ

幽渺太古の如し

噫、此時

脳裡にひらめきし

電光一閃

口を衝いて語をなす

「悠々たる哉天壤」

反響谷に起りて

しづまは破れぬ

しづまは破れぬ

されど、そは一瞬。

復た寂寞。

想へば推參なりき

小さき人の子

山を踏み

天に近づきしこと

壯嚴の天

美麗の地

彼に在り日月星辰

此れにあり山川草木

偉大なり

崇高なり

新たなり、永劫に

人を見よたゞ蠢爾

搖籃と墳墓の間に

五十年の命

常に自然を犯し

而も、あゝ何をか成さん

弱小の身

悲しからずや

此恨胸に抱いて

人は入りぬ華嚴の瀧

彼所の斷崖は

文苑

此所の絶壁にも似たるか

吾も飛ばし奈何

と躊躇ふ刹那

靈感に五體震ひぬ

天地の間に生を得し

人間は天地の子

天地の心は人の心

彼大なれば

吾も大なり

彼も美なり

吾も美なり

天地次第あり

人生秩序あり

亂臣の亡び

賊子の倒るゝは

落つべき星落ちて
裂くべき山裂くるにひとし
人生のみ呪ふべきか

否々、否々

「悠々たる哉天壤」と

歌ひし吾は

喜びと讚美の聲に

天を仰ぎ地に俯して

「悠々たる哉天地の子」と

高く、高く、高く叫びぬ。

花ふらり

咲きも残らず散り初めぬ

お江戸は花の向島

晝の人波なぎたれど

まだ行くさ來さちらほらと

片月も匂ふ燈し時
ひさご結へし一枝を
肩に、來かゝる千鳥足
頬ひげ飽くまで悪さげな

憂止、鞘當て、「うぬ、無禮」

手を膝までに詫び入るは

まだ掲捲の、部屋住か

「許さぬ、恚う」と打ち下す

拳捉へて『理不盡な』

關口流の腕の冴え

美事投げたり二三間

水音たてゝ隅田川

ひなぶり

村の名物。竹庵様に

たらが與作と新家のお糸

與作二十五働き盛り

可愛いお糸は十三七つ

竹庵様のた匙の加減

醫者もうまいが媒介人も上手

村の名物三つもそろた

明日の祝儀は日本一よ

妹

晝母上の針仕事

邪魔して泣いて乳もろて

「誰かと地頭には勝てない」と

脊中撫でられ笑泣き

涙の末は美しき



小さき夢に流れ入り

何天啓の智を得しか

覺めて忽ちたごなしう

箱取り出でし妹が

南の椽にたゞ一人

猫の「玉や」と雛遊び

「雛の母はわたしよ」と

一つを抱いて脊さすり

「誰かと地頭には勝てぬてふ

ませた姿の可笑しきに

緋桃が散れば堪りかね

箱の御殿の姫君も

腹をかゝへて倒れ俯し

「玉や」もにやあと笑ひけり

もぐら

渡邊庸三

鳥羽玉の地のした闇の二つ星
花に焦るゝ蝶の眼か二つ眼かまんたこやきさて
蜜をもとめてつちわけて
暗わけて行くもぐらもち。

夏日なつひ咲くつちかほらする打水の
月行く夜半の郭公なくか幽かふ水の泡の
消ゆる響の聲きけば狂ひあへぎて土わけて
暗にかぐやくもぐらもち。

汝はたとへば詩人うたひびとかつちにつきせぬ音ねを忍び
こゝに自然の聲ありとつちもりあぐるもぐらもち。
人のなげきと喜びと人の心の移るひて
あゝ人うつり人は去り

あゝ人榮む人沈み
一つ一つの土くれも過ぎしかたみの香をこめて
花とほゝえみ雲とどび
露と玉しく聲きけば
こゝに偉人の聲きけと土もりあぐるもぐらもち。

よしけし花の色なきも
よしや薔薇しゅうびの香はなきも
月も乙女もべによりもあゝ琴かみよりも花よりも
すぐれてくしく美はしく
詩神の影を我は見ん
冥府よみにかぐやく二つ星二つ眼まんたこほゝえみて
つちわけて行くもぐらもち。

わかれ

てんなん

葉ざくらにくれむの春の薄月夜二十の今を夢と見しわれ
待ちわびて醒めぬ昨夜の甘酒の香やいづこ春やいづこに

蝶 蝶

世は蝶の花より花の口づけや春の三日にねぎ事多き
花に舞ひ羽合にうけし一ひらの緋の桃重く蝶たちやらぬ
うらみわびて足曳になやみ花かけにいこう蝴蝶に罪ありやなし
終日を花にあこがる揚羽蝶狂ひし胸に春説くな君

さるこのありし時

此思ひ似たり白蘭の蕾ともあゝ思ひごも我思ひごも
月こそは左肩をぬがむ神木立涙は強き胸といらへむ
花蓮水草にまかる世としれな涙にうつる十六夜の月
真珠か虹にもまして美しき犠牲や今日見ぬ胸の焔よ

行軍の折りに

時ぞくれば錦おりなす春の野邊北陸道も花がすみして
あすこそは一舉尾山の險をぬかむ雨に一夜を温泉の人や

四高俳句會席上吟

時鳥

温泉の宿や床の鬼百合あちら向く

静池

花は皆 毛虫になりて 時鳥

紫影

百合切ると 浴衣に赤き 花粉哉

白水

森を 抜く 塔の九輪や 時鳥

同

百合咲くや 蛇を危ふむ 小山道

同

時鳥 宿直所の人すくな

同

山百合や 蛭千母の 底 暗し

同

奈良七日 豆腐に 飽きぬ 時鳥

静池

曉や 百合切れば散る 百合の露

紅芙蓉

大徳の 庵に客あり ほととぎす

同

白百合に 戀美しき 神話 かな

秋雨

濱名渡る 夜行 列車や 時鳥

白水

鄙暑し 鬼百合の花 咲けば 尙

同

満願の 曉近し ほととぎす

同

一夜酒

紫影

時鳥 啼かねば 叩く 水雞かな

紅芙蓉

泊りがけの 子供の客や 一夜酒

紫影

杜鵑 曉 こゆる 大河 かな

同

甘酒や 茶碗ふせたる 膳の塵

白水

子規 横河の 阿闍梨 壘かな

秋雨

登第の 子を待つ母や 一夜酒

紅芙蓉

客僧は 聞いたと いやる 時鳥

同

袷着て 團扇つかふや 一夜酒

霞村

百合

甘酒屋 助郷の人 憇ひ 去る

秋雨

百合入れし 水槽溢る 清水哉

紫影

果樹園に日ぐらし毛虫焼きにけり

白水

風涼し 水にうなづく 百合の花

同

川へ流す 毛虫つゝむや 紙袋 白水
 水樓の 掛提灯 や 青簾 紅芙蓉
 青簾 長き入日の 漏れて くる 同
 藻の花に 窓ゆく 水よ 青簾 美島
 五月 五月 紅芙蓉
 新邸に 竹の雨さく 五月 哉 美島
 函嶺路は 一八多き 五月 かな 秋雨
 尺八に 簾の竹切る 五月 かな 秋雨
 梅 實 萍水
 見残しの 梅の實黄ばむ 葉蔭哉 白水
 病む人の 閑を梅の實 數へけり 萍水
 五月 五月 紫影
 甘き香の 何の木ならむ 五月 白
 すれ違ふ 衣の一薰や 五月 白
 灯して 夜桑摘みけり 五月 同
 五月 鱸となるべき 灯かな 紅芙蓉
 五月 水雞かと聞く 音すなり 秋雨
 櫻の實 秋雨

實櫻に 社頭の午や 金魚 賣 紫影
 七寶を 芝生に點す 櫻の實 静池
 雨ざれの 鳥の糞や 櫻の實 白水
 亡き子憶ふ べんく草や 櫻實 萍水
 小娘や 指紫に 櫻の實 同
 泉水の 金魚へ落ちぬ 櫻の實 墨村
 心 太 墨村
 蠅多き 馬の 立場や 心 太 白水
 繪幟の 古き 日よけや 心 太 墨村
 飛 蟻 飛 紫影
 校倉の 床板高し 羽蟻 飛ぶ 紫影
 飛蟻どぶや 長柄の橋の 橋柱 静池
 雨ざれの 郵便受や 羽蟻 這ふ 白水
 羽蟻どぶや 一八多き 下屋敷 萍水
 薪を割る 斧の下飛ぶ 羽蟻かな 紅芙蓉
 夏 書 紅芙蓉
 夏書果てし 心弛みや 肩の凝 紫影
 一日の 懈怠悔しき 夏書 同
 晝顔に 故人を夢む 夏行 かな 萍水
 夏断して 空也の瘦も 佛かな 秋雨

北辰時評

暗流録 四

○北辰文壇の振はさるや久し、而して今や其の極に達せざるか、吾人は恐る、そは吾人は正にその責を受けざるべからざればなり

○然れども記せよ、盛衰は殊に詞壇の免れ能ざる所なり、人間の思索は常に規則正しき間隙に於て行はれ、詩歌の靈感は常に機械的に營まるべきにあらず、たゞ機運のみよくその意志のまゝに一切を左右するを、見よ大詩聖は大詩聖と共に來り、大文豪は大文豪と共に去る、北辰文壇今やたゞ再興の機運を待つのみ

○北越の地果して詩趣に乏しきか、皚々の積雪と號叫する朔風とは大なる詩題ならずや、鞆鞆

たる北海の怒濤と寂然たる白山の峯頭とは畏敬すべき詩境に非らざるか、雲と飛ひ雨と亂れ霞と飛ぶ出沒常なき天空は、驚くべき詩趣の存せざるか、而して我が文壇のたゞ一人聲なきは何ぞや

○文や詩やたゞ騷客の閑事として雲煙過眼されし時代はともあれ、文學は今や新らしき意義と尊嚴とを以て一切思想の中堅を作り、巍然として人界を端睨す、胸臆に一片の理想あり苦悶あるもの何ぞ來て以てその清醇の香を求めざる

○詩は一切思想の根本たると同時に花實なりとはシエレーの語なり、宜なる哉

○哲學は一切科學の上に築かれたる樓閣の骨子なり形骸なり、誤らざる理性のもとに獨断を交へず假定を加へず、純粹經驗の木材を正式なる推理の法則に準據して、堅固に構成したるものなり、誰か智識を呪ふものありや、そは大なる

誤なり、誰か哲學を無爲となすありや、そはたかすや、見よ、玉を躍らす深溪の涼しき響に和た絶望あるのみ、蓋し唯一吾人か思索の武器を未だ血塗らすしてこれを折り、尙且つ戰場を去らんとせさればなり、ともすれば世の宗教を云爲するもの智識を侮り哲學を笑ふ、何ぞ其の痴能なるや、一切の宗教は哲學を待つて初めて完成し、一切の神は合理にして初めて存在す、迷信は哲學を知らざるか爲めなり、邪教は常識をさへ蹂躪せんとすればなり

○哲學は完全なる常識なり、然れとも哲學はた思想の形骸を收むるのみ、哲學の認識する神はた、概念のみ、故に哲學は一切科學の上に築かれたる堅牢なる樓閣臺の骨子なり

○何をか以てこの樓臺の内容とし裝飾となす、曰く詩歌及び一切の藝術これなりと

○見よ燦然たる星斗を鏤めたる幽遠の蒼穹は清新にして而も森嚴なる神意の何物かをささや

かすや、見よ、玉を躍らす深溪の涼しき響に和して尾の上の松にかなでたる微風の洒々として而も永遠の生命を持する神意の、何物をか語るよ見、金光曉天に暗黒の魔形を射て、榮華を大空に誇つて再び慰安の夕靄につままれて静けく、玉兔徐ろに碧瑠璃の球なす大洋のあなたに昇りて、海面遠くしら金の花を亂して鮮やかに天地の榮のきらめくひまに、壯大にして而も華麗なる神意は宇内に溢れすや

○豈た々に沈香くゆる御遠の内と云はんや、果た白百合薫る會堂の奥と云はんや、清楚たる庵室の叢の中、破れたる鐘樓の雨雪にさらされて蒼古の色を示したる、何れか神の玉座ならざるべき

○然り神の玉座は宇宙の何れにもも存す、荒磯に打ち上げられたる破船の斷片の上に、神は古雅の面に限りなきほく笑みをもらさすや、しばし

薄き羽衣をやすめたる胡蝶の重さにも堪えて、華奢なる芥子の頭重げに垂れたる、こゝに神は可憐の姿してたゞすめるにあらずや

○豈た々に自然のみと云はんや、やつれたる鬚髯は惡臭のそよ風に戦き、窪みたる眼光は憂愁の色をその視野に流して、毒蛇の炎に鍛ひたらん黒金の鎖に二つの手と足を縛られたる人の、時々聞く人の心を石にもなさん呻のものも、獄屋、こゝにも亦神は深刻の額をあげて凝視するを見すや、今微風の渡らば、紅きはそと唇を開き、白きは徐にこほれなん牡丹の園、搖籠に行く春の光を浴びてみどり子の眼太く開き、天地の事を悉く寫し、怒るともなく笑ふともなき無識の様に一切を觀したる、こゝに神は純潔の瞳に而も無限に森嚴なる光を混してほく笑めるにあらずや

○思へ、迦毘羅城頭、輕裘の公子前後を守り、

窈窕の佳人左右に待し、馴馬の蹄聲震に入り、車輪の輾地下幾由旬を驚かす、知らずや華麗の目ざしうて神は密かに俊英の太子をほく笑ましめぬ、局面は變じぬ、頽白の老翁は道路に負戴し、病苦の非人路傍に輾轉し、紅顔の夢一縷の煙と化するや、神はこゝに悲哀の色して太子を泣かしぬ、然り神は一切の表情を以て常に吾人の周囲を繞る、菩提樹畔明星の爛々たるや、神は喜悅の情を示し、エルサレム街頭鮮血の刑臺に亂るゝや、神は健闘の快を覺えて飛躍しぬ、人生何れの處か詩趣のあらざるあらん

○去つて空想の境を問はゞ醇醴醴の香蓋し無窮に漲りて尽きざるものあるべし、かくして崇高なる藝術は神の内容なり、一切科學の基礎の上に華かれたる樓閣の裝飾なり、吾人か宇宙をして意義あらしめ得るはたゞこの内容と裝飾とありのみ

○若し我が世界に於て歴ふべきありとすれば、たゞ世界が善美ならざる事にして、不可解なるか爲めにあらず

○然り吾人は一切を解すと云はず、寧ろ解せざるは吾人の相對的作用及び能力によりても明なるべし、然れども吾人は幸にして吾人が要求する解釋に向つて歩を進めつゝあるは事實なり、而して吾人の憂ふるものは寧ろ得られたる解釋の意義あるや否やなり、そは吾人が智的追求めによりて求め得たるものは少くとも善美と矛盾撞着せざるを欲するか爲めなり

○文學の輕賤せらるゝ事、蓋し北辰校の當時の如きものはあらざるべし、戰亂の間奈翁はホーマーを離さず、時にヴェルテルを愛讀して措かざりしと云ふにあらずや、兵馬によりて天下を得たるも尙文學の尊敬を忘れざりし家康あるに非らずや、而も平和の世學を根底として立たん

とするものゝかく文學を雲煙過眼視するは果して謙讓を以て稱讚すべきものなりや、更に筆を改めんと云はんと欲するものあり矣（五月三十日空白）

五

○行く者をして行かしめ、倒るゝものをして倒れしめよ、枯草朽ちて初めて春草の萌ゆるを見すや、至靈を天地に誇る山川の威力も、時間の前にひれふしてその慈悲を仰ぐ、況して變化の間に生命を知り、發展の間に意義を知る人生のいかでか生滅の理にもれざらんや、願くは老朽なすなきを捨て、新興の機運に乗せしめよ

○誰か云ふ最舊のものは最善のものなりと、然り最舊のものゝよく改善され補遺さるゝ間こそ最善のものなれ、若しこれを改善せんにはその實質に根本的の移動を生し、これか補遺をなすや反つて全体を害するに到つて而も最舊のもの

は果して最善のものなりや、天に明暗あり物に命數あり、相互對立の世相に於て何んぞ不死不滅を説き得んや、須らく矛盾せる一切を亡はし撞着せるすべてを倒し、再來の元氣に生き新興の活躍をほしひまゝにせしめよ

○吾人の云ふ所以のものは、語學部所屬の國語漢文兩會の生命を思ふ爲めのみ

○眞摯なる意義を以て、吾人は國語漢文を語學として學び得んと欲するか、辯に能否ありと雖も、吾人は今更國語を語學として學ばすと雖も、やゝ意志を疏通し得るを信ず、辯の能否に關しては別に演說討論部ありて銳意その事業の爲めに爲すあらんとす、蓋し語學部に從屬せる國語漢文の兩會か、この羈絆に束縛せらるゝ奇怪なる、何んぞ識者を待つつの要あらんや

○從來この兩會の事業として斯部に關する人の苦心や實に至大にして、而も何等得る所なきは

寧ろ憫むべき事實に屬す、縛して而して打つの暴は、今我がこの兩會の不振に對する一般の批難に残れり、吾人は切言す、打つ前に先づ兩會の縛を解けど

○破邪はやかて顯正なり、兩會の拘束する羈絆を兩斷せば、兩界の眞意義自ら明なるものあり、蓋し兩界の職責や、言語の操縦にあらずして文學的趣味の涵養に存す

○これを從來の事實に徴せんか、兩會の事業は文學的講述にして言語の操縦にあらず、見よ會ては天の網島の講演ありき、會ては俗諺に關する講述ありき、會ては徳川文學の批評的説明ありき、會ては唐詩並ひに作詩術に關しての講演ありき、かくて事實に於て兩會の事業たるや口舌の修練にあらずして洋々たる趣味の教育なり

○如何にして兩會の驥足をのばさしめ得るかに

關しては、強ち策の得たるものなきに非らされども、寧ろそは至難の中の至難なるものなり。○吾人はすでに文學的趣味涵養の目的を有する和漢文兩會が、言語の修練を事とする語學部内に屬するの矛盾を指摘しぬ、かくしてこれを避けんか爲めに兩會の進むべき道はたゞ二あり、曰く文學會として獨立するに非らずんば、跡を北辰會に斷つべきのみ。

○由來文學の輕視せらるる北辰會に於て、文學會設立の事を思ふ、寧ろ痴愚の極のみ、然れども吾人は我か思想界を恐るゝ事切にして、これか救助はたゞ崇高にして森嚴なる趣味の涵養のみあるを信して疑はず、蓋し一切の文學は哲學や云はず詩歌と云はず、寧ろ完全なる常識に外ならざればなり、化學は化學者の化學にして物理は物理學者の物理なるを肯すと雖も、未だ文學は文學者の專有物たるを欲せず、文學の源泉

は豈たゞ、詩人か方寸の間にのみ滾々として湧き、哲人か頭腦にのみその影を映するものならんや、いやしくも物を知り物を感じ物と思ふ人間の胸裏に美はしき感興の泡沫を飛ばして日夜涓々して流れ緩々として行く、胸裏常に無韻の詩歌を吟し、無聲の樂を奏す、何ぞ音調ある詩歌を求め、曲節ある音樂を願はざらんや。

○吾人は疑ふ、人間最後の至大なる欲求にしてよく健全なる意義を與へ、よく崇高の人格を養成し得る文學及び藝術の、何故にしかく君子の壓忌を受け、聖者の嫌惡を買ひしかを、蓋し美的音樂や苦痛に非らずして至上の快樂なり、難行を道德の根本とし、苦行のものを以て人生の意義を教ゆる方面より觀すれば、快樂は常に罪惡にして微笑は神の森嚴を害する咎あり、一切人類の音樂を制限せざるべからざる程吾人か性能は奔放なりや、區々の小瑾を顧みて人情至

高の要求は拘束せられざるべからざるか、吾人は吾人か一切を眞摯に批判し得る知的情的及び意的の良心を眠らしめて、而して尙人生に意義ありや、善惡はたゞ吾人の一心のみよくこれを知り、美醜はたゞ吾人の胸裏に於てのみ感ずるを得、知識は吾人自らを欺かざる學術的良心のみよく正邪を判す、吾人か良心は常に善なるもの美なるもの眞なるものをのみ得て深底より喜悅し歡呼す、吾人はその何か故なるを知らずと雖も、吾人か意は善を欲し、吾人か情は美を欲し、智は又眞を欲すればなり。

○眞善美の追求や、これを得て必ず喜悅す、若し遮情的の方面に遮すれば、快樂の故を以て眞善追求も拒絶せられざるべからず、而もこの兩者の白日堂々と講壇上に演述されて、美的要求のみ無道の迫害を受く、あゝ吾人その果して云何なる意味なるを知らず

○或は云はん、美の追求は多く岐路に入り易しと、然り大に然り、岐路に入り易ければこそ最も至高なる涵養を要するにあらずや、吾人の一切根本的要求は猛烈なるものありと雖も、又一時抑制せらるゝ事あるべし、然れどもそは單に一時のみ一瞬のみ、拘束去つて赤裸々の要求は尤も露骨に尤も野卑に顯現せらるゝは、殊に教育ある現代の社會に於て甚たしとなす、吾人は吾人の言を強めん爲めに多くの實例を欲す、然れともこは醜の極点に達するもの多ければ、たゞ知る人の知るまゝに任せぬ。

○然り、現代教界の様はかくして假面の行列なり、操行を天下に歌はれたる龜鑑の青年にして一夜を経れば天下嘲笑の行を肯てす、吾人今日の秩序と嚴肅とを表面に喜び、明日の壞倫と放縱の裏面に泣かざるべからざるを思へば、皮膚粟生して戰慄に堪はざるあり、あゝかくして現

代青年の指導その道を尽せるか

○一切他律的制裁はよく患痛を欺き得ると雖も自覺ある文明の人心を支配せんとするは暴にあらすして狂なり、見よ大古の人心を戰慄せしめたる雷電や洪水や、今に及んで何等吾人か道德的生活に對して權威ありや、威勢天地を震はし權能宇内を統御し、森嚴たる秋霜の威を以て吾人を畏服せしめしエホバ、今に到つて何んぞかくの如く零落の悲境に沈淪するや、先人云へるあり、神はアダムを作らず却つてアダムは神を作りぬと、至上の權威たゞ我にあつて存す、宜哉

○吾人は盲目にして一切の何物にも服従する能はず、そは畢竟生命を無意義ならしむればなり、若し文學藝術の危険を以てこれを排斥するは、薪を以す火を防ぐか如く、よし一時は火炎を収むるも更に猛然としより強大により危険に、黒

や
○吾人は切に我か北辰會の更に文學を尊重し畏敬し、所謂狂言奇語の戯を以て冷視せざるを願ふてやまさるものあり

○事態かくの如くにして吾人は北辰會裏に文學會の勃興を思ひ、國語漢文兩會の獨立を絶叫す○或は云はん、獨立せる國語漢文會の新事業果して如何と、然り、こは重大なる疑問に似て實は然らず、其は大体に於て同會の主義はずでに文學的趣味の涵養に存すればなり、而も細少の未事今に當つて暇々するは機を知らざるもの爲す事に屬すればなり、こゝに到つて吾人は毫毛の筆に冠して、たゞ時を待つものあるのみ、敢て識者の熟慮を求むと云爾（六月一日空白）



煙天を嘗むるの威を現するに到るべし、永久に燃焼せされはやまさる火炎は、たゞこれを危険ならざる方面に誘導するの策あるのみ、文學的趣味の涵養は正にこの謂に外ならず

○尤も自然に感謝すべきは吾人か性能の常に向上し發展せんとし、一展向上したるものは偶然にして墮落するものにあらざる事なり、殊に趣味の向上に於て然りとす、蓋し人間最高の要求にして最も自然に近きものなるか爲めなり

○思へ、一切思想の頂点に達するものは文學なり、我か王朝奔放なる思想はよくその人生と融和せし跡を永く當代の文學にとゞめ、森嚴にして歴世なる思想は鎌倉文學より引て足利時代の文藝の發揮する所にあらずや、中世人道派の主義は、ルネッサンスに到つて高潮を呈し、近世の自由思想は又獨逸佛蘭西の文藝復興期（イェルミニスム）の文學によりて体现せらるゝにあらす

狂夫言二

河合生

狂夫今や旬日にして校を去らむとす、回想す、三年茫として夢の如し。得る所無、養ふ所無、吾が云ふ所蓋し亦無ならむか。無乎無乎狂夫之を知らず、知らざるを以て止むべからず。古諺云はずや「思ふこと云はぬは腹ふくるゝ業なり」と。思想のあらむ限りを吐かしめよ、不平の有らむ限りを盡さしめよ、然る後風光霽日の感あらしめよ。想つきて血一斗を吐くも亦可ならずや、物事は極端まで行かずば其真趣を解するを得ず。余は「良人の自白」に於ける白井俊三の

悟り方を好む者なり。
狂夫先づ斧を振つて時習察の禍根に及ばむ。見
苦しき哉混沌の時習察、寂々たるかな無人の時

習寮。狂夫嘗て時習寮の發奮を切望し、反潑的言辭を用ゐて其の猛奮を促せしこと再三、恰も時習寮君子諸君は揚言して曰、動く能はざるにわらず、わざと動かさる也、と狂夫其言の理にして美なるに酔ひ、時習寮亦人なきにあらずとなし、靜に其動靜を觀じき。

木葉も落ち、霞もすぎ、やがて暖き春は來つれども時習寮は未だ勦々然たること睡鯨の如し。

狂夫其睡眠のあまりに長さに驚きたり、然れども尙は靜に其成行を觀じてやをら長鳴の期あるを待てり。

時はさつきの初め方と覺ゆ、燕子花漸く荅を破つて世は三春を吊ふとき、果然寮生は枕を蹶つて立てり、猛然として奮起せり、然れども其の蹶蹴や悲むべし、憐むべし、飛んでもなき活動なりき、門違ひ的發奮なりき、月明を曉と見誤りしか、電氣燈を太陽と誤解せしか、白日堂堂

狹にあらず、人々の所信は人々勝手たるべし、然れども根據なき所信を以て人を疑ひ、若しくは人を罰せむとするが如きは吾人の取る所にあらず、特に殆んど公職につけると稱するも可なる寮委員其人に於て然りとす。孔子曰はすや「其の罪の疑しきは此を罰すべからず、其功の疑しきは之を賞すべし」と。人を統率せむとする者は恩と威とを施さざるべからず、所謂威ありて猛からずとは其のモットーたるべきか、然るに寮委員諸君は恩威並行の術を知らざるのみならず、徒に人を疑ひ人を傷け自己のなき威を猥りに振り廻さむとせしものにあらざるか、誤れるも亦甚しと稱すべし。翼ある鳥すら空を飛ぶには幾多の練習と勞力とを要す、技術に秀でたる工學者すら未だ飛行艇を完成し得ざるにあらずや、況んや威なき徳なき諸君が自己の威を張らむとせるもいかで高く飛ぶを得むや、寮生の一

ど立ちて寮風の爲め、北辰校の爲めに躍進すべき在寮君子諸君は一個微細なる顯微鏡的問題を提げて闇夜に奮起せり。其武者振りの男々しかりしか女々しかりしかは闇の夜の奇襲なれば實に知るに由なしと雖も、炬火の用意すらなくして谷底目懸けて盲進せしのみは事實なりき。

闇夜の問題とは何ぞ、顯微鏡的問題とは何ぞ。落書問題に關する暗闘是也。余は時習寮が一落書の爲めに大問題を惹起せしは必細心翼々となりしを喜はざるにはあらざるも、かゝる問題を天下の大患の様に心得て騒ぎ廻る寮委員諸君及び寮生諸君を戒めむと欲する者也、

佐藤正俊氏の人格は世既に定論あり、特に氏が根本通明先生の膝下に人となりし徑路を知る者は誰れか亦氏を以て下卑なる落書をなす者となすものぞ。然れども余は余がかく信するを以て頑迷なる寮委員諸君もかく信せよと云ふは必偏

端より不平の聲渦の如くに起りて爲めに、全寮闇黒遂に寮委員の解職に至りしが如き亦故なきにあらざる也。

寮委員諸君、人を殺すものは國家之を罰するに死刑を以てす、足下等は肉體と精神との何れを重んずるや、肉體の殺人は死刑とせば精神の殺人犯は之れ何を以て償ふを得べきか。佐藤氏に落書事件の責を歸するは佐藤氏の人格に與へたる殺人的侮辱にあるざるか、余の佐藤氏を信する必しも眞ならざると同時に足下等が佐藤氏を落書の犯人となすも必しも眞ならざるべし。實に必しも眞ならず、眞ならざるの事實を以て佐藤氏の人格に拭ふべからざる汚点を印す、足下等は何を以て之を辯せむとするや。

聞か足下等は落書事件の起るや、寮生内の彌次的傾向を帯びたる者十數人の筆記帳を調査して以て佐藤氏の筆蹟を以て近しとなし、此を只一

の證據となして佐藤氏を責めたりと云ふ。行政裁判は警察官吏にあらざれば之をなす能はず、足下等は誰れによりて行政裁判權を附與せられたりしか、況んや十數人を撰びて(寮委員三名の投票を用ゐると云ふ)之を査定するが如きは、沒常識も亦甚しと云ふべし、人若し問ふてその筆者は足下自身なるやも知らず足下は足下の筆蹟を調査せしやを詰問せば足下何を以て之に答へむとするか。

聞く足下等其過を知りて職を退かむことを乞ひしと、遅きながら爲さるるよりは宜しかるべし。而して舎監は足下等の請求の有無に關せずして足下等の職を解きしと云ふ、舎監は一寮を治むる上それ位の權式は固より其所なるべし、然れども足下等の責任は辭職云々によりて消滅せしものにあらざるを記せざるべからず。

余は亦寮生中に於ける不平連に告ぐ、時習寮は

斷じて舎監の時習寮にもならず、寮委員の時習寮にもならず、現在寮生及び過去寮生の時習寮なり。然らば時習寮制度の本躰は自治也、例へば時代によりて舎監の威を逞まうして、專制の臭味を帯ぶることありども、例へば時代によりて寮委員其の權を張りて貴族制の臭味を帯ぶるともかくの如きは斷じて時習寮の本躰にあらざる也。一時の上塗のみ、其中實は明光皓々たる自治の光を發せざるべからず。かくの如き尊ふべき自治の下にある寮生諸子が寮委員の專横及び敗徳を憤らば何を公々然として之を衆議若しくは舎監に建白して其の進退を明にせざる、始めに言大にして後に屏息するが如きは之れ男子らしき事にあらざる也。

時は遠慮なく經過す、沈滞の時習寮は今や一年を終らむとす、舎監亦既に決然として銳意時習寮の革新を計らむとする者の如し、吾人甚だ喜

びに堪へず、然れども姑息なる改革は斷じて不可なり、根本に斧を入れよ、然して善美なる寮風を起して自治の精神のある所を遺憾なく發現せよ。時習寮は校風の泉源なり、泉濁らば末流清きの理あるべからず、北辰校の聲價をあげむと欲せば斧を先づ時習寮に入れざるべからず。

狂夫尙ほ時習寮に物申さむ。大茶話會問題也、

寮委員諸子は揚言したりき、時習寮は食堂の完成を以て大茶話會を開くべしと、余等當時私に怪んで大茶話會必しも食堂を要せず、無聲堂あり至誠堂あり、異な言を聞くもの哉と、然れども餘所のことをソウモく小言云ふべきにあらざれば暫し黙したり。今や食堂出來して開堂式まで行ひしに係らず大茶話會は一回も開かれざりき、かくして本學年は終了せり。寮委員言責を果さるるも亦甚しい哉、

由來時習寮對寮外生の關係は親密であるべき筈

なり、然れども動もすれば疎遠とならむとするは過去數年間に於ける傾向也、只大茶話會なる者ありて之れが連鎖となりて、辛うじて離れ易き兩者を結びたりしなり、然るに現今の時習寮は大茶話會を三回は愚か一回も開くことなかりき、余等其何の故たるを解するに苦しむ。大茶話會は跳つたりハネたりが、目的にあらざる新舊寮生の親睦が第一目的也、況んや現今の如く三年生が時習寮より疎外せられたる時に於て極めて必要とす、寮委員諸君は跳つたりハネたりを大茶話會の目的と心得、その跳つたりハネたりが嫌なりしたため大茶話會を開かざりしか、誤れるも甚しい哉、來年よりは是非開いて貰いたき者なり。

大茶話會のみにあらず、現今の時習寮當局者は數年來養はれ來りし善美なる寮風を片つ端より破壊せむとする者の如し、一層善美なる風習を

造らむ爲めならば吾人は黙せむも、同様なる風俗若しくは一層劣れる習慣を作らむ爲めならば吾人は之に賛する能はず、例へば鐵脚隊は何れへか消滅し、消火練習、の如きも形を隠し、無聲と稱する雑誌は何の必要もなきに、超然と衣を着更へたり、東京に居る人々は無聲と云ふ名を聞いてこそ母校床しき心地こそすれ、超然と云ふ名を聞いては肺病患者の高山林次郎位を想起するに過ぎず、時習寮の日記は火事の折焼けざりし筈也、寮委員は時々右き日記を参照するを要す。

狂夫銳鋒を轉じて北辰會則の不備を非難せむ、第一現今の代議員の撰出法及び撰出期は不可也、現今代議員の多數は學力優等なる特待生諸君にして時務にうときオタンチンならずば無暗と自負心の強さわからずやのみ也、代議員は北辰會の時務に最もよく通せる者たらざるべから

ず。かくの如き現象は其の撰出期が學年の初期なるか爲めにして一年生にて選ばれしものが二年生に到れば惰性的に選出せらる、かくして代議員會議はオタンチン俱樂部の觀を呈す、北辰會各部の割合に發展せざるは此のオタンチン俱樂部が中樞となれるに依る、

第二、會計制度の不備也、余は固より會計簿が事務室に整然たるを知る、然れども苟も六百生徒の金であつて見たら六百生徒が代表者を出して之を整理するか若しくは六百生徒より之を委任すべき者と信ず、元來北辰會の事業は一から十まで會員自身の自治に任すべき性質のものなり、會創業の時代こそは他人に面倒を見て貰ふも可なりと雖も十幾年も経過したる今日尙ほ學校より監督して貰ふは少しく耻しき次第なり、然れどもかくの如き大改革は一朝一夕のことにあらざれば少くとも生徒より會計検査員のもの

のを撰出して會計調査上絕對の權力を與へられたき者也、面白い例は昨年から一昨年の豫算で劍擊部の太刀費拾五圓を請求しなから一文も用ゐずして他の方に費せしことありき、

余は北辰會則の不備に關して詳細なる意見を有するも余も學生たる以上試験と稱する病氣に罹つて少し瘦せずは甚だ面目なし、只二三のヒントを與へて後來改革を企つる人の出づるを待つ、

狂夫過去に遡つて先日行はれたる一泊行軍宿泊地に於ける英法三年獨法三年及び其他一般の喧騒度を失せしを非難せむ。我々校禁酒令あり、諸子が一滴も酒を口にせざりしを無理にも信せむと欲す、然れどもあの喧騒に至つては遂に恕すべからざる者ありしと信ず、若い青年の團躰なれば適度なる喧騒は毫も怪むに足らず、又此れなきは決して喜ぶべからずと雖も、度を失する

は亦決して賞すべきにあらず、甚しきクラスは、(余は英三、獨三の一部に於て目撃せり)の如きはオイトコとかカッポレとか學生たるの範圍を脱したる歌を合唱せられたるには驚き入らざるを得ざりき、兎角超自然を氣取りたる世の中なれば諸君は最早雲の上なる大學へ行かるゝ人々なれば超學生を氣取られたる結果なるやも知れず。

忽ち大隊命令出でたり、之を口語的に解すれば「あまりやかましいから静にしなさい」と喧騒依然として止まず。余は益々超自然的學生の意思の強さに三嘆せり。何故にかくの如く喧騒を極めしか、曰く幹部の威力徳望の欠乏是也、幹部とは何ぞや、体操教員及び生徒の一部也、生徒は未だ生徒を徳を以て服せしむべきにあらず、然らば喧騒の原因は体操教員の威望徳望の欠如に歸すべきが如し、

固より喧騒を極めし生徒も其責を辭すべからず、あつ六ヶしいは人格なる哉、尊ぶべきは人格なる哉。

三

兼好法師と覺ゆ、「狂人の眞似なりとて大道を走らばこれ即ち狂人なり」と。道は氣のさいた坊主也。狂人の眞似ならずとて大道を走るものあらば是固より狂なるべく、口を拘し、耳を蔽ひ、眼を塞ぎて大道を盲進する者あらば是れ狂の狂たる者なるべし。さればあらゆる大道を走る人は凡て狂にして、其中、狂人の眞似とて大道を走るもの、俗眼には狂の如くに見えずと雖も、其の實眞の狂人と毫も異なることなし、余が氣のさいた坊主と云ふは其意實にこゝに存すれば也。大道を走る人凡て狂也、吾人の肉躰についてこれを檢せよ、いかに口の尖りたる人と雖も口を以て走るべからず、いかに手の長さ人も手を

以て走るべからず、いかに頭絶大なるも鼻高尙なるも頭鼻を地について走る人を見ず、走るを得る者は足のみ、足と雖も走れば直ちに疲る、足の目的は走るためにあらず立つ爲めなり、歩む爲めなり、加ふるに足は細長くして脚氣になり易し、兼好坊主が走るをいましめたる固より其所也、

試に大道について之を檢せよ、余は大都會に於ける石を以て疊める道を大道と稱せずして、石の上と稱す、余が大道とは札幌市街の如き草茫々たる者か、田舎道の比較的大なる瓦石礫々たるものならざるべからず、何となれば然らざれば、余の論成立せざれば也。否なかくる苦しき辨明をなさずとも兼好法師時代の大道は必ずや凹凸極まりなかりしならむ、然らずは兼好は氣のきかぬ坊主也。大道既に犬牙の如く、大盤石到る所に横はるとせば、大道を走るは劍の下をく

るより險也、坊主が以て狂となす固より無理からぬ次第也。

既に肉躰に足あり、外界に大道あり、焉んぞ吾人の精神に足存し、吾人の内界に大道なからむや。狂夫一轉吾が精靈界の足と大道とを説かむ。

足は地につかざるべからず、されば精神の足は精神の下部に存す、所謂空想の翼に乗じて大空をかける者は鳥の如し、足を有するも極めて退歩したる者也、固より走るべからず、現代を超越して見神の域に達せる者は空行く雲の如し、

足なくして且つ動き且つ走る。然れども吾人が松葉を食つて生活せざる限りは尙ほ足の必要甚だ切なり、何となれば足なくば動く能はず、動かすば働く能はず食ふ能はず、食はずば飢飢にざるべからず、飢ふれば死せざるべからざれば也。

固より精神の足長さあり、短きあり、一本なるあり、百本なるあり、人によりて同一ならず。

精神界の大道は何れにありや、心の見る所直ちに之れ道也、細きもあり廣きもあり曲れるもあり真直なるもあり、印度哲學者が見し道は坂路にして、佛陀が教へし道は氷を以て蔽はれたる冷たき道也、キリストの道は生温き道にして時睡りに陥り易く、天理教黨の道は騒々しくして歩むに堪へず。道には種々ありと雖もなかなかに平坦なる道は見出し難し。

兼好坊主の言味へば味はう程味ある哉。心の足は多くは細くして弱く、心の道は多くは狭くして危し、道は歩むこそよけれ、走るは狂なり、他人走りたりとも我れも走らば他人つまづきたりどて吾もつまづかざるべからず、是れ兼好坊主狂と嘲りて世人を戒めし所以にあらずや。今や余をして臆面なく論せしめよ、修養なき人は走るべからず。大道底の如からずは活動すべからず。誤れる哉、輕薄兒の似而非活動や。吾

人は先づ自己を顧みざるべからず、自己の聲を聞かざるべからず、自己汚れたらば、自己の聲真に自己より發するにあらざれば先づ自己を鞭たざるべからず。内省は修養の第一歩なり、然る後徐ろに自己の足を大、且つ強とせざるべからず。吾が精神の足を太さ百丈、高さ千丈たらしめざるべからず、一步にして大海を跨ぎ百歩にして宇宙を踏破する位の絶大無限の足たらしめざるべからず、然る後に走る資格を有す。又吾人が未だ大道を作らざる間は、未だ大道の上に横はれる大盤石を投げ棄て、荆棘を薙ぎ拂はざる間は斷じて一步たりとも踏み出すべからず、道幅を三千丈たらしめよ、道上を鏡の如く清からしめよ、而して大道に與ふるに一の光明を以てせよ、太陽、佛陀、神、偉人等あらゆる光明ある物を集め得て此を眼前遠近に散在せしむるも可也、或は自己の手によりて自己の頭に

よりて百万千燭光の大光明團を造りて之を吾が胸中にしかどつめ込むも可ならむ、然る後絶大なる足を以て絶大なる道を踏めよ、走れよ、狂と呼ばれよ、痴と呼ばれよ、宇宙六合せまくば更に宇宙外の宇宙を作れ、大聲をあげて咆吼せよ、地踏踏を鳴して地獄の鬼ばらまでをも屏息せしめよ、然らば汝を以て狂と呼ぶ兼好法師は地の底、遙か下に小さき蟻のひげの如き手を拍つて三嘆「狂なる哉、狂なる哉、吾れ其狂を好む」と稱せむか。

四

余は過去の二十年を、特に最近の三年間を徒らに細き足を以て、道なき道を辿りしを耻づる者也、痛惜悔悟は余を驅りて往々失望の淵に陥れしめむとす、然れども心底尚ほ一種の響なきにあらず、大勇猛心是也。余は近來大勇猛心てふ文字を甚だ好むに到れ

り、否な文字を好むに、あらずして、其の意を好む也。吾人が菓子を好むは菓子に飢えたれば也、スポンヂの水を吸ふは水なければ也、余が大勇猛心を好むが余に勇猛の心なければ也、望絶の淵に沈まむとするか如きは蓋し此の意思の欠如に起因するが如し。

でない立つ處が高いからである、余は自己の本分を忘れ徒らに他の爲に奔走した人よりも、能く自分の本色を發揮した人が偉いのである、と思ふ。何だか耻しくなる。

又個人主義と利己主義とを區別した所を諸君に示すと、

西田先生の倫理書に曰「個人的善の最必要なる徳は強盛なる意思である、イブセンのプラントの如き者が個人的道德の理想である、之に反し意思の薄弱と虚榮心とは最も嫌ふべき悪である、個人に對して最大なる罪を犯した者は失望の極自殺する者である」余は之をモットーとしたき積也、又曰

個人主義と利己主義とは厳しく區別してもらはねばならぬ、利己主義とは自己の快樂を目的としたつまり我儘といふことである、個人主義は之と正反對である、各人が自己の物質欲を恣にするといふことは反つて個人性を没することになる、豕が幾匹居ても其間に個人性はない、人は往々個人主義と共同主義と反對する様にいふか余は此の兩者は一致するものだと考へる、一社會の中に居る個人が各充分に活動して其天分を發揮してこそ始めて社

眞に偉人といふ者は其事業の偉大なる爲めに偉大なる者でなく、強大なる個人性を發揮した爲めである。高い所に登つて呼べば其聲は遠い處に達するであらうが、その聲が大い

分に活動して其天分を發揮してこそ始めて社

會が進歩するのである、個人を無視した社會は決して健全なる社會といはれぬ。

明日の倫理の試験に「理想的生活」てふ題が西田先生から豫め與へられたるを以て、余が考へたる所を記すれば

「石と石とを相撃てば石らしい音かである、猫の額をたゞけば猫らしい聲を出す、石の音と猫の聲とは固より異つてゐる、又西瓜を切れば中か赤い、南瓜を切れば黄色だ、赤と黄とは固より異つてゐる、又猫の聲と西瓜の色と、石の音と南瓜の色とを比較すれば其の差別が更に更に異つて居る、併し之を太陽の光の前へ持來らば、どうであらう、凡て薄暗い、一樣なる陰影を生ずる、又此を取つて火に投ずればどうであらう、凡て燃燒の爲め烟と灰とに化する。

以上は單に極めて具躰的な一比喻に過ぎぬが、かゝる例から歸納してきたならば森羅万象

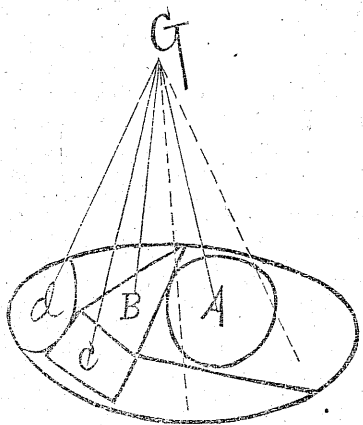
に説き及ぼすことができると思ふ、木より虫、

虫より人と次第に物質界より意識界へまで、も論及することかできる、して見ると万物が千變万化の形態を具へて居ても、其現象の裏には何か一様なる者、換言すれば統一的力の存在と假定せねばならぬ、但し此の假定は説明の限りでない、各自の直覺に任ずるより他に仕方がないと思ふ。例へば僕が拍手する、拍手は音響ばかりでない、その音響の背後に眞實在がある、統一力があると云ふても必しも人が信せないかも知れぬ、併し信すると信せないとは余の關する所でない、余さへ信すればよい。

此の統一力を宗教家は神と呼んでゐる、哲學者は實在と稱し居る、併し名稱は何でもよろしい。兎も角も物質の裏の裏、現象の底の底に潜んでゐる essential unity と云ふものを自覺しなければならぬと思ふ。古人が天地の心を以て心とす

ると云つたのは實にこゝにあると思ふ。

此の統一力を自覺した曉は生活の意義即ち理想的生活とは何ぞやの問題は直ちに氷解すると思ふ。即ち此の統一力に統一せらるゝことである。此の統一力と全々一致することがある。これが恐らく人生の格致であらう。次の圖で説明すると生活の目的は A B C 等の現象界の裏即ち精神



圖を現象界の裏面と假定し此の裏面に於て物質界が存して居るとする。a b c d 等は各異つたる現象 g は統一力

作用を通して G なる統一力に達することである。自己の大きさは統一力より小さいかも知れ

ない。小さければ大きくすべきである、又其大人物は統一力と一致して居るかも知れない、かくの如き人は理想の生活に達し得た人である。

一躰自己と宇宙と云ふ者は此の統一力の両面であつて異なる様で決して異ならぬ、両面は愚か同一物であらう、併し一物は一物自身を見ることのできない、例へば僕が僕の身躰を見て僕なりとなすは甚だ誤りである、見るものは僕であるが見らるゝものは「僕の身躰」と名づくる者で

兩者の間には明かなる區別が存する、僕の意識は僕の意識自身を決して見ることができぬ。否、な見ることができないと思ふのも既に大なる誤りである、見ることは出來よう、併し見て兩者の間に區別をつけるのが誤である、物を見て自己以外の外物なりとなすのは習慣性から出た偏見であると思ふ、人間が生れるや直ちに感覺に觸れたる者を自己の範圍とせば決してかゝる間

違がなかつたらう。愚な豚が、世界は自己の爲めに造られたと思つて居ると嘲つた人があるが此の豚が大哲人かも知れぬ、それで何れまでが自己であるかを區別せぬ所即ち凡てが自己の意識であると思ふ所に眞の自己換言すれば統一力が存して居ると考へる、つまるところ前圖に於けるG A B Cを悉く自己として自己が眞個の自覺を迪つてGに達すると云ふこととなる。従つて自己が大きければ世界も大きく、自己が進めば世界もすすむ、自己と世界とは同一物の影と形の様に必ず相伴ふものである、青い眼鏡をかける物が青くなる、と同じことで萬象は自己の大きさによりて其大きさを變ずる。

の中へ収めたとすれば自己擴張は毫も現象の縮少ではなくして却つて現象の擴大となると思ふ。人間は動すると情慾の奴隷となり易い、何故に奴隷となり易いかは余は知らぬ。只山が段々と碎け、水が低きにつく如く、人間も一種の平均的に支配せらるゝ様である、但し余は平均は退歩的のもののみでなく進歩的平均もあると思ふ、梢が段々のびて親木と高さを争ふが如きである、それで吾人は此の向上的平均力に従ひたいと思ふ、これに従ふて自己の擴大をやりたいと思ふ。只常に落下せむとするを防ぐ爲めには大勇猛心と稱する意思の力を必要とするのである。(河合生)

永井恩師を送る

先生今や校を去られむとす、余等も亦校を去らむとす、然れども其去るや自ら異れり、先生の去るは四高を見ずて見果て、去る也、余等の去るは去るべくして去る也、先生の去るは去らざるべからざるの潮流に會して去る也、其去られむとするや前程之れと云ふ隠れ場なきが如し、余等の去るは然らずして、嘻々然として大學の門に登るなり前途の光明を認むるなきにあらず。

るへからざる也。去るの一字自ら兩義あり、去らむとする余等が去らむとする永井恩師を送らむとする意實に茲に存す。

尙ほ余をして云はしめよ。先生の去られむとするは先生の意思より出づ、主義より現はる、故に猛烈也、唐突なり、自發的也。余等の去るは切符を切られてフラットフォームへ出づるが如し、機械的也、受働的也、豫定的也。其去るや兩者異れり、先生は眞に決然として去る者にして、余等は後より押さるゝまゝ去らしめられざるべし。

今や四高を後にして東都へ向はれむとする先生を見るに及んで、嗟然として失望の色を現はさる者果して幾人ぞ。由來四高の獨語界は冷淡を以て名あり、今や熱烈吾人を教ふるに滿腔の至誠を惜しむ給はざりし先生去り給はば、只さへ冷たき獨語界は更に一層の寂寞を極むべきや論を待たざるべし。

あゝ先生、人格を以て教育の第一義となす時代は千年の前ならずば千年の後なるべし、現今の時代思潮は滔々として物質的非文明の汁を吸はむとす、物質の汁赤きか、精神の色黒きか、余

之を知らず、只赤き汁を嚙らば其人赤かるべく、黒き汁を嚙らば其人黒かるべし、赤き先生に養

格の色は、何地に於ても鮮明なるもの存すべきを、聊か以て恩師を送り奉る（河合生）

塾の勃興

はれたる生徒は其色赤かるべく、黒き先生に養はれたる生徒は其色黒かるべし、人を教ふるの人の色は直ちに人に教を受くる者の色なり。人格は教育の第一義なりとは余等常に先生に聞く所、今や先生四高を後にして去らるゝは蓋し其眞意先生が人格を以て根本とする所を求めらるるや推するに難からず。人格乎、人格乎、先生今や去られむとするは先生が胸中に蓄へらるゝ猛烈なる自覺より湧出したる人格の光明なるを思へば余等徒らに、慇懃袖を牽くの愚をなすを要せざる也。

近來喜ぶべき現象は塾の勃興なりとす、十有六名を有せる信濃俱樂部、富山縣温知會を根據とせる中越義塾、新潟中學を中心とせる壽山塾、埼玉縣の誘掖會、奈良塾等之れ也（三一舎、育英塾は之を除く）此の外將に起らむとする者は茨木縣塾、福島縣塾等是也、近來坊主連の塾も出來たるが如し、塾の最も古きは三々塾及び若越塾也、三々塾は三十三年の創立にして人員當時九名なりしを以てかく命名したり。若越義塾は三十五年の創建とか云ふ。

先生今や去られむとす、小弟等先生の御加餐御攝養を願ふや轉切也、只先生安せられよ、人格を以て教育の第一義となすの所は千載の未來に屬すと雖も先生によりて染められたる余等が人

塾勃興の原因は、寄宿舎の欠乏、下宿屋の不親切、及び生徒の自覺（獨立心）に起因する者の積むを得。

如し。塾生活は下宿に比して遙かに愉快なる者也、余はこれを經驗に徴して斷言するを得、而して學生の醇朴なる氣風、輕薄を惡むの情性は塾生活によりて得る所特に多し、余は強健にして善美なる校風發達上塾の成立の益々多からむことを切望して止まず、校風と云へば直ちに僻

余の見る處を以てすれば塾は一個の根據地を有せざるべからず、主義を根據とするも可也、趣味を根據とするも可也、或は偉大なる人格を中心とするも可也、或は一の信仰を中心とするも可也、或は故郷を中心とするも也、何れにしても中心を求めて之れが遊星として周圍を廻轉せざるべからず、然らずば塾は破滅を免る能はざるべし。

目に見る人種あり、然れども余が茲に校風と稱するは生徒各自が相一致して樂しく學校生活を送ることを意味す。然れども塾は他の一面に於て、甚だ面倒なる者也、面倒とは塾經營が甚だ六ヶしく財政上感情上種々の障害が起るを云ふ。何れ人間同志の生活なれば思ふ様に行かぬはさることながら、人間はそれで勝手に満足できる者にあらず、左に云へば右と云ひ黒と云へば白と云ひたがるは何れの所も亦異なるなきが如し。然れども塾經營は困難なればなる程、愉快も多く、又經驗をも

次に塾は偏狹なるべからず、同主義の人、同郷の人等集まらば、一小天地に踞踏して他を顧みざるの勢を生ず、止むを得ざることながら、賞すべきにあらず。次に塾は質朴を尊ぶべし。富める人は貧しき人の眞似をするも大したる損害なしと雖も貧しき人富める人の眞似をなさむとすれば、盜せずば借財をなさざるべからず、共同生活の程度は貧しき

を以て規すべし。然らずば塾は存在を繼續する能はざるべし。

次に望ま欲しきは各塾の連合也。余は余の在學中一度各塾の會合を催したく思ひたれど遂に果さざりき。各塾の交通は財政上、經營上甚だ面白き結果を持來すべきを信じて疑はず。(河合生)

金曜會に望む

英法二年生有志者奮起して、金曜會を設けたり。其目的は辯舌練習にありと、甚だ喜ぶべし。北辰會の演説部は到底望みなし、何となれば北辰會壇上の演説は聞いて痛快なる者一としてあることなし、面白からざるを以て出席する人少し、辯者を除きては殆んど出席者なきは是れが故也。金曜會起りて毎金曜に辯舌練習會を催すが如きは甚だ北辰校辯論部の爲めに賀すべきにあ

病友小笠原秋水兄に與ふ

秋水兄、兄が雜誌部に入り來りてより茲に一閱機、兄が眞摯の筆、燦美の文を以て、吾壇上を賑はし、文苑保護の爲めに萬丈の氣焔を吐きしは、記憶未だ新なる所に候、而も今や兄は病を懐いて故山に歸臥す、生は雜誌部の爲め痛惜たく能はざる所に候。

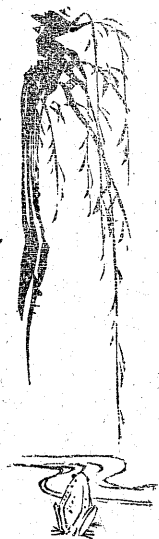
秋水兄、兄と余と知る正に一年、友情未だ濃かなりと稱し能はざるも、感琴相觸れたるもの未たなしと云ふを得ず候、余が軟文壇に向つて鐵槌を下さむとするや、兄は楚氏が盾を以て之れを防がむとしたりき。余が校風の翼に乗して夜叉の如くに現はれ出つるや、兄は靜に竹林に養ひ得たる哲理を説きて余を戒めたりき、人表面を見て兄と余とを以て仇敵と見むやも知るべからず候。あゝ淺はかなる世人は影を見て形を見ざる愚物に候はずや。クローバ線なる運動場、清風徐に來る余が書齋に於て兄と余との間には美しい情味の流れたるを余は今更想起する者に御座候、

茫然たる間に兄が風手は朝靄の中に葬られ申し候、

秋水兄、療養希くは旃れつとめよ、余等は未だ若し、春秋に富めると云ふべし、徐ろに病を醫せよ、而して兄が他日中央文壇に絢麗なる筆を振はむ日、余は森闌きほとり岩奇なる所靜に人生を觀じて山上一片の白雲に思をやるべく候、

(河合生)

秋水兄、昨兄飄然として去る、早明轉々冷肅を覺わたるとき、余は兄を送つて城北にありき、余が帽縁の眼深かなりしこそ幸ひ、余は幽にそれと覺わたる或物を巧に隠すを得申し候、暫し



兩者同心
天地欲吞我而不能
我欲吞天地而不能
天地大也我亦大也
兩者欲相吞固誤矣
天地之心卽我心也

南下錄

附 録

南 下 録

河 合 良 成

南下録は今後再び南下を企てる人の爲めに残す者であつて、現今學校に御出でになる諸君には讀んで貰ふても、貰はないでもよい。僕等が今春南下を實行するに就いて最も困つたのは第一回南下の記録が殆んど會誌に残つて居なかつた事であつた。恰も雲をつかむ様、随分とごたついた事もあつたし、又てこすつたこともあつた。だから僕等は例へ戦に敗けたにしろ、其の顛末を奇麗に打ち明けて今後再び南下問題を持ち上つた時の便宜に供しようと思ふ。精しいことは面倒だし、派手に書くのは嫌いだから粗々と書き流して行く、解らぬ所は御勝手に解釋なさい。

◎ 南下の由來

第一回南下の擧は今を去る六七年前、高見之通、榎戸利吉等の先輩が盛に彌次つて居た時に行はれた者で、三高と花々しく戦ふて運動部の活力を喚起するのが目的らしかつた。人員も五十名内外で、當時の記録は残つて居ないが、口吾に傳はる所では野球は同点、柔道は敗北、劍道は一騎打の混合試合で勝負が明瞭でなかつたどの事。兎も角も今度の南下に比しては仕掛が余程小さかつたらしい。其後私に潛勢力を養ふこと五年、一昨年の冬頃よりソロ／＼と南下問題が顔を出した。當時は柔道部は大男の勢揃で小泉、中村、久田、の初段を初めとして勇將猛卒綺羅星の如く並んで居たから迎も溜らない、該部が中堅となつて劍道部と袖を聯ね、三十九年の春三月頃どう／＼三高へ唐突に桃戦狀を飛ばした。赤松、白上、柳沼の諸氏が専ら事に當つて居たらしい。然るに三高では何う思つたか、端艇競争の撰手に柔劍道の撰手が多いからと云つて斷つて來た。可惜ら咲きにかゝつた蕾が咲かずには落ちた様なもので大分失望した連中もあ

つた様だが、何しろ大學と云ふ楽しさうな處が近くに見えることだから、あまり小言も云はずに櫻ん坊が赤黒くなる時分、ホコ／＼顔で學校を去つて行つた。

九月になる、新入學生が来る、と各部は幾多新進の猛將を迎へたことだから消むとした南下問題は再び油を注がれた。撰手の批評がフツフツ話頭に上る、三高の状況が云々される。併し各運動部の委員は沈黙を守つて皮切りをやらぬ、仕方がないから代議員側からと云ふ名義で僕が運動部に南下實行を促した、其結果運動部委員、代議員等の會合となり、部長の意見を聞くやら校長の内意を伺ふやら、かれこれの中に一ヶ月余も費して、挑戦狀を發したのが十一月の中頃、陸上運動會も終つて、滿校の健兒が轉々肥肉を嘆じて居た時であつた。

●南下隊の目的

第一回南下隊の目的如何は記事がない爲め薩張り分らないが僕等がやつた第二回南下隊の目

的は甚だ鮮明な者であつた。第一に強健なる學風を養成するに存した。由來北國の天地は文化の露に沾ふこと少く、教育の制未だ發達せず、従つて吾北辰校の如き一高等學校が學界の雄を

唱へて居る有様、従つて北辰會運動部は北國に於て敵を見出すことが出きぬ、毎年の野、庭球、柔劍道の大會には各校の連合軍に當るのが常だが、それでも御話しにならない。「敵國外患なければ國即ち亡ぶ」で相手のない運動部が發達した例は世界何れの地にもない。運動が沈滞することはつまり生徒が戸外だとか道場などへ出ぬこととなる。家の中に居れば勉強家になるが左なくば例の小人閑居の閑居だ。所で人間の相場は大赫廉い者で十中八九までは勉強せずに閑居する、勉強する連中も過半は肺病になる。結局は學生氣風の不振と云ふことに歸する。従つて少しは遠いが京都まで出懸けて相手方を作る必要がある、京都で甘く行つたら行く／＼は東都へでも仙臺へでも出懸けるべしだ。そして常に生徒の氣風に清涼劑を與へて活潑々地たらしむべ

しだ、是れが南下隊の主願である。

第二の目的は生徒の一致親睦の爲めである。

吾北辰校には一泊そこのつまらぬ發火演習を除いては修學旅行と云ふ者はない。二高にもある五高にも六高にもあるがなせ僕の學校にのみないかは僕は知らぬ。知つて居ても云ふまい、たゞ想像だけして置かう、之れは北國は寒い國だから大切な小兒を外へ出すと風を引くかも知れない、或は生徒が凡て貧乏で修學旅行費を出すことができぬかも知れない、或は學生課の御方々が皆片目をつぶして居て物の弊害と云ふ面白い半面をのみ見て御出になるかも知れない。或は修學旅行には發火演習の様に躰操科の点を取る譯にも行かないかからも知れない、点を取らぬとすると修學旅行に行く人がなくなる。と云ふ考かも知れない、それなら「今度修學旅行に參加せざる者は體操科五点を減すべし」と一寸少さく揭示すれば滿校の生徒一人も残らず蟻の砂糖に付くが如くに集まつて来るものを、智少さも亦甚しい哉とも思はれる。或は……

……と想像すればいくらも想像できるが兎も

角も修學旅行がない事は事實である。南下隊は休暇を利用して其の欠点を補ふた者である、たゞ誇とすべきは體操科減点の威嚇なくして而も二百名を集め得たことだ。野球に敗ける、應援隊の幾團が青々と若草が萌いて居る大學運動場のあちらこちら、男泣きに泣いて残念がつて居る撰手を圍んで慰めて居る、否な慰める人それ自身の眼も露を宿して居る、劍道に負けた、その夜篝火を焚いて撰手を勞る、火影が星に映ずる、各人の顔が半面しか照されて居らぬ、他の暗き半面にはいかなる憂を隠してゐるだらうか。誰れかが風蕭々を歌ふ。聲は遙かに叡山の方から山響を呼ぶ、撰手の一人が今や柵上に登つた様だ、何を云ふだらう。今日の失敗を謝するの如知ら。なに萬歳？お、萬歳だ、四高萬歳、劍道部撰手萬歳。あゝかゝる光景に接したら僕等はさうして仲善くならず居られやう。僕はさう考へた、かゝる一致和親の光景、否な寧ろ一種の感激により團結せられてゐる様を校長

閣下の前に見せたい、そして其の喜ばるゝ顔付を拜見したいと。

第三の目的は三高との親睦にありだ。由來高等學校とは東西大學と云ふ両親の膝下にだ、こねて兄弟分ではないか、兄弟同士それが大學へ行くことやれ四高のインキ臭い奴が来たのやれ三高の贅六どんが来たのと、互に睨み合ひの姿だそうだが、何處の馬鹿か兄弟は他人の初まりなどと云ふたかは知らぬが、こゝはまた他人どころか仇敵の様な態度を持してゐるとは、馬鹿も骨頂と云ふべしだ。南下隊は暫時醫士と姿を變じて、この大馬鹿を治療せむと力めたのである。滿校の三分の一を率ゐて京都へ押しかける、毎日顔を合せる、話もする、地方の面白い事も談ずる、教員の噂もせぬではないらしい。加ふるに百名程が三高の寄宿の御厄介になる同じい釜の飯に舌鼓を鳴す、或は鳴さぬ人もあつたらうが兎も角も愉快に食ふ、これで二校の間に温い美しい交情の成立しない筈はない、特に野球撰手の交際の如きは余程親密に行つたらし

い。つまり競技と稱する花々しい幕の裡で三高と四高とが互に手を握つたのである、今後社會へ出ては尙ほ僕等兄弟は活舞臺の上を悠悠濶歩することが出来よう。

従つて競技夫れ自身が決して南下隊の目的でない、勝ちを欲したのが目的でないことは野球部の仕合を無理に試みたことでも解らう、それは後に述ぶるが兎も角も競技と云ふ衣服を着たは着たが、ほんの衣服に過ぎぬ、試みに衣服を脱ぎすて、其の精神の存する處を見せると前記の目的に歸着するのである。但し僕等かトテ人間たる以上は襤褸を着るよりは適當に美しい衣服を着たい、この意味に於て誰しも負けるより勝つのを希望して居たのは人情の免れ難い處だらう。

●交渉顛末

挑戦狀を發したのが十一月中旬、返答の來たのが十二月八日、其後實に十數回の信書往復を重ねたが甘く纏らぬ、一回手紙を出すには一回

毎に運動部の委員の會合を催すものだから手数で手數でたまらぬ。申込んだのが野庭球柔剣道と端艇の五部で、問題の難点は野球端艇の二部に存した。三高の方では四月の休暇に野球團が東上するから御手合せができぬ、それに端艇は春期休暇中に二艘だけでやるのはあまり間拔けて、競漕の爲めに競漕をする観があるから四月十五日前後の大學の競漕まで待つて呉れとの事、僕等の方では野球は敗けることは極り切つて居る、何となれば三高は野球を以て殆んど校技とし昨年東上して失敗した以來、大晦日までさへ練習をしてゐるに反し僕等の方では演習が足らぬ、足らぬのではない出来ぬのだ、雨と雪と霰とに毎日／＼困しめられて連も三高勢には御相手作り難い事は万々承知だから、三高が辭つて來たのに乗じて喜んで止めるのが常識を有した人の仕事かも知れない。併し僕等は左程卑怯ではない、勝負が目的でない以上は勝負を恐れて退くが如きことは男子の快しとする所でない、負ける位は何でもないから向ふで辭れば尙更是

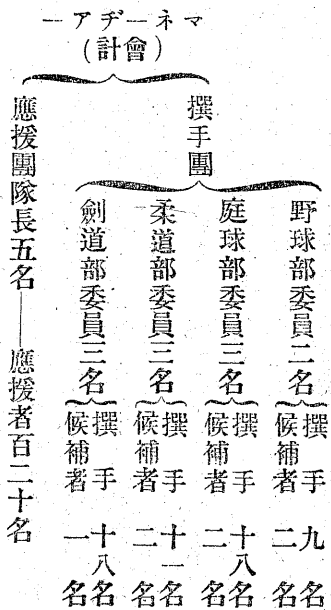
非揉んで貰ふべしと輿論が叫んだ。また端艇は聊か面倒だ、何となれば四月中旬は授業最中で端艇部のみを後に残すのは却つて競漕の爲めに競漕をする様で面白くも糞もないから少しは費用が懸つても構はぬから是非に休暇中にやるべしだとの事で、双方の意思が纏まらぬ。そこで運動部委員決議の結果僕が委任を受けて三高へ交渉に行くことになつた。

僕の上洛の目的は一方三高との交渉の外に、出來得る限り三高の運動部の動靜を見聞してきて呉れとのこと、矢張勝ちたいと見わる。二三日滞在後歸校して撰手諸君に集まつて貰つて交渉報告をした。その結果三高野球團の出發を三日延期して貰ふこと、端艇の競漕は後日に譲ることにした。其他仕合宿舎に關する委細なる交渉をも定めて來た。

●南下隊の組織

南下隊の組織は先づ二人のマネージャーを運動部の委員だけで撰擧をして其結果正力松太郎

氏と僕とが撰定せられた、マネージャーの下に撰手團と應援團とを定めた、撰手團を四分して柔剣道、野庭球として、各委員をして事務監督等萬端の事をして貰ふこととし、應援團の方は高橋武濟、安藤榮吉、江原眞悟、塚本良禎、藤江林治の五氏を應援隊長に推定し、戦闘場裡旗を振つて士氣を鼓舞し且つは宿泊中、應援團に關する萬端の事務を執つて貰ふことにした。外に會計を二名置き、正力と僕とがそれであつた。つまる所次の様な組織であつた。



◎南下隊の會計

収入は生徒各自より參拾錢宛(約五百名)の寄附と、教員一同より凡そ四拾圓の御寄附、を根本として、それに京都大學四高出身者が南下隊を接待して呉れた剩餘、茶話會費として徴集せし金高、應援團流車賃の剩餘金等を合せて貳百參拾圓程と、大學三高への紀念品、茶話會費、旅費、其他の雜費に用ゐた、一鉢南下紀念繪端書で雜費の大部を作る豫定であつたが印刷があまり鮮明でなかつたのと、時期が遅れた爲め甘く行かず辛うじて元金を得た位に過ぎなかつたら、それで教員諸君から補助を願ふことゝなつたのである。

◎諸種の準備

第一に南下の歌を作つた次の様である、校歌が大分古くなつた時分であつたものだから非常な勢で歌はれた。永く覺わて居て欲しいものだ、

歌は應援隊長の一人で野球團のマネージャーを 卽刻作つて呉れたので、譜は吾校音樂界の泰斗兼て行つた高橋武濟君が南下隊の要求に應じて 梁瀨成一君の作つたものである、

南下の歌

高橋武濟作歌
梁瀨成一作譜

| | | |
|------------|-------------|---------------|
| 雷に血を盛る瓶ならば | 五尺の男兒要なきも | 高打つ心臓の陣太鼓 |
| 靈の響を傳へつゝ | 不滅の眞理戰鬥に | 進めと鳴るを如何にせん |
| 嵐狂へば雪降れば | いよ燃え立つ意氣の火に | 血は逆まきて溢れ來て |
| 陣鼓響きて北海の | 「健兒脾肉を嚼せしが」 | 遂に南下の時到る |
| 花は御室か嵐山 | 人三春の行樂に | 現もあらで迷ふ時 |
| 西洛陽の薄霞 | 霞にまがふ砂煙 | 蹴立てゝ進む南下軍 |
| 平和はいづれ儉安の | 秒時の夢に憧るゝ | 「痴人はじめてよく説かん」 |
| 大丈夫夫は今日の春 | 花よりもなほ華かに | 輝く戦功建てんかな |

| | | | | | | | |
|-------------|-----------------------|------------------|------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|
| | <u>1.3</u> | <u>5.5</u> | <u>5.5</u> | 5 | <u>3.5</u> | <u>1.2</u> | <u>1.0</u> |
| 1. 2. 3. 4. | ダ あ ハ ヘ | チ ク オ ハ | モ ヘ ロ ブ | ル バ カ レ | カ ウ ア と | ナ ラ レ ヤ ン あ | バ バ マ の |
| | (<u>3.3</u>) | <u>3.2</u> | (<u>1.1</u>) | <u>6.6</u> | 5 | 3 | <u>2.3</u> |
| | セ ト ハ シ | キ ノ サ シ | ダ シ ウ メ | ツ ツ ノ に | ヨ イ コ あ | 一 キ 一 く | キ ヒ ク ラ か |
| | (<u>1.3</u>) | <u>5.1</u> | <u>3.3</u> | (<u>1.1</u>) | <u>7.7</u> | <u>6.7</u> | <u>1.0</u> |
| | カ バ ツ ウ | ツ カ モ ン | ネ キ ラ ジ | ノ テ デ メ | ジ ア マ ヨ ク | イ キ ト カ ウ | コ テ キ ン |
| | (<u>2.2</u>) | <u>5.5</u> | <u>6.5</u> | <u>3.1</u> | 3 | 5 | <u>2.3</u> |
| | タ ジ ニ マ | マ ノ ク ラ | ヒ ビ ヨ タ | チ テ 一 ハ キ キ ノ を | ツ ホ ウ ケ | タ ク ス フ | ツ イ ス バ ヘ カ ガ の |
| | (<u>1.3</u>) | <u>5.1</u> | <u>3.3</u> | (<u>1.1</u>) | 3 | 2 | <u>2.1</u> |
| | メ ス ナ カ ハ | ツ ン ミ ヨ | シ ビ マ も | ク チ フ ほ | セ タ ス は | ン ナ ナ | ウ ン ム カ ト ゼ ケ ヤ |
| | <u>1.2</u> | <u>1.6</u> | 5 | <u>3.1</u> | <u>3.5</u> | <u>2.3</u> | <u>1.0</u> |
| | ス ツ ケ か | メ ヒ テ ヤ | ナ ン ス イ | チ カ ス を | カ キ ン テ イ サ ナ テ | セ タ グ カ ニ イ カ ン | ン ル ン な |

第二は繪端書で四枚一組とし、拾銭と交換した、二千組つたが前にのべた理由で半分位しか賣れなかつた、併し實費は一部五錢だつたら損失だけは免るゝを得た、筆者は後藤清彦君、鈴木憲太郎君、寺崎良策君の三氏であつた、南下隊は以上三氏に深き感謝を申上げる、特に後藤氏は二豎の襲ふ處となつて今やあらず、僕等は一層深い感かする。

◎各部の練習

第三は應援聲(エール)で重に野球の試合に用ゐた、應援隊の考案になつたもので二種ある、ラ、シコー、ラ、シコー、シコー、シコー、フレール、(La, shikō la shikō, shikō, shikō, He) ヒップ、フレール、ヒップ、フレール、フレール、フレール、シコー、シコー、(Hip, He, Hip, He, He, shiko) 近い中に諸君が再び關西の原野で此のエールを高らかに叫ばれたことを僕は切祈して止まぬ、或人は僕等が南下の準備をあまり大げさにやつたのを見て、丸で支那兵の戦争の様だと評したが、こそ〜と行つて負ける時の要心のみを

する必要がないと思つたから、思ひ切つて大仕掛けにやつたのだ 柔道は十一月頃からソロ〜やり始めて冬の休業には歸らずに稽古をした連中も多かつた、一月の寒稽古の頃は實に猛犸を極めた、二月の紀元節の大會前には一中、二中、醫專の連合軍を見事破つて將士は腕をさすつて時期を只管待て居た。紀元節以後も規則正しくやつて試験最中までやりのけた。

剣道は毎日矢張り熱心にやつたが柔道程ではなかつた、之れに剣道部は數年沈滞して居たのだから急に機運を挽回し難かつた見える、併し、中には極めて熱心にやつた人もないではなかつた。 庭球は九月の新人が來た頃から組をつくつて毎日規則的にやつた、高岡が來て、正に牙城を突かむと試みたのが非常に藥になつたらしい、其中に雪が降つたから、仕方なしで靜勝館内の狹

い暗中で練習をやつた、冬期休暇などは毎日毎日二十人許暗い處へ寄つて研究した、特に前衛、モーション、サーブ等を氣をつけた。又時々は會合を催して欠点の指摘し合ひなどをしてチームが極めて親密になつた、雪が消えてから學期試験を棒に振つて猛烈なる練習をやつて殆んど面目を一新した。

野球最も同情を表すべきは野球の練習であつた。始めは野球が南下隊に加はらぬ都合であつたが、勇士の一念止み難く、どうしても行かぬばさかぬ、敗けても勝つても宜しい、行けさへすればよいとて野球の連中が我ん張る者だから他の都と一所に三高へ申込んだのである、練習にかゝつたのが十一月頃、當時三高の勢ひは素破らしいもので吾野球部は前に三高後に天候てふ大敵を受けて居るのだから各員は殆んど決死で練習した、グラウンドは草茫茫々、五寸許も長さがある、之を刈るやら石を拾ふやら、器具を買入れる、豫算の金が少いから(五十圓程なり)き之に比し三高は三百數十圓)融通して貰ふ、

青くなつて仕舞ふた。野球部の責任は最早栗田が双肩に擔つて居るではないか。海部は未だ覺りだし、病氣になつた連中は未だに治らないし、試験は適當に皆をいじめし、野球部の状態は外から見ると皆をいじめた程であつた。其内に栗田の指——全軍の運命を荷つて立つ右の人指ゆび——が大分癒つたから栗田はさかない、また始めると二日程で治つたのをしつかり舊に返して仕舞ふた。今度は治らない、治らないでも練習をしようと思ふてさかぬ、兎も角も云ふので凡そ三週間、栗田を繩でつなぐ様にして練習を止めさせた。が中心を失ふたチームは練習も心地よく行かぬ、其中に學期試験も終つて愈々南下の擧となつた、栗田は三高のグラウンドでボールを握るまで凡そ三週間、一回も練習しない、また出来もしない、諸君は御承知だらう、あの大學のグラウンドで野球の撰手が、相抱いて泣いて居た時に栗田の指から血滴が滲々として居たのを。三高との試合に海部も加はつたが蹴足を引き引きSSの大役を力めたのである。

其中に練習が大分すむと、あまり寒いのに無理をしたものだから海部が先づ足が動かぬ様になる丸で蹠だ、三名許も氣管支を犯される、チームの半數は最早駄目になつて仕舞ふ、栗田の心配は一通りや二通りの騒ぎでない、其内に雪が三尺もたまると、併し雪位だとばかりで大勞力を費して雪をよけて泥雪の零度以下三十度位の中へ足を浸してやる、すると翌日起きて見ると亦一尺五寸もたまると、本當にたまつた者でない、終には氷り付いた雪の上で練習をやる、球を逃すと心地よくスーと音がして百七八十間も飛び去る様な工合で随分とひどい目に出遇つた、恰度學期試験が始まる頃に雪が融けて野球のチームが時習察へ入れてもらふこととした。そして試験前後へかけて恐ろしい程の練習をやつた。練習も程度を過るとよくないことは萬萬承知だが、皆が熱して居るものだから聞かない、其中に栗田の指端が傷つき初めた。初めは大したこともないと思つて得たが二三日して指端からうみが出て腐敗し出した、皆が之れには

●出陣前に於ける 全校大會

三月二十八日試験が終つた夕方至誠堂で全校大會を開いて士氣を鼓舞した。校長の演説を始め志士猛將は盛んに演壇に飛び出して、氣焰を吐いた。恰度その時京都大學の四高出身者から次の祝電が到着した。

健兒南下の門出を祝す、兄等が意氣洛陽を壓せり。

會が終つて南下歌を歌つて解散したのが十時、全校中此の會に出席しなかつたものは何人あつたらうか。

其夜引きつゞいて撰手だけが至誠堂で圓陣を作つて、會合をやつた。土器に水を盛つて廻つた。廻り終つて床の上で土器粉な微塵叩き割つた。撰手各自の顔に決死の色が明らかに讀まれた。

●學校との關係

學校と學校との競技は文部省の禁する所である

から、僕等も態々南下隊なる團躰を組織したのである、従つて一切學校の手續をはづらはさぬと同時に特に休暇中を利用して授業日數を一日も欠かさなかつた。併し學校は私的に非常な盡力をして呉れたのは非常に有難い、今年はいかなる譯なりしかは知らぬが學校は三月三十日に終るべきを三月二十八日に終業となつた。又吉村先生が京都府其他へ御出張の節、大學の寄宿舎へ撰手を宿泊せしむるについて非常な御盡力下さつた。又三竹先生が態々南下隊に御付きになつて陰に陽に多大なる便宜と、利益とを與へて下さつた。此の役は三竹先生に限るとの一般の取沙汰であつた。又繪端書が目的通りに行かなかつた時に教員一同より喜んで御寄附になつた又或先生は柔道部が勝つた時に祝電をまで送つて下さつた、兎も角學校諸先生は今度の南下に關して非常な御同情を御示し下さつたのは南下隊の深く感謝する所である。

● 出 發

三月三十日午前八時であつた諸先生及び校友に送られて二百有余の南下隊は旗旒堂々として洛陽の天地に向つた。萬歳も唱へられたらう、南下隊も唱はれたらう。何しろ僕等は丸で油の揚物にでもせられた心地で何が何であつたか少しも覺て居ない、瀛車が出て、犀川の鐵橋の畔で第一中學の生徒が赤毛布の旗を作つて南下隊を送つてくれたのは特に感興を引いた。京都へ着いたのが午後六時、大學及び三高の諸君が澤山停車場へ出て御出でになつた、相率ゐて三高及び大學の寄宿へ向ふた。

● 野球試合

三十一日、一日は撰手は練習に、應援團各員は近郊の勝地を探つた、野球をやつたのは二日の午後、記事は久島精一君が書いて呉れた。次の様である。

「我野球團は南下軍の先鋒を承りぬ。嘗て數歳の昔、一度彼と雌雄を決せしも、彼我互格にして終りき、爾來數星霜北海の陰天地に

影を潜むと雖も、然も吾人如斯にして永遠に眠らんや、常に遙に南天を望んで機を俟つ事久しかりき。

「嵐狂へば雪降れば、いよゝ燃わ立つ意氣の火に、血は逆まきて溢れ來て、陣鼓響きて北海の、健兒脾肉を嘆せしが、遂に南下の時到来」遂に南下の時は來れり、爰に於てか吾人の骨豈に鳴らざらんや、肉豈に躍らざらんや、血豈に逆捲かざらんや、堂々火に燃ゆるの意氣は未だ至らざるに既に洛陽の天地を壓せり、風雨霜雪の間に養ひし我等が腕味、イデ彼等が目に物見せくれん、京洛の公達、北海の蠻風に吹き飛ばされせんば幸なり、然れども彼は昨春東上の失敗に感奮して練習頗る悍猛を極め、頃日再び東上せんとし先づ爰に門出の血祭を現せんとす、其の勢や猛に、其氣や鋭し、時維れ明治四十年四月二日。

判の下に熱球飛奔する一大決戦は始まりぬ、先づ兩軍の顔振れを打撃順に擧ぐれば、

| | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-----------|----------|--------|---------|
| 三高方 | | | | 四高方 | | | |
| R. F. | I. B. | P. | L. F. | C. F. | C. S. S. | II. B. | III. B. |
| 池田 | 山羽 | 菊地 | 都築 | 久野 (Cap.) | 山西 | 三笠 | 木下 |
| P. | R. F. | S. S. | I. B. | III. B. | L. F. | II. B. | C. F. |
| 栗田 | 水島 | 海部 | 久島 | 鈴木 (Cap.) | 町田 | 不破 | 藤崎 |
| | | | | | | | C. |
| | | | | | | | 渡邊 |

三高勝つか四高勝つか、關西と北陸の龍攘虎鬪の活劇は今此處三高グラウンドに開かれんとす、やがて二時二十五分、大學生平野正朝氏審

「レデー」應援團は立ちぬ手にせる應援旗を翻して「ラ四高ラ四高四高四高フレ」満場片唾を呑んで扣へたり、「プレー！」

渡邊先づB.に熱球を飛ばして難なく一の木戸を奪ひぬ、然らば吾もと續く藤崎、菊池が念入りのボールも只一撃の下にB.の頭上を越えて尙遙かなり、之に力を得し渡邊二氣呵成三壘に猛進せしも、哀れはかなく木下の露と消ぬぬ、不破、町田三振に斃れ、藤崎が拔驢の功名もあたらすタンデングに終りぬ、

三笠四球に出で、秦三振目を危く一壘に入り、久野三振に死せしは、前回に似たり、山西、都築菊池、山羽續いてバントに奇功を奏し、池田、木下三笠相並んでのセーフヒットには敵乍ら天晴の働振とや曰はん、敵の生還する正に六

第七回

物々しき敵の振舞かな今度こそは目に物見せんと躍り出でし老将鈴木、太刀風勇ましく微盡になれど攻め立てしが甲斐なく、球に飛んでP.の手に入りぬ、久島死球に出でしも二壘の傷猪的突進に倒されぬ、海部四球を利し、續く水島能く前路を開きしも、栗田の三度振は二人をして

立往生の憂目に合はしぬ、山西、久野、池田等好球を打ち生還する者二、第八回

渡邊、藤崎のゴロ効なくして一の關門に刺されぬ、不破三振して倒る、敵漸く得意の色あり、然れども吾何ぞ屈せん、秦辛うじて一壘に入りしも、山西、栗田の強球にバントも意の如くならずしてB.に流れ、鈴木

の強肩立所に之を一壘に刺す、機を見て三壘に走りし奏は海部の己に廻れるあり、久島より返す球にうたれて死し、此處暫らくは球の綾投、久野の打撃球は砂を噛んでP.を襲ひしも、哀れ一壘の鬼となんぬ、(彼我共零、)

第九回

彼己に納むる事十四、而るに我は未だ一だも入らざるなり、如何でスコンクに終らんや、是ぞ最後の決戦、後なる者共進めや〜と攻めまくれば應援團は盛んなる聲援「ヒツプフレー、ヒツプフレーフレーフレー四高」先づ町田四球

にて例の官費留學、されど餘りに生を急ぐにや二壘の突賊に得意のすべり込も功なく、惜哉球に先を越されぬ、鈴木又四球に出で、久島頻りに後援の實を擧げんとあせりしも、一振二振三振遂に聲なくして倒れり、海部又四球を利して出づるや、鈴木既に三壘にあり、本壘を望む事切なり、爰に於てか水島、頑軀を起し、腕の續かん限り、刃の切れん限り、斬て斬て斬り捲れど喚き叫んで、太刀振翳し、水車なす打振れば球は高く上りて、菊池の手に落ちぬ、鈴木空しく本壘を望んで遂に還らず。

ゲームセットは平野審判によりて命せられぬ。此の仕合に於て彼の得点1+1+1に對する我の、我は破れたり、我は破れたり、敗の一字は吾人の頭上に上りぬ。されど我親愛なる撰手諸士、敗は敗なりと雖も、乞ふ安んせよ、夫れ勝敗は兵冢の常、將復た安んぞ萬全を保せんや、仕合に於て望む所は意氣にあり、區々技の如きは抑も末のみ、競技に於ける吾人は或は彼等が敵に非ざりしかも知れざれど、一片、内抑ふべから

ざる意氣の存せるありて、正々堂々、陣既に崩ると雖も、泰然自若として毫も動せず、終始一貫、全力を傾け盡くして更に遺憾なし、斯の如くんば則ち我撰手諸士は良く責任を果し、校名を全ふしたるものと謂ふべし。嗚呼時や春、校庭の野草は偉麗粹美の天地を現せり、嗚呼時や春、球界占有の時代は來りぬ、校友六百の健兒、豈に亦進取一番、革新振制する所なくして可ならんや、思へ!!!十年の臥薪掌膽は終に無爲にして終りしや。

●劍道試合

三日午前三高の道場に於て(武徳殿は修繕中)、

擊劍紅白勝負
審判員(内)藤高 政治
小關 教

紅組(四高) 白組(三高)
大將 關谷 吾一 大將 岡田饒一郎
副將 田邊 亘 副將 二杉本欣一
渡邊 八郎 齋田量之助
南 慎一郎 越山均之助

谷中峻太郎 吉岡 熊彦
 渡邊 二郎 市尾 保
 原 康二郎 角岡 知良
 進藤 隆一 古賀 好一
 赤羽 初雄 吉武 眞貫
 宮田 武彦 前川莊次郎
 大脇哲次郎 大森 保國
 大久保隆之助 高木 武一
 本多 政樹 吉武 直
 増井 精三 隅田 兵一
 泉崎 三郎 植木 隅
 星野龜次郎 中村彌三郎
 石黒 利吉 渡邊 純
 栃木喜和次 油田竹次郎
 宇野 正雄 明比 竹馬

以て練わたる腕、「此の御面取らすんばあるべからず」とは原が敵を眞二つにせしとき逸言。次いで中堅渡邊、二郎出で敵を斬ること恰も鋭刀の瓜を切るに異ならず、或はつき或は拂ひ、忽ちにして七人を薙ぎしも大勢既に恢すべからず。前川鋭鋒を以て三人を斬り、渡邊、八郎に迫る、八郎は四高の重鎮、事實上の大將と稱せらる。苦戦三人を斬りしも角岡に倒され、田島副將の任を負ひて立ち上りしも妙腕振ふに由なく二人目にして過ぎ、大將關谷、無念を包んで靜に立ちあがる。大勢既に動かすべからず、關谷先づ面を取りしも次いで來れる市毛の胴は見事關谷をして甲を脱かしめぬ、

擊劍大敗の原因は世人太刀の大小に歸するが如し擊劍専門家にあらざる余は其の眞偽を知るに由なきも三高の太刀振は極めて輕快にして太刀の重量も先づ四高のもの三分の二位なるべし又或者は三高の擊劍は技術(クヌスト)にして精神が入つて得ないと誹るものあれど、そんなことは解つたものにあらず、太刀細きより推定せ

し結果ならむ、兎も角も敗れつゝも四高方の戦ひ振り絶えず進取的にして、三高方は退きつゝ、隙をねらひ巧に面小手等を取りしが如し。最も眼につきしは三高方にて油田、渡邊の怪敏、四梭方にて本多、渡邊兩氏の武者振なりき、本多氏が長太の太刀を以てあらはれしときは満場どよめき始めぬ。面を取るや其音聲廣き道場に反響を起さむ許りに響さわたりたりき、勝負は三本、凡そ一時間半を費しぬ。

◎柔道試合

三日午後、野球に破れ劍道に敗れし吾軍は今や柔道撰手に向つて狂せむ許りの熱烈を以て其奮闘を希望せり、

- 柔道紅白勝負
- | | |
|----------|----------|
| 審判員 | 佐藤 法賢 |
| 紅組(四高) | 白組(三高) |
| 大將 小泉 禎次 | 大將 小島友二郎 |
| 副將 久田 丈二 | 副將 有馬松之助 |
| 正力松太郎 | 井上 慶樹 |

- | | |
|-------|-------|
| 河尻 淨環 | 大原 盛三 |
| 菅原 健松 | 關本 賢治 |
| 細 貞松 | 大園竹四郎 |
| 水島 政一 | 澤田 源一 |
| 品川 主計 | 平瀬信太郎 |
| 飯田直次郎 | 坂根繁三郎 |
| 吉澤鎌太郎 | 水谷幸二郎 |
| 長屋 金吾 | 遠藤 常壽 |
| 岸本 祐 | 木部 樹一 |
| 吉田 秀助 | 能一 來吉 |
| 久保 護躬 | 吉武 直 |
| 北澤 哲 | 山岡 景範 |
| 熊田壬午平 | 坂本 信一 |
| 吉田徳次郎 | 橋本庄太郎 |

野球、劍道に破れたる南下軍は柔道に於て其名譽を恢復せり、

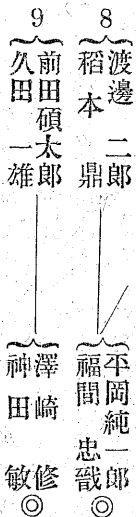
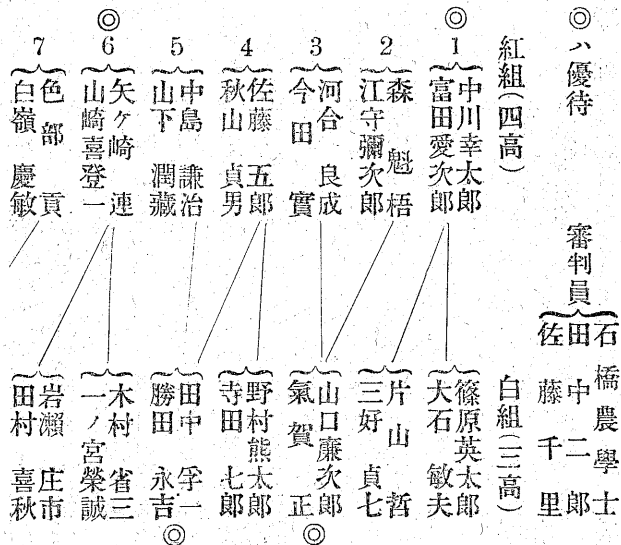
吉田先づ橋本を破り、熊田横に廣き躰を跳らして敵をハネ上ること六人、水谷と分けを取り、當日第一の功名なりき、熊田氏道場を下るや一指を他手の掌に當てたるを見て負傷せしかを疑

ふ豈計らむや六人を倒したるの謂なりしと。次いで二三氏極めて慎重にたゞかひ岸本氏大團、關本を十字に押へ、軀幹小さく大原内股を取る、四高軍此に始めて倒る。長屋腰を入るゝこと數回投ぐる能はず、勇將井上出で、吉澤と闘ふ、吉澤の躰大原に似て小なるも遂に倒るゝことなく副將有馬出で、飯田を投ぐ。品川躍進して出でサ、イツリコミを試むる數回初段有馬殆んど力つきたるとき引きわけとなる。次いで三高の小島將軍出陣す、小島君は實に二段の鏘々たる者、四高の荒くれ無段者四人を破り一撃牙城に迫らむとす、前衛正力、猛然として上り、忽ちにして小島を捕へて無段正力二段小島に勝つを得たり。然れども小島氏の奮闘は實に二段たるに相應せる者にして悠々として迫らざる武者振は敵も味方も三嘆せざるはなかりき。四高軍大將及び副將の二人を残して美事なる勝を得たり。

●庭球試合

四日は岡山對三高の柔道戦、四日雨晴る、兩軍庭球に於て雌雄を争ふ

庭球紅白勝負(七回ゲーム)



後衛中川の働き振り中々に美事、勇將篠原組遂に敗れ片山組脆く退き、山口組森組を走らし勢に乗じて河合組に迫る、河合今田振はず、敵をして第一優待を作らしむ。佐藤組難なく野村組を破り田中組と戦ふ、此の勝負は當日第一の好取組にて佐藤氏のロッピングは正鵠を誤たず、勝田の前衛極めて見覺しく、秋山又武者振男々しかりき、彼我激戦遂に三オールとなり、第七回に於て佐藤組敗る、敗れたりと雖も十二分の面白を施せり只、全軍へ大なる影響を與へしを遺憾とす、此の戦に於て佐藤組破れずは四高軍破れざりしなり、勝敗の決は殆んど瞬間に成立するも奇ならずや。勝田組ついで中島組を破り優待す、午後の戦闘に於て山崎の前衛見覺しく十三ボールを得て十二まで成功したるは史上稀に見る働き振りと云ふべし、木村、岩瀬二組を

破つて優待。色部組振はず平岡組に破らる、次いで渡邊組に迫る、渡邊組は四高軍の大將、平岡組亦三高に覇を稱すと云ふ、特に渡邊組前衛は技神に入ると稱せられ、嘗て信州長野に於て二十幾組を倒し近くは昨秋高岡軍に當りしとき亦七組を薙ぎたる勇將なり、渡邊は一昨日剣道に於て七人を薙ぎし猛將にして庭球に於て亦毫も剣道と劣るを見ず、然れども如何にしたりけむ、渡邊ミス比較的多く稻本をして驥足を伸すに由なく、遂に無念の敗を招き稻本氏は由來保ちし必勝の名を汚すに至りぬ。次いで前田組澤崎組の戦闘となる、前田のバックボトラーは甚だ見事なりしも澤崎病後の躰を以てよく戦ひ第七回目にジュースをくり返すこと十數回にして敗る、共によく戦ひたりと云ふべし、

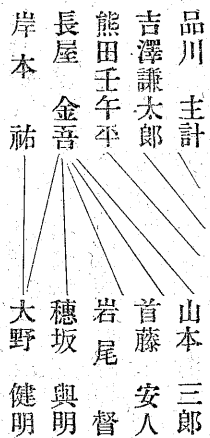
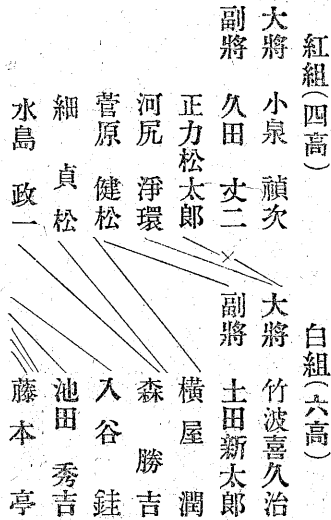
次いで優待勝負に入りしも佐藤組、稻本組を失ひし四高軍は更に振はず中川組澤崎組に破られ矢ヶ崎組山口組に破らる。四高軍庭球の敗は原因何れに存するやを考ふるも、吾人は發見するに苦しむもの也、技倆に於て毫も差あるを認め

す、只佐藤組及び前田組が七回目にて敗れ、渡邊組が驥足を伸す能はざりしに歸するもの、如し。

●柔道岡山對四高試合

庭球軍が盛に火花を散らしつゝありし時一方に於ては柔道軍は六高と戦ひ光榮の上に光榮をかさねつゝありき番組は次の如し、昨日小島を破りたる正力氏は今日は敵將と分を取り久田、小泉二初敗をして徒らに腕を扼せしめしに過ぎざりき。

柔道紅白勝負



●應援團

尙ほ記すべきは應援團の活動である、先づ野球の應援方法は仕合の初り間際に四列縦隊を作つて南下の歌を歌つて大學の門まで出た、それから非常に猛烈なる驥足を以て三高の運動場を一周して事實上に砂烟をあげて數萬の觀覽者を驚した。次いで本壘一壘の中間に一列に陣取つて、南下歌とエールとを以て盛に應援をやつた。我軍振はず形勢非に非を重ぬるに關せず最後まで猛烈に應援を試み、撰手をして終始一貫毫も屈する色なくして奮闘をつづけしめたのである、或者は應援團の無能を誹つた様であるが吾等の見解によれば決してそうでないと思ふ、何となれば僕等は彌次的の小人的の應援は斷じて取らぬ、

例へまけても勝つても、又よし効果比較的大ならずとするも個人の比難に涉る様な應援は斷じて取らぬからだ。

●茶話會

南下軍が在京中に前後數回の茶話會があつた、着京の當日大學四高出身者が大學寄宿舎食堂で大茶話會をやつて呉れた此の日の元氣は非常なもので、僕などは生れてから始めてゐる、それから試合の前日の夕方は三高が南下軍の歡迎會を開いて呉れたし、同日三高茶話會の閉會後大學寄宿舎の南下隊歡迎會があつた。併し最も感深くしたのは應援團が各試合の終了後常に開いて撰手を慰め且つは明日の出陣勇士を奮勵せしめた茶話會である、第一回は野球に敗けた夜八時頃から大學の運動場で篝を焚いて水涌を持ち來つて茶の代理をさせた會を催した。三竹先生が風肅々を歌ふやら、應援隊長が涙を振つて演説をするやら、野球の撰手が「濟まなかつた」と云つたきり二の句が出なかつたやらそれはそ

れは悲壯悲痛、何とも云へぬ光景であつた。悲壯美とか壯嚴美とか云ふものは天地の心と吾人の心と合した時に現はれると云つたが此の會の如きは誰れも皆何とも云へぬ悲壯の美感にうたれたのである、人間が此の様に何時も眞面目で、而して至誠であつたら三日と経たぬ中に大偉人となる事ができると思ふ、第二回第三回と毎日必ず大學の道場その他で開會し最後の日に三高の連中をも招いて訣別の會を催した。

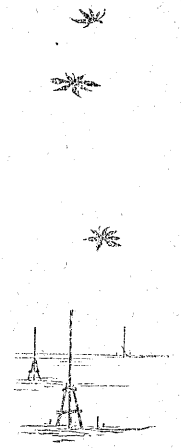
●大學寄宿舎及び三高

寄宿舎

南下軍の宿舎は大學寄宿舎と三高寄宿舎とであつた。大學の寄宿舎は撰手八十名、三高へは應援團の中で八十名程であつた、而して大學寄宿舎では決して諸君の便宜を計つて御泊め申すのではなく大學寄宿舎の自治の精神の存するところを味つてくれとのことであつた。撰手も其の積りで週日の間を愉快に美しく暮した。

費用は賄費か一日二十錢、それに夜具代か一日十錢余であつたのだからあまりかゝらなかつた方だ。

最後に南下隊が心から感謝すべきは大學寄宿舎諸君、及び四高出身大學生諸君、及び三高寄宿舎諸君が非常なる御厚情を以て僕等を迎へて下さつた事である、諸君の御盡力がなかつたならば南下隊は上洛後殆んど二百の迷兒と化したでせう、然るに諸君が何くれとなく非常なる御同情を以て南下隊の事業に御盡力下さつたのは南下隊の名の存する限り否な僕等が眼を瞑して墓に入るまで決して御忘れ申しませぬ、特に大學寄宿舎の専務總代三澤君、千秋君、同四高出身者、温井君、井坂君、藤井君、三高の高木君、坂本君等に深く感謝を申上ます。
僕は尙委細に記したいが試験と云ふ奴が盛に僕をいぢめつゝあるから最早此れで筆を擱く、尙ほ後來再び南下を企てる人がある時には精しい事は僕の方へ御尋ねなさい、何れ四五年間は大學にさまようて居るでせうから(六月二十二日記)



投 書 心 得

- 一 投書は本會原稿用紙に限る
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載せず

明治四十年六月二十二日印刷
明治四十年六月二十五日發行

編輯兼發行者

印 刷 者

印 刷 所

發 行 所

吉 村 政 行

生 沼 倍 男

明治印刷株式會社

第四高等學校北辰會

石川縣金澤市早道町五十六番地

同縣同市穴水町二番丁廿九番地

同縣同市高岡町九十番地

